
呪われた姫神

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われた姫神

【Nコード】

N2524B

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

アイドル瀬戸綾乃を襲った凶刃。それは平穏に暮らしていた母子を巡る陰謀が動き出した証。「倉橋の巫女」とは？綾乃の出生の秘密とは？ストーリーの根幹に関わる秘密が今、動き出す！

プロローグ

ハーバーアリーナ

ステージ付近

明光学園騎士養成コースと、同芸能コースの関係は、ボディガード「する側」と「される側」とも言える。騎士達は、芸能コースの生徒のコンサート会場の警備の一部を、校外実習として担うからだ。

『峰村どこ向いてやがる！殴りたいのか！総員へ警告！一応は実戦だぞ！マジメにやれ！』

無線機越しに担当教員の殺気だった声が響き渡る。

「……まったく、クソ役立たず共め」

「江住先生、そりゃ無理ナイっすよ。こいつらだって初仕事ですからねえ」

そう。一年生で構成される騎士達も、訓練は積んではいるが、何しろ今回が初仕事。

コンサート会場に足を運んだのが生まれて初めてという者も少なくないのだ

とはいえ、コンサートをただで聴けると喜ぶ者は誰もいない。

警備に失敗した時の罰則である相互修正（教官の許しがあるまで互いに力の限り殴り合う）の恐怖を先輩達から聞いているため、決して気を抜くことができないからだ。

そういう意味で、彼らはむしろ胃が痛いほど緊張していた。

全員、スタンブレードを腰に下げ、防刃チョッキにヘルメット―
一部は防弾シールドまで装備―というものの新しい装備で各所に立
っている姿はまるで機動隊員だが、観客達の熱気を前にした騎士達
には、それすら心許なく感じられた。

この日、任務に参加した騎士の一人は言っている。

「戦車が欲しかった」と一。

『入場者は約3万！各自警戒を厳に！コンサート開始まであと1
0分！』

（すごいなあ）

ステージの袖に配置されている水瀬は、その雰囲気正直驚いて
いた。

コンサート開始まであと数分。ファンの熱気は凄まじい。

教官達がひっきりなしに警告を続けているのは、水瀬にもわかる。
この人々が暴れ出したら、自分でも止められる自信はないし、考
えたくない。

『第四分隊！』無線に指示が入る。

『対象が袖に入る。入ると同時に結界展開！』

「復唱、第四分隊、対象が袖に入り次第、結界展開、了解」

何人もの人々を引き連れて、対象はやってきた。

「水瀬君」

親しげに手を振って来るのは、綾乃だ。

「瀬戸さん。調子は？」

「ばっちり、かな？」

袖から観客席をチラリと見た水瀬は、感心したように綾乃に言っ

た。

「こんなたくさんの方の前でよく歌えるね？僕なら無理」

「ふふっ。慣れ、かもね？でも」

「でも？」

「今回は少ない方なのよ？」

「うぞっ」

「まあ、頑張って

ー水瀬君もね

そういつてすれ違う二人。

ステージの幕が上がり、ファンの歓声が沸き上がる。

「天使の歌声」と絶賛される歌姫・綾乃の声が水瀬の耳にも心地よい。

警戒を怠ることなく、水瀬はコンサートの経緯を見守っていた。

『教師達が陣取る司令部に水瀬から通信が入ったのは終盤の頃。

『ステージ上に不審者2、うち1がライトの設置された柱を通り、第7通気口へ逃走！おそらく男性、騎士です！』

「了解、おい、各員へ警戒ー」

教員の一人が無線を担当する生徒に指示を出そうとした途端、

ズダンッ！

何かが壊れる音が連続しておこり、ファンの歓声が一瞬にして止まる。

コンサート会場とは思えない静寂さが数瞬、あたりを支配した後、会場はパニックに陥った。

「状況は！？各員状況を報告せよ！——ええいっ！緊急事態発令！パターンS、第一・第四以外の各員は警備員のサポート！観客の安全確保最優先！」

——なにが起きたんだらう？

いままで歌っていたはずなのに、なんで水瀬君に抱きしめられて
いるんだらう。

綾乃も状況が理解できずにいた。

「いたたたたっ」

水瀬のいた袖と反対の袖にいた人々は、マイクを持ったまま固ま
っている綾乃と、彼女を抱きしめる水瀬が突然現れたようにしか思
えなかった。

綾乃を抱きかかえた水瀬が、そのまま反対側の袖に飛び込んだか
らだ。

「——司令部、対象を確保、対象は無事！繰り返します、対象
は無事！」

「——水瀬、君？」

「大丈夫？」

「何か、起きたの？」

「——あれ」

水瀬が示す先はステージ。さっき自分が歌っていた場所。

変わり果てたその場所に綾乃は声を失った。

自分の立ち位置付近が、何かの残骸で埋められている。
照明の残骸だ。

あのまま立っていたら、死んでいたはずだ。

「司令部、ステージに照明数個が落下！このまま対象の保護を継続します！」

水瀬の珍しく緊張した声に、綾乃は我に返った。

「犯人の目的は対象の殺傷！繰り返します！犯人の目的は対象の殺傷です！指示を！」

——私を、殺す？

カランッ

水瀬が床に放り投げたものが、何かを理解した途端、綾乃は息が止まった。

独特な形をした棒手裏剣一。

綾乃は、それに心当たりがあった。

第二話 「魔の手」

コンサート会場駐車場

「根性いれてやれ！このゲス共！」

「わかりましたあ！！」

一部の騎士達が、一列に並ばされた後、罰則としての腕立て伏せをやらされていた。

相互修正でなくてよかった。

ほとんどの生徒がそれだけが唯一の救いだと安堵しながら腕立てにいそしむのは、綾乃の最も近くにいて、彼女を守る任務についていた第一分隊の騎士達だった。

「初仕事とはいえ、指一本動かせなかっただど！？この役立たず共！明光の面汚しめ！帰ったら再訓練だ！わかったか！」

「はいっ！わかりましたあ！」

「で、君はああいうこと、しなくていいの？」

「お姉さん、僕は仕事に成功しているの」

その近くで話し込んでいるのは、理沙と水瀬だった。

「そ。詳しいこと聞きたいから、こっち来て」

「滅棒、あと何ヶ月だっけ？」

「よけいなお世話よ！」

水瀬が警察に話したことをまとめると、以下のようになる。

- ・ 誰かが照明の上を横切ってすぐに照明が落下した。
- ・ 横切った人物の身体的特徴は以下の通り

- ・ 身長175センチ前後

- ・ 右利き

- ・ ただし、全体としての気配は二人分存在。おそらく、一人が

照明を落下させ、もう一人が瀬戸綾乃を狙ったものと考えられる。

「というと、君は事故ではないと、そういいたいのか？」

「はい。瀬戸綾乃の殺傷を事故と偽装するためです」

「確かに、照明がつるしている柱ごと落下するなんて、普通は考えられないが、しかし、支えていたボルトの劣化などによる事故の可能性も否定できない」

「落下のほんの少し前に魔力の反応を感じましたし、それに」

そういつて、水瀬はハンカチの包みをポケットから取り出した。

「これが決め手です」

ハンカチの中から出てきたのは、さっきの手裏剣。

「照明の落下とほとんど同じタイミングで彼女めがけて飛んできました。狙いは間違いなく頭部です」

「しかし君、変だとは思わないか？ 君はさっき、「事故にみせかけた」といつていたね？ だとしたら」

手裏剣を素手で掴もうとした刑事の手を水瀬は止めながら言った。

「全体に皮膚毒が塗ってありますからさわると死にます。それと、この手裏剣には魔法がかけられています。目標へ命中した途端、粉々に爆発するタイプです。鑑識は近衛へ依頼されることを勧めます」

「手の込んだことだが」

刑事はチラリと水瀬を見ながら言った。

「心当たりは？」

「新たな動きがあるものと考えます。今回の件で済むとは考えられません」

水瀬からの取り調べが終わった岩田警部は、コーヒーを飲みながら、感心したように言った。

「かなりのやり手だな。あのボウズ」

「そうですか？」

「ああ。よく訓練された人間の答え方だ。無駄がないし的確だ。

——本庁は？」

「第一種事件としての捜査指示が来てます」

——目標の頭部を破壊するほぼ同じタイミングで照明を落下させる。頭部はもとから破壊されているが、他人からは照明によって破壊されたとしか考えられない。

というあのボウズの筋書き通りなら、間違いなく、「事故を偽装した殺人未遂事件」ということになるか。

「警部」部屋に入ってきた刑事が報告する。

「ボルトに細工された跡がありました」

「決まりだな」

岩田はコーヒーを飲み干して席を立った。

「——近衛の力を借りることになりそうだな」

『トップアイドルの災難!』

『瀬戸綾乃危機一髪!』

『手抜き工事が原因か!?!』

そんな大見出しが翌日のスポーツ新聞を飾り、朝のニュース番組もほぼ全ての番組で事故が取り上げられていた。

各メディア統一して言えることは

あくまで事故——。

そういう扱いだった。

綾乃にも、簡単にそういう説明がされただけだった。

だが——。

綾乃は知っていた。

あの手裏剣の意味を――。

あれは、事故じゃない。

水瀬君も言っていた。

私は、殺されるところだったんだ。

事故から3日後
放課後

綾乃は帰宅路を急いでいた。

私服の刑事達が数名、尾行を続ける中のこと。
そう。警察は、犯人を誘き出すため、あえて綾乃を泳がせることにしたのだ。

そうとは知らない綾乃は思う。

夕闇が迫るまでに家に着きたい。

いつ、どこからどんなことになるかわからない。
事故の後だからって心配してくれたクラスの何人もの人たちが、
護衛を申し出てくれたけど、私は断った。

もしもの時、誰も、巻き込みたくないから。

大丈夫。

お家だってその角を曲がれば――。

綾乃の意識はそこで途絶えた。

尾行する刑事達が角にさしかかろうとした時、角の向こう側からセダンが急発進し、あやうく刑事の一人をひき殺す所だった。

刑事達のカンが警告した。

怪しい――と。

「おい、ナンバー押さえろ！」

「こちら吉村、本部、本部どうぞ！」

刑事の一人が無線に叫んだ途端、ドンッ。

という鈍い音がして、車のボンネットが吹き飛び、刑事達の目の前で、車は力尽きたように停車した。

「な、なんだ!？」

「あ、あいつ！」

前席から飛び出してきた二人を瞬時にたたきのめし、後席からぐったりしている綾乃を助け出しているのは、水瀬だった。

「警察だ！」警察手帳を手に刑事達が近づいてくる。

刑事達の目の前で、水瀬が犯人の一人の胸ぐらを掴んでいた。

「起きているね？さ。どこの手のものか吐いて」

「……」

口から血をにじませながらも、水瀬をにらみつけているのは、4
0代位の中年の女。

どこかで血の匂いがする、そんな女だった。

首に変な首輪をしているが、今はそんなことにかまっている状況
ではない。

「アタマから無理矢理情報引きずり出してもいいんだよ？ 廃人
なるけど」

「ふっ、ふはははははっ！！」

「？」

刑事に女を引き渡しつつも、女が高笑いを続ける理由が、水瀬に
はわからなかった。

「まるで任務に成功したって顔だね」

「ああそうさ！ 私はミロード様の命を実行した！これで私は天国
に――」

バンッ

女の首が吹き飛び、あたりに鮮血が飛び散る。

ゴトリ

鈍い音を立て、頭部が道路に落ちるのとはほぼ同時に、糸が切れた
人形のように女の体が崩れ落ちた。

「ぼっ、ばかな……こんな、こんなことが」

全身に血を浴び、出来ることと言えばただ、呆然と道路に転がっ
た死体を見つめるしかない刑事達の横で、水瀬はポツリと呟いた。

「この人——」

「知っているのか!？」

——フルフル

ただ、無言で首を横に振った水瀬は続けた。

「この人、自殺兵だ」

第四話 「歌姫の真実1」

トップアイドル誘拐未遂事件

高い話題性が確実なだけに、事件を報道したがるマスコミへの対応に、ただでさえ大わらわになっていた所に、さらに、手先を自爆させるその手口から、第二種事件の可能性ありとして、国家公安委員会が介入して来るに及んで、捜査は完全に混乱していた。

いや、現場すら警察と公安の思惑が入り乱れ、捜査は混乱どころか、実質的には停止状態に陥っていた。

綾乃もまた、表向き「過労による体調不良により」、本当は「警察方面からの、もっといえば近衛の圧力で」仕事を休んでいられるのも、実はそういう事情による所が強い。

「綾乃、体は大丈夫？」

「うん。ありがとうお母さん。もう大丈夫」

学校にもあれから2日間、行っていない。「学校に行く」といったら水瀬君からまで反対された。

お友達とあえないのは、寂しい。

「丁度、ゆっくり休めるいい機会じゃない」

部屋に入ってきた母親がテーブルにココアを置きながら言った。

「ずっとお仕事だったから、休めて神様が言ってるのよ。きくと」

「うん——」

そうだ。

「お母さん」

綾乃はずっと心の中に留めていたことを、思い切って聞いてみることにした。

「こういうナイフみたいなの、知ってる？」

綾乃が机の上から取り出したスケッチブックを母親に見せる。

そこには、綾乃が記憶を頼りにスケッチしたあの手裏剣が描かれていた。

「え？ あら、棒手裏剣かしら？ あなた。むかしから絵が下手だからよくわかんないけど」

「知ってる？」

「ええ。忍者の使ってたアレでしょ？ それがどうしたの？」

「同じの、お母さんも持っているわよね？」

目をパチクリさせ、じっと綾乃を見つめると、母親は笑いながら言った。

「やだ綾乃ったら、お母さんがそんなもの持って——」

「子供の頃、お母さんの部屋で見つけて遊んで、ひどく怒られたから覚えているの。お母さん、この手裏剣って、何？ お母さんとの関係なの？」

「さ、さあ、ねえ。お母さん、よくわかんないわ」

とぼける母親に、綾乃は言った。

「——コンサート会場で、私めがけて飛んできたっていつても？」

母親の表情が凍り付いた。

「綾乃、それってどういう——」

「だから、コンサート会場で私に投げられたの！ この手裏剣が！ 水瀬君がいなかったら死んでいたわ！」

綾乃の母、由里香は、まるで自分に言い聞かせるように、娘に言った。

「綾乃、あなたが何を勘違いしているかは知らない。けどね？警察に任せておけば大丈夫だから。変に想像して思い詰めないで」

「お母さん——」

「あなたは私の子。大丈夫。お母さん、悪運は強いのか？だから、あなただって、ね？」

サアツ——

いつの間にか雨になっていた。

雨の午後

あの時もそうだった。

——生まれ育った倉橋の家を追われたのも。

由里香はリビングの窓から空を眺めながら想う。

物心ついてから、修行ばかりの毎日。

それに疑問を持つことすら許されなかった毎日。

自由なんてなかった。

でも、それでもよかった。

すべては「儀式」のため。

「儀式」を執り行って、家を継ぐため。

家を継ぐことは、私の命より大切なこと。

継げなかったら死ね。

母からそう言い聞かされてきたことに、何の疑問も持たなかった。

水月の儀 みなづきのぎ——

あれから、何年経ったろう。

私が倉橋の家を追われた、あの儀式から——。

ピンポーン

チャイムの音で現実に戻された由里香が玄関を開ける。

「こんにちわ。水瀬と言います。瀬戸綾乃さんの授業のプリントを持ってきました」

ドアの向こうで礼儀正しく挨拶してくるのは、背の低い女の子、じゃなくて、水瀬だった。

「あ、お構いなく」

応接に通された水瀬の前に紅茶が出される。

「いいのよ。悠理君、本当に大きく——」

チラリとアタマのてっぺんからつま先まで見た後、由里香は続けた。

「なるわよ。心配しなくても」

「はあ……どうも」

「ごめんなさいね。綾乃、さっき眠ったばかりだから」

「大丈夫です。僕もプリントを届けにきただけですから」

「本当、残念がるわよ？あの子、いつも悠理君悠理君だから」
クスクス笑う由里香に、頬を赤くする水瀬。

「この前の件で、あれだけのことした子だから、嫌われてるって言うか、迷惑視されてるんじゃないかって心配だったの」

※作者注…綾乃はこの事件が起こる少し前に、水瀬の家を全損させています。

詳しくは楽天ブログ『月夜茶会』内『セレスティカルコール』
http://plaza.rakuten.co.jp/ayano
minase/8000

収録の「何が原因!？」を参照して下さい。……トップアイドル瀬戸綾乃の驚愕の本性がわかります(爆笑)

「家は、おかげさまで建て直しましたから——」

「今回のことは親として感謝しています。二度も綾乃を助けていただいて」

「騎士として当然のことです——ただ」

「？」

「あの、失礼かもしれませんが」

水瀬は考えがまとまらないようで、何度も思案した後で、由里香に訊ねた。

「教えてもらいたいことがいくつか」

「あら？何？」

世間話程度に考えていた由里香の耳に聞こえてきた、水瀬の質問は、意外なものだった。

「綾乃ちゃんって——何者ですか？」

ガチャッ

由里香の手からティーカップが落ちた。

「な、何者って、悠理君、なんか、変なこと聞くのね？綾乃はタダの女の子よ？」

テーブルにこぼれた紅茶を慌ててふきとる由里香に、水瀬は冷静に言った。

「僕も気づいたのはつい最近です。それに、母親としてそうお考えになりたいのは、何となくでもわかります。でも——」

「……」

「……えっと、僕、魔法騎士です。で、ある種の存在を見分けることが出来るんです。今回は例外的に気づかなかったのか、僕自身、事実から目を背けていたのか、わかりません。とにかく、わかるんです。例えば、1000人の人間の中に」

チラリと由里香を見た後、水瀬は続けた。

「——\\」人間以外”が混じっていても」

「——悠理君、何が言いたいの？」

普段、穏やかな由里香の声が固くなった。

「ご理解いただいている通りかと」

「綾乃は私の子です！」

「――」

血相を変えて椅子から立ち上がる由里香を、水瀬はただ、冷静に見つめていた。

「私がお腹を痛めて産んだ子です！私が人間なら、あの子だって人間です！そうでしょ！？一体、何を――！」

「そう、ですね。――わかりました。水月の儀は綾乃ちゃんの出生とは関係ない、ということですね？」

「！！」

由里香は目の前が真っ暗になった。

「……」

「――どこまで、掴んでいるの？」

「お聞かせいただければ」

「……」

「誓います。このことは僕の胸の内へ秘めるだけにすることです」

「でも――」

「このままでは、何か原因で綾乃ちゃんが狙われているのか、見当も付きません。綾乃ちゃんを守るためにも。教えてください。何があったのか」

由里香は席を立て、窓ごしに空を見つめた。

由里香は想う。

あの時の空は、今、この空につながっているのかしら――

数分、由里香には絶望的に長い時間の後、由里香は言った。

「――悠理君」

「はい？」

「少し、おばさんの思い出話につきあってくれる？」

由里香は語り出した。

過去を

あの、封印したはずの記憶を

あの悪夢の儀式を

第四話 「歌姫の真実 2」

約束された道

進めと言われ続けた道

進むしかない道

だから、進んだ道

その先に、なにがあるのか、誰にもわからない。

それでも進んだ。

道の末に、私を待っていたもの。

それは、破滅——

瀬戸（旧姓・倉橋）由里香の回想

私は、倉橋由里香

——違う。

誰も、ただの由里香なんてモノを、必要としていない。

倉橋由里香そのものに意味はない。

そう。

私は、倉橋の巫女——

私は、倉橋の巫女だからこそ、生きる意味がある。

そう、教え込まれてきただけなのか、それとも、私が、そう思い
続けていたのか——。

今となってはわからない。

当時の私にとっても、そして、今となっても、どうでもいいこと
だ。

自分の生きる意味に、疑問すら持つことさえ許されなかったこと
だけは確か。

物心ついた頃には大祓の祝詞を暗唱できたのも、退魔の力を発現し、魔を払う舞を舞うことすら出来たのも、すべて巫女として当然のことだと言われ続けた。

倉橋の巫女なんだから当たり前——。

そう。

そういうものだと思っていた。

「巫女として必要なことは一切するな」といわれ、友達と遊ぶことすら許されず、学校から帰るなり修行の毎日でさえ、私には当たり前だと思えなかった。

私は、他の女の子とは違うのだから。

そんな私が、祖母の死をきっかけとして、倉橋の巫女として最大の儀式、『水月の儀式』を迎えたのは、高校3年の時。

母が中学3年の時、儀式が行われたというから、私は遅かった方だと知った。

だが、今度の儀式は、実施が一族中に母の口から告げられた時から、実行されるかすら疑わしいという様相を呈していた。

倉橋家の伝統に従って母と娶された父との間に生まれた私と、父の死の後、倉橋の巫女としては異例の再婚の末に生まれた妹、有里香のどちらが巫女として儀式に参加するか。

ある者は私を、ある者は有里香を。

すべては巫女の力に隠れた欲望を巡る争い。

くだらない、一族内の勢力争い。

決定権のある母が私を巫女に指名したことで、事態は收拾するかと思っただが、決してそうではなかった。

倉橋の巫女

その力があれば、国内最大級の巫女として中央を相手にしても十分張り合える。

地方のことだ。

倉橋の巫女の地位、権力は、下手な地方議員の生殺与奪すら思いのまま。

倉橋に睨まれてこの地方で生きられる者は存在しない。

故に、皆、その力を欲した。

欲に目のくらんだ者達を選んだ道――――

それが、

血を分けた者同士の殺し合い。

私を可愛がってくれた大叔父が交通事故で死んだ後、私にとって継父が首のない死体となって近くの川で発見されたのを皮切りに、私が覚えている限り死者・行方不明25名。下の者までいれたらその倍では決してきかないだろう。

朝、起きて、今朝までに誰が死んだ。で、始まって、寝る前に、今日は誰が死んだ。で、終わる。

そんな、血で血を洗うような日々が、とうとう儀式の日まで続く。

その間、私は有里香と出会うことはなかった。

巫女を私が担うことを告げられたあの集いの日を境に。

まるで親の敵のようににらみつけてきた有里香の目。

そこにこもった憎悪を、私は確かに感じ取った。

ただ、その時は、それが、その憎悪に燃えた顔が、あろうことが、私が見た有里香の最後の顔になるとは、思いもしなかった。

秋、満月の日

水月の儀が、始まった。

大地を祭神とする倉橋神社の御神体である巨石の周りには幕が引かれ、その中で何が行われるのかは、代々の巫女のみに伝えられる口伝。

いつも禊ぎに使う小川で身を清め、着物を整えた後、先代の巫女――つまりは母――と共に神の座へと向かう。

焚かれた香の匂い

雅楽の音色

満月の月明かり

幕の内で行われるのは、『聖婚』の儀式に近い。

巫女の体に玉依姫を降ろし、巫女を玉依姫として生まれ変わらせる。

倉橋の巫女とは、いわば「器」――。

「器」が満たされた後、それまでの巫女として生きてきた「女」は消える。

儀式の後、巫女は「神」となる。

神として、神の力の使い手として、生まれ変わり、新たな巫女を産む。

そのための存在。

だからこそ、巫女には「一人の人間」としての存在意義など、ない。

それを崇高な使命と思っていた。

自分という存在が消えることなど、どうとも思っていなかった。私に、意味はない。——と。

だが、この儀式は何かがおかしかった。

幕の内で初めて感じたのは、

違和感。

同席した先代の「倉橋の巫女」である母にもそれはわかっていたはずだ。

四方を守護するための守護獣が東西南北バラバラに配置されている。

このままでは、正の力が負として働きかねない。

東が西に

北が南に

ちらりと母の顔を見たが、母の目は、なぜか儀式の続行を命じていた。

教えられた手順に乗っ取り、祝詞をあげ、舞う。

意識を「より高い次元の存在」へと、魔への防御すら忘れ、無我の局地まで高めた意識を解き放つ。

祝詞

香の匂い

雅楽

世界の全てから解放されたような、不思議な感覚は、すぐに感じ取れた。

凄く高い、恐ろしく強い、高次の存在。

私は、その存在を招く

そう。

もう少しで、一つになれる。

私が、玉依姫となり、玉依姫が私となる。

そして、新たなる倉橋の巫女が生まれる。

力がお腹——子宮——に入り込むのを、確かに感じとれる。

暖かくて、泣きたくなるほどの幸福感が、私のすべてを包み込む。

私にはすべてが順調に思えた。

私は幸福感の中で意識を失い、

そして

儀式は、

失敗した。

私が次に目をさましたのは、儀式から1週間も後のこと。

儀式が失敗したことを母から告げられたのは、すぐのことだった。

信じられなかった。

あの感じでは、すべては順調にいったはずだ。

なのに――

驚く私に、母は冷たく言い放った。

有里香を推す勢力が、儀式に乱入。

すべてを破壊した。

儀式の場は血で汚れ、私はその中で力との融合を果たしたらしい。
私をかばった一族のある騎士の血を全身に浴びながら――。

あらゆる儀式で最大の禁忌

血の穢れ

穢れの中で儀式をまっとうしたなぞ、あってはならないこと。
そして、自らがその禁忌に不本意ではあるが、関わってしまった

ということが、どういう意味を持つのか、私は理解していなかった。

——なら、もう一度、儀式を再開すればよいではないですか

——だめだ

——なぜです？あの時、私は確かに力と一つになったのを感じ取りました。

——お前は、もう、だめだ。

——え？

——巫女が『水月の儀』に参加できるのは、生涯に一度のみ。

あまつさえ、お前は儀式を汚した。本来ならば死をもつて報いてもらうところだが……。

——お母様……それは……まさか。

——お前に二度目はない。まして、穢れた巫女なぞ、倉橋には不要だ。

——出て行け。

一切の嘆願は無視された。

無様に泣き叫び、助命を請い願う私を、つい少し前まで私に傳っていた使用人達は、迷い込んできた野良犬のよう追い立てた。

ポツリ

着の身着のまま倉橋の門を出た時、空から落ちてきたのは、雨――。

「……」

すべてが、終わった。

このために。と育ってきた私には、もう、何をどうしていいのか。どうやって生きればいいのか。

何一つ、本当に、何もわからなかった。

――見上げる空

そこにはいつだって、巫女として見上げる空があった。祀るべき星があった。

今、見上げる空には何がある？

頬を流れるのは、雨なのか？それとも涙なのか？

ああ。何もわからない。

私はただ、翼を失った鳥のように、空を見上げるだけ。

そんな私に、何の意味がある？

私に、生きる理由があるのか？

そんな時、そつ。と、私の肩を抱いてくれた手があった。
いずれは倉橋の巫女となった私と結ばれるはずだった瀬戸昭博の手。

彼もまた、私同様、いや、私のために立場を失った身だ。

そつと涙をぬぐってくれた手は何より温かくて――。

心配そうな目で、それでも私を哀れむことなく、彼は言ってくれた。
た。

「必要なのは過去じゃない。未来だ。過去に絶望しないで、二人で未来を作っていこう」

考古学の講師の台詞じゃない。と、今では笑うことも出来る。

ただ、その時の私にあったのは、その言葉だけ。

私は、その言葉にすぎた。

その言葉だけが、その時の私のすべてだった。

だから、私はそれにすぎた。

すぎた結果――

それは幸せか

それとも遠回しな不幸なのか

それはわからない。

逃げるように東京へ来た私だったが、体の異変にはすぐに気づいた。

女として、わかった。

そして、戦慄した。

巫女として純潔を守り続けてきた私にとって、それは絶対にあり得ない異変。

まだ、昭博さんにすら体を許していなかった中での異変。

最初は信じなかった。

いや、信じたくなかった。

あり得なかった。

怖かった。

あの儀式での穢れがどう関係しているのか。

どうしてそうなったのか。

何一つわからない中で、「それ」は私の中で育っていく。

ただ、それだけが真実——。

——儀式から3ヶ月

私は、子を宿していた。

誰の子なのか

いや

ヒトなのかすら、わからない子を——

たまよりひめ
玉依姫

一般には、日本神話に出てくる女神の一人とされるが、誰か一人の女神に対する固有名詞ではない。

玉依姫の玉依タマヨリとは、文字通り「霊依」の意味で、神霊が憑依する巫女、または乙女の意味であり、同時に玉依姫には、女性の子供を生む能力という性的な要素が強く反映されている側面があり、この名を持つ女性は、神婚による処女懐胎によって神の子を宿したり、選ばれて神の妻となったりする。

総じて「強力な巫女的能力の持ち主」をこう呼ぶとも言える。

第五話 「歌姫の真実 3」

妊娠——。

女の幸せ。

私にとっての恐怖。

逃げ場はない——。

巫女として、社家の価値観の中で生きてきた私にとって、命の灯を消すという選択は、どうしてもとれなかった。

妊娠したことを昭博さんの知られるのも、時間はかからなかった。

突然襲ってきた悪阻。

いくら鈍い昭博さんだって、さすがにわかってしまった。

あの時の昭博さんの驚いた顔は、今でも忘れられない。

私は、

昭博さんの顔を見るのが、怖かった。

昭博さんの言葉が、怖かった。

昭博さんが、怖かった。

私に出来たことは、アパートのトイレに逃げ込んで、なきじゃくるだけ。

情けなかった。

悲しかった。

自分が許せなかった。

だけど——。

「おめでとう」

昭博さんは、ドア越しに、そういつてくれた。

「命を育むことって、僕はすごいことだと思うから。だから、今はおめでとうっていわせてもらうよ。本当に、おめでとう」

「……で、でも」

どうしても、いえなかった。

——この子の父親がわからないなんて。

——もしかしたら、人間ですらないかもしれないなんて。

たった一人で世界に放り出された世間知らずの私を守ってくれ続けた昭博さんを完全に裏切ったようで——。

どれくらい時間が経ったろう。

涙が出てこなくなるまで泣き続けた私に、昭博さんの口から出た言葉。

それは、私の知らない真実。

そして、受け入れざるを得ない現実。

「経緯は、大体の所、お母さんから聞いている。大丈夫。代々の倉橋の巫女の中に、同じ経験した人、何人もいたらしいから」

どういう、こと？

儀式のせいで妊娠した巫女がいた？

そんなこと、今まで一切、聞かされたことがない。

あり得ない。

いや、あつてはならないことのはず。

「……ごめん。儀式の後、御母様から教えていただいた。倉橋の巫女が力を得るための水月の儀、それには二通りの意味と目的があるって」

昭博さんは語り出した。

本当なら、儀式の後、新たな倉橋の巫女となった私が、先代の巫女から告げられる真実を。

倉橋の巫女

そして、玉依姫

共通点は、

女。

命を育み、産み、育てる力を持つ存在。

本来、水月の儀は、神降ろしの儀式ではなかった。

神婚の儀式。

巫女は、神と結婚し、その子を宿す。

そのための儀式。

それが、時を経るに従って変質し、神降ろしの儀式へと変化していった。

神の子を宿す儀式を元にして、力だけを巫女に降ろす儀式へと――

この変化によって、水月の儀は、二通りの意味を持つようになった。

一つは、伝統的な神婚の儀式。

もう一つが、神の力を巫女に降ろす儀式。

いつしか、本来の意味合いでの儀式はなくなった。

それはすなわち、儀式は、本来的には邪道なものへと変化していったということ。

元来が神聖極まりない神婚だ。

婚儀を利己的な理由で行うことは、人同士の間でも、邪とされて当然なのだから、まして、神との間では、当然だ。

そんな中でも、本来の意味で、儀式を全うできた巫女、神の力ではなく、その子を胎内に宿した巫女は、決して多くはないものの、確かに存在する。

例えば、倉橋時深くらはし・ときみを産んだ平安時代の巫女。

彼女もまた、水月の儀によって子を宿した。

そして、君も――。

「――僕も、君を家から放逐すると聞いたときは怒ったよ。身重の娘に、なんてマネするんだって。でも、御母様は、むしろ、君を守るためにやむを得ずやったんだって、今ならわかる」

「……どういう、ことですか？」

「多分、御母様は、倉橋の巫女として、君が子を宿したことがわかったそうだ。だからこそ、焦った。君と、その子を、どうやら、守れるかって」

「？」

「その子を、周囲がどう見る？ 力のためなら、血族をも殺す連中が」

「――！」

「稀代の巫女、神の子と祭り上げ、その子をどうするかかったものじゃない。それを御母様は防ごうとした。単に儀式を失敗した巫女の出来損ないとして、一族から放逐し、一族の目から君を外す。一族の目が、次なる巫女倉橋有里香へと移ることで、君は救われる」

「……」

「そういうことだって、御母様は言っている」

「わ、私は……」

「普通の価値観からすれば、儀式は血で穢れたことになる。だけど、血の穢れの中で人は生まれてくる。命を育むための儀式だよ？血で穢れるほど、あの儀式は軽くないし、御母様は言っていたよ？儀式が終了した時点で、君は血の穢れを浴びたって」

「あ……あの……」

驚くなという方が無理。

「どこまで信じていいかわからないことだよ。僕だってそう思う。でも、生まれてくる子供は、そんなことが問題になるのかな？父親が誰かとか、そういうんじゃないよ。大切なのは、その子が君の子だったことじゃないのか？」

「で、でも……」

「生まれてくる子供に罪はない。だから、きちんと育ててあげれば、生まれてくる理由なんて関係ないはずだよ？そりゃ、確かに、御母様の言葉は、僕自身、言われてはいそうですかって理解っていうか、納得できる内容じゃない。ただ、ただね？」

しばらくの沈黙の後、昭博さんは、言いづらそうに、言葉を選んでいた。

「御母様は、納得していたよ」

「あの……こういうの、本当はオトコがいうもんじゃないって、思うけどね？もし、君が妊娠していたら、伝えて欲しいって、御母様から言われていることがあるんだ」

「御母様が——？」

「いい子に育ててくれ。そして——」

「……」

「愚かな母を、許してくれって……」

私は、声を上げて泣いた。

ドアを開け、昭博さんの腕の中で、泣き続けた。

何一つ、何一つ孝行もせず、逆に母を恨み、そして二度と出会うこともなくなった私。

そんな私が、今、母になろうとしている。

それを、私は恐れている。

命を育むことを、私は恐れている。

私を育んでくれた母と同じ事を、私は恐れている。

だめだ。

私は、母の娘失格だ。

ずっと、そう思っていた。

きっと、そんな心すら、母はわかっているんだろう。
わかった上で、私を励ましてくれている。

そんな母の言葉が、私をふっきれさせてくれた。

姿を見なくても

声を聞かなくても

きっと

きっと、励ましてくれている。

そんな、気がしたから。

だから、母に申し訳なくて、私は泣いた。

そして、決めた。

倉橋の巫女、最後の勤め

この子の母として、この子を産み、育てる。

そう、決めた。

この子が神の子でも

例え、悪魔の子でも

それでも、私の子

倉橋の巫女の子だ。

それでたくさんだ。

私は、この子を産み、育てる。

ただ、それだけなんだ。

段々大きくなるお腹に喜びを感じながら、私はこの子が生まれてくる日を指折り数えて待った。

昭博さんの先輩、水瀬さんが世話してくださった借家に移り住んだ私は、同じく身重の水瀬さんの奥さんと、どういう子が生まれてくるか。どう育てたいか。そればかりを話題にして、日々を過ごした。

絶対、女の子にしたいの

水瀬さんの奥さん——遥香さんが力説すると、

跡取りが欲しいんだが……

と水瀬さん——由忠さんが反対して、遥香さんに怒られる。

——産むのは私です！
——ってものなあ……。

どっちでもいいけど、元気な子がいい。

昭博さんは、いつも素晴らしいながら、「こういうの、いいかな」と、生まれてくる子供のために選ぶものは、女の子向けのものばかり。

由忠さんと昭博さんが顔を合わせて真剣に悩んでいることといえ
ば、生まれてくる子供達にどんな名前を付けるか。

遥香さんは、「悠理」って名前にするって言い張っていたけっ
け——。

そんなちよつとしたことが面白くて、楽しくて。

人生で、こんなに幸せな時は、今までなかった位、幸せだった。

私には、未来がある。

そう、実感できたから——。

そして、15年前の7月9日午前11時23分

私は、母になった。

第六話 「歌姫の真実 4」

「後は、悠理君も知っている通り、ということにしておいていい？」

由里香は、小さくため息をつく、水瀬を見つめた。
子を産み、育てあげた女の、自信に満ちた眼差しだった。

「……じゃ、こっちからも聞かせてもらっていい？」

「答えられる範囲で」

「——倉橋が動いているというの？」

「調べない限り、何ともわかりません。ただ、情報では」

水瀬は、少し迷った後、由里香に言った。

「新たな水月の儀が近々あると」

由里香は一瞬、目を見開いた後、自分を落ち着かせるために大きく息を吐いた。

「有里香の子……そうね。もし、私が跡を継いでいたら、綾乃が勤める事だものね」

——時が経つのは、早いわね。

倉橋を追われてからの年月を思い、もう一度、窓越しに空を見つめた由里香だが、事の重大さに気づいて、水瀬に言った。

「——悠理君？」

「はい？」

「つまり、水月の儀を、今年、やるというの？」

「ええ。確か、12歳の子と」

「12歳!？」

「え?ええ。確か、そう聞きましたけど」

「何て事なの!?!やってはならないことじゃないの!」

「というと？」

興奮気味の由里香に戸惑いながら、水瀬は由里香に訊ねた。

「巫女の跡を継ぐには、年齢的には――」

「違います!いい?水月の儀はね。その日の星や月の配列の他にもいろんな条件を厳しく調整して行われるけど、その中でも、最も大切とされるのが、干支なの」

「今年って確か」

「丙午よ。悠理君、聞いたことない?「丙午の女は男を食う」って」

「ええ。僕も神社の出ですから。確か、火の兄ひのえで、火、午も火の連想が元になっていきますよね」

「水月の儀は、水の儀式でもあるのよ?水の儀式を、火の属性が

強い年に、同じく火の属性が強い子にやらせる？そんなバカなこと！儀式が成立しないわ！”火に火”の年に産まれただけでも、水月の儀は受けられないしきたりなのに。それをなんで―――」

「有里香さん、一人しか子供が産めなかったそうです。だから、意地でも跡を継がせたいと思っているんじゃないやありませんか？その子が儀式に成功すればまあ、よし。よしんば失敗すれば、多分、追われた身とはいえ、その―――」

「……有里香」

呆然とした由里香は、ただ、ティーカップの中に映る自分の顔を見つめるだけ。

数分後―――

「悠理君、まさかと思うけど……」

「はい？」

「綾乃を狙う理由も、そこにあるの？」

「……壬寅の年の生まれです。十干という壬は”みずのえ”、水の属性。十二支でいう寅は”いん”。陰に通じ、女性を指す、つまり」

「水の属性を持つ女―――綾乃がそういう解釈で見られている……」

由里香にはその意味がわかっていた。

「そんな……」

「瀬戸さんは倉橋の巫女の子、つまり、巫女の血を持っています。」

水月の儀を執り行うのにふさわしい巫女としての」

「有里香……まさか」

「妹さんが、自分の娘に跡を継がせることには、その生まれ年から反対の声も根強いそうです」

「だから、綾乃に目が注がれた」

「もし、瀬戸さんが普通の女の子として生活していたら、もしかしたら、こうはならなかったかもしれません。しかし、彼女はトップライドル——目立ちすぎます。誰かが、倉橋由里香の子と知って、それを倉橋有里香に反対する勢力の耳に入ってしまったとしたら」

「……」

「倉橋有里香の勢力にとっては邪魔どころの存在ではなくなる。かといって、反対勢力にはこれほどの有効な手駒はない。一方は殺したい。もう一方は生かして利用したい。ある意味単純で、ある意味複雑な状況です」

「……」

真っ青になって震えている由里香に、水瀬は平然とした顔で言うのけた。

「僕が守りますから大丈夫ですよ」

「え？」

「瀬戸さんは僕の友達です。友達が困っているなら助けるだけです」

「……悠理君」

「だから、守ります」

「……そうね。悠理君、いつだって綾乃の事、守ってくれていたものね」

由里香は席を立つと、水瀬に深々と頭を下げた。

「母として、お願いいたします」

「わかりました」

トテトテトテー

階段を誰かが降りてくる足音がそのまま二人のいるリビングに来る。

ガチャ

「お母さあん。なんかお腹空いちゃったあ。何か——」

猫柄のパジャマ姿で寝ぼけ眼をこする綾乃が入ってくる。

体の動きは緩慢だが、ぼおとした目で目の前にいる水瀬を見つめる表情だけはよく動く。

その動きから、水瀬には、綾乃が考えていることが手に取るようにわかった。

—あれ？水瀬君？

—ここ、私の家よね？

—なんで水瀬君がいるの？

—えっと……

ドアが開いてからきっかり1分後—

状況がここまでかかってやっと理解できた綾乃が勢いよく部屋から飛び出していく。

足音から、自分の部屋へ駆け戻ったらしい。

部屋からドタバタ音がしているのは、どうやら着替えているからだと思うが……。

「はあ……ごめんなさいね？後できつく言っておきますから」
「クスッ。いえ。いいですよ。瀬戸さんだって知らなかったんですから」

「昔から朝に弱い子で困ったものだわ」
「ええ……」

水瀬にとって、幼かった頃のおぼろげな記憶の中でも、一番よく覚えているのは、昼寝の時に見せる綾乃の無邪気な寝顔。

かわいいて、その寝顔を見つめるのが、なによりうれしかったものだ。

——起き出した後の騒ぎは、出来れば思い出したくないが。

「人って、簡単には変わらないんですねえ……」

「変わって欲しいことだってありますよ。親としては」

「大変ですね。親って」

倉橋邸

当主の間

奥まった部屋の中で、巫女装束に身を包んだ女性と、背広姿の老年の男性が向かい合って座っている。

男の話に、女の表情は次第に険しくなる。一方の男の表情は乱れることはない。

「――申がしくじったというのか」

「申し訳ございません」

「奴なら大丈夫だといったのは、お主ではないか」

「水瀬家の者の介入がありましたもので」

「水瀬が？」

「正しくは、水瀬の嫡男です。本人にはその自覚がなかったものと思われませんが、結果としてその行動は我らの任を阻害し、ひいては倉橋の前に立ちふさがったことに」

「水瀬家の愚か者めが……して、どうするのだ？」

「申は始末いたしました。もし、その御意志がございましたらば他の者に当たらせませう。ただし」

「ただし？」

「この件、水瀬家經由で近衛も嗅ぎ回っております。下手な動きは倉橋の地位にどんな影響が出るか知れたものでは――」

「倉橋を侮辱する気か？」

男は首を横に振った。

「我ら数百年、代々倉橋に仕えてきた身。そのご恩と共に忠誠が揺るぐことはございません。なればこそ」

「倉橋はたかが近衛程度で揺らぐものではないわ！」

激高した女が突然立ち上がり、手にした茶碗を男に投げつける。

「黒！こんな所で何をのんびりしておる！？さっさと行ってあの娘の首をかいてこい！そのためのお主達だろうが！？」

「有里香様……」

「水月の儀は私の子が行うのだ！何が火だ！私の子、倉橋の巫女の子、ただそれだけが大切なのだ！それすらわからぬバカ者どもめ！黒！殺せ！あの女の子だぞ！お主の弟を死に追いやった女の子だぞ！殺せ！殺せ！殺すのだ！」

「……全ては、御心のままに……」

殺せ！と叫び続ける女に一礼すると、男は立ち上がって部屋を出て行った。

未だ背後からは殺せの声が聞こえ続けてる中を――

補足…干支については、ほとんどメチャクチャです。作者にはそん

なに知識はありません。ツツコミは勘弁してください（＾|＾）。

第七話 「追憶の詩」

綾乃の家を辞した後、水瀬は歩きながら考えを巡らせていた。

由里香には言わなかったあの時のこと。

誘拐された時、綾乃は右腕に軽い切り傷を負った。

絆創膏でも貼っておけばなおる程度だったが、水瀬はそれを治癒の術でなおそうとして、そして、出来なかった。

その光景に、水瀬は戦慄した。

治癒の力が、綾乃に触れるか否かのタイミングで「消滅」したからだ。

—え？

何度やっても結果は同じ。

術に失敗したか？とも思ったが、間違いなく力は「消滅」してることを水瀬も認めざるをえなかった。

中和現象——

魔法には、使い手によって独特の波長があり、波長が全く同じ者は原則として存在しないことになっている。

では、仮に同じ波長を持つ者同士が存在していたとして、その者同士が戦ったらどうなるか。

現実には存在しないことになっているから、仮定の域を出ることはないものの、この場合、互いの力が中和され、結果として力は消滅

することになる。

それを、中和現象という。

ありえない。

水瀬は自分に言い聞かせるように、口の中で何度も呟いた。

絶対にあり得ない。

いや、あつてはならないことだ。

なぜか？

魔法を使う者の力が強ければ強いほど、波長も強くなる。

当然ながら、水瀬の力を消滅させるほどの波長を持つなら、それは――。

家に戻る途中の水瀬は、足を止め、空を見上げた。

都内某教会内執務室

「瀬戸綾乃の誘拐に失敗したことは知っている」

革張りの重厚な椅子から立ち上がり、いらだたしそうな口調を隠そうともしないのは、牧師姿に身を包んだ背の高い男だった。

「は……」

対して神妙な顔で男の様子をうかがうのはシスター姿の女性。金髪の碧眼の上に整った美しい顔立ちが人目を引く。

「で？いつ、再開するとかね」

「現在、瀬戸綾乃は自宅にありますが、警察の監視が厳しく」

「言い逃れは聞きたくないな。私は、いつ再開するのかと聞いているのだ」

「……」

「イーリス、私が何のために君に白銀兵団を貸していると思っているのかね？彼らをピクニックにでも連れて行けどでも、私に命じられたというのか？」

「……いえ」

「10日だ」

「……」

「それが最大の譲歩だ。手段は問わない。あの娘を手に入れていい。いいか？もう一度言う。あれは人ではない。人ではないからこそ、今回の召還計画には必要不可欠な存在なのだ。教団のため、犠牲は厭うな！」

「——全ては、神の御為に」

「そうだ。期待しているぞ。イーリス」

都内某所 天野原骨董品店

「おお。水瀬ではないか」

ガラクタ（神音曰く『商品』）の間からひょこっと顔を出したのは、店番の神音だった。

「こんにちわ。かのん。店長は？」

「おお。奥にいらっしゃるぞ」

「通るね？」

ガラクタを器用に避けつつ、奥の部屋に入る水瀬。
ギイッ

黒光りした年代物の扉の向こうは、店と同じくらいの広さの書斎になっていた。

執務机に座るのは、先ほどの神音と同じ顔、同じ姿の女の子。

「これ。悠理ったら、ノックくらいしなさい。レディの部屋ですよ？」

「ごめんなさい。神音^{かみね}おばあちゃん」

バツが悪そうに頭を下げる水瀬に、神音と同じ姿の女の子は優しく言った。

「いらっしやい。どうしたの？珍しいじゃない。どれ、お茶でも入れてあげましょう」

「召還獣の件ではお世話になりました。」

ソファーに腰を下ろしながら礼を言う水瀬の前に、気が付けば、どこからか出したのか、紅茶が置かれていた。

「いえいえ。私も驚いたわよ。よもや獣を入れておく時空の網が破れていて、その中に妖魔が紛れ込んでいたなんて」

「召還獣は妖魔達にとって格好のエサですからね。ま、よく妖魔を召還できたって感心はしましたけどね」

「やっぱり、私の製品は間違いないわよ？」

「……そのおかげで僕がどれだけ——」

「はいはい。で？聞きたいのは、あの綾乃っていう女の子のこと？」

「え？」

「シルフィーネ、いえ、遥香さんから連絡が来ますよ？どうせ悠理が行くから面倒見て欲しいって」

「はは……」

「ま、いいわ。結論から先に。悠理、あの子にあなたの魔法は通じません。ただ、剣なら間違いなく殺せます」

「いえ、別に殺したいわけじゃ」

水瀬は、綾乃が敵と勘違いされていると笑って済ませようとした

が、神音の口調は冷酷な程、真剣なものだった。

「殺しなさい」

「——え？」

「あれはあってはならない存在です。野放しにすることは、魔界にとっても、ひいては天界にとっても、困ります」

「おばあちゃん？」

「だから、殺しなさい」

「……どういう、ことですか？」

「魔界の機密事項ですから答えられません。あなたは自分の生来の職務を全うする意味で、あの子を殺せばいいの」

「できません」

「……だめ？」

「だめです」

「どうしても？」

「どうしてもって……」

じっと見つめ合う二人だが、不意に神音の方がため息混じりにソファーにぐったりと寄りかかりながら言った。

「簡単に言えば、あの子は、あなたの『対』なのよ」

「対？」

「あなたに対抗する意味で作られた存在といえはわかるかしら？」

「それが、なぜ人間界に？」

「そのきっかけが、あなたが関わっている事件の発端なのよ。何がどうなったかなんて、誰にもわからないわ。ただ、あの娘の母親が、あの子の基を自らの胎内へ召還してのけたっていう、もう信じられないことがあったという事実だけが全てよ。わかるでしょ？その存在の異常さ。厄介さが」

「じゃ、瀬戸さんは……」

「遥香が生まれたときから3年がかりで調べた結果よ。わかるわね？この意味」

「そんな……」

それは、水瀬にとっては信じられないことだった。

いや、信じたくない。

信じたくないから、

否定してもらいたくて

ここに来た。

それなのに

「あの子は、あなた同様、ただの人間じゃないわ。——ううん」

「あの子は、あなたと同じなのよ」

水瀬は、目の前が真っ暗になった。
その意味が、わかるから。

数分後

「どうしても——どうしても、殺さなければならぬ、存在な
んですか？」

うつむきながら、やつの思いで水瀬は言葉を紡ぎ出した。
あまりのことに、もう思考が働かない。

「いいえ？」

「へ？」

アゼンとした顔で神音を見る水瀬。

「ぶっ——」

神音は耐えられなかったという顔で吹き出した途端、腹を抱えて
大爆笑していた。

「お、おばあちゃん？」

「キヤハハハハハハハハッ！も、もう！悠理ったら、マジに
とるんだもん！そういうところ、由忠譲りね、あなたって！」

「お、怒りますよ！？」

「ご……ごめんなさいごめんなさい……あーっ。笑ったわ」
「くっ」

「孫に自分の嫁を殺せだなんて、私が言うはずがないじゃないの！」

「はあ？」

「遥香さんはもうずっとその気なんだからね？他の子連れて行ってもだめよ？私も認めません」

「……あの、です、ねえ」

「悠理、でもね？」

やはり来るんじゃないかった。

そう思う。

知らない方が幸せなことだってあるんだから。

例えば、これが、そう。

「あの子があなたと同じっていうのは、本当よ？」

1週間後 某放送局食堂

トップアイドルである瀬戸綾乃が一週間も仕事を休んだことは、確かにあちこちで話題を呼んだ。

過労による体調不良のため、大事を取って静養させた。

というのが事務所側の説明だったが、芸能記者達はこぞって「瀬

戸綾乃は先日ステージでの事故でケガをして、その治療のためだった」とか、「事故がトラウマになってカウンセリングを受けている」など、ありもしないことをさもあるように書き立てた。

書き立てる――。

そういう意味で暴走したのはインターネットの掲示板だった。

瀬戸綾乃は某所に監禁調教されている

瀬戸綾乃は同級生の北条瞬とそういう関係にあり、事故にかこつけて引き離された。

瀬戸綾乃が実は妊娠しており、その処置のため、一週間休むことになった。ちなみに父親は北条である。

とか――。

ゴシップで済むことだが、この時名指しされた北条が、明光学園内で何者かにより袋だたきにあい、救急車で運ばれたことなど、どうでもいいエピソードを生み出したものの、とにかく、瀬戸綾乃は仕事に復帰した。

とはいえ、瀬戸綾乃の身边警護は並はずれたものとならざるを得ず、しかも、彼女の警備がきつくなったことをマスコミに感づかせないため、建前上は「明光学園の騎士養成コースの生徒達の実習訓練」のため、警察は彼らへの「騎士警備部を中心とした要人警護に関する指導」のため、具体的な警護“訓練”対象として、綾乃を含む数名がピックアップされ、それぞれの護衛・指導任務に就くことになった。

綾乃の護衛という訓練に参加したのは、明光学園から水瀬と女生徒5名、警察からは騎士警備部の女騎士3名。

ただし、水瀬は遊撃部隊的存在に位置づけられ、女生徒達とは行動をほとんど共にしていない上、当然、女生徒達には、本来の目的は告げられていない。

事情を知らない彼女達にとっては、あくまで訓練であり、それほど真剣になる必要もない。

「ま、テキトーにやってりゃ、大丈夫よねえっ」
そんな気楽なつもりで参加していたものだからー。

「ほらっそこっ！ぼつとしない！」

「何やってのんよ！学校で何習ってきたの！？」

「泣きやあいってもんじゃないのよ！やる気ないなら辞めてしまいなさい！」

騎士警備部の騎士からはことある事に放送コードギリギリの罵声が飛び、彼女達は、泣きながら訓練が一日も早く終わることだけを祈り続けるハメに陥った。

一方の水瀬はさすがに綾乃の安全がかかっているから、気を抜かず仕事に励んでいた。

実に珍しく。

訓練は1週間の予定、1日目で水瀬が仕留めた不審者の数は実に12名。

内々に仕留めたものの、その数は警察が動くのに十分だった。

そして、いつものあのヒトが話に加わってくる。

ご愁傷様。

「で？どうして君絡みで私が動くことになるのよお」
ボヤきやながら水瀬の前に座るのは理沙だった。

「近衛絡みだもの。多分、他の人がやったら、出世にヒビく厄介

事だからじゃない？」

「はぁっ。私、出世街道から外れちゃったもんねえ（T|T）」

「お気の毒様」

「ま、色々あったからだけど、こうして目の保養出来るのは、いいものよねえ」

「……切り替え早いね。さすが官僚」

ティーカップを水瀬にぶつけた理沙の視線の先には、普段、モニターの向こうでしか見ることが出来ない芸能人が生で動いていた。

「ほら、あれ、ジャニズのNewじゃない？未成年飲酒と集団婦女暴行の常習犯！ほら、あの頬傷のあるヤツ、ほらほら、あれ！ラッパの塚窪揚水じゃない！？血液検査やったら一発で芸能界永久追放されるって言う！」

「……ヤバくない？」

「あーっ！検挙してやりたい○○共が揃ってるう！もうすっごいわ！」

「お姉さん、喜ぶところが違うと思うけど」

「だって芸能人って検挙すりゃスゴイコトになるもの！外部からの圧力で、あの一課の中村の○○○○が胃潰瘍になる無様な姿が目に見えちゃう！」

「お姉さん、かなり鬼畜な性格してるんだね。ホントは」

「いいのよ。部下の醍醐味ってのはね、上司に詰め腹切らせて陰で笑うことなんだから」

「……」

村田理沙の経歴は、確かに左遷された負け犬警察官僚のそれだった。

しかし、水瀬には、上司達が問題のありすぎる理沙を体よく現場に追いやってただけにしか思えなかった。

つまり、彼女の上司に同情していた。

「お待たせいたしました……あの、もう少しお静かに」

ウエイトレスが理沙の前にランチセットを並べながらそつとささやくように注意する。

「あらごめんなさい」

見ると、今まで食堂にいた芸能人が一人残らず姿を消していた。

「営業妨害、ってヤツかな」

広い食堂の中、二人きりでポツンと座る水瀬がバツの悪そうな顔で呟いた。

「関係ないわよ。自業自得。叩けば埃が出てくるからね。芸能人なんてみんな」

「ははっ……（^|^-;）」

一瞬、少し前の綾乃との修羅場と、その被害額、そして事件になった場合の綾乃の罪状の数々が水瀬の脳裏をかすめた。

「た、確かに……」

「―――で？綾乃ちゃんの件、ホントに大丈夫？」

「不安ではあるんですけどね。でも、逆に人目に付く所にいければ敵の半分は手が出せないわけで」

「残り半分から守っていればいい。そういうことね？」

「そう」

「―――でも、君にも感心がある人、いるみたいだよ？」

「……みたいですね」

チラリと視線を送った先には、数名の取り巻きに囲まれながら、じつとこちらを見つめている初老の女性。

顔立ちこそ温厚だが、スーツに身を固めた姿からは敏腕な手腕がにじみ出ている。

「私はやり手です」と書かれているようにすら感じる女性が、ちらりと水瀬が見たことをきっかけに席を立ち、水瀬達に向かって歩き出す。

「お知り合い？」

「——どっかで見た気がするんだけど」

ツカツカツカ

グイッ

「わっ！」

女性は、突然水瀬のアゴを掴むと自分の方に向けさせ、まるで美術品を鑑定するかのように水瀬を見つめた。

「あ、あの？」

「顔小さいし、目は大きいし、顔立ちもアゴの形もいい」
グイッ

突然、口の中に指を入れられ、歯ぐきがむき出しになる。

「白い歯、黄ばみなし。手入れされているし、歯並び申し分なし」
ブツブツと呟きながら水瀬の体のあちこちをさわってくる女性に、
水瀬は困惑した。

「あ、あの？ち、ちょっと止めてください！（＜――＞）」

相手が魔力の使用とか、そういった方面で不審な行動を取れば、
水瀬はためらわずにこの女性を始末しよう。だが、この女性の行動はそういった方面とは全く異なる。

水瀬は、そこに困惑していた。

「背は低いけど、足は長いし、体つきも華奢だけど合格点。透き通ったいい声しているし、音程も理想以上……か」

「は、はあ？」

ようやく水瀬を解放したかに見えつつ、両肩をがっちり掴んで逃がさないようにしているそののなさ。

「そちらの方、保護者の方？」

チラリと視線を理沙に送る。

「まあ、あまり関わりたくないんですけど」

「お姉さん……（T―T）」

「そう。ね？君、芸能界、興味ない？」

「いつ、いいえ？」

「ダメよお！いい？まだ夢を持たなきゃ！せっかくテレビ局来てるんだし！ね？こういう所で活躍してみたいって思ったことはあるでしょ？あるでしょ？ねっ！！」

ガシッ

グイグイ

水瀬の頭をわしづかみにして、力づくで何度も頷かせる。

「まあっっ！そう？そうよね！そうよね！やっぱり女の子なんだもん！芸能界に興味あって当然よねえ！さっ、早速——」

「お、お姉さん！助けて！——ハウッΣ（ODO＝」

助け船を求めた水瀬の視線の先の理沙は、あまりの愉快さに腹を抱えて悶絶していた。

「ヒ、ヒドイ（T|T）……あんまりだ」

「いいのよいいのよ！私が一人前のアイドルとしてデビューさせてあげるから！」

「あ、あのお、僕、今日は仕事で、しかも、僕は」

「あらあらアルバイト？大変ねえ。でも、もっといいお仕事したいでしょ？したいでしょ？それに、まあっっ！僕だなんて！もう合格！一切のオーディションいらないわ！さ、こっちへ！」

引っ張られていった先は、レコーディングルーム。

なんと、丁度、綾乃が撮影前に音合わせを終えたばかりだった。

綾乃の無事を確認できて安堵したのもつかの間、女性に引っ張られた水瀬は、問答無用で“文字通り室内に放り込まれた”。

「み、水瀬君？」

「せ、瀬戸さん助けて！」

慌ててドアに向かった水瀬の前で無情にもドアは閉まった。

「あら、綾乃さん」女性は綾乃に一瞥を喰らわすと、あちこちにテキパキと指示を出す。

「小林！さっさと曲リストもってくる！須藤！ぼつとしてない！いい？音響監督なんだから、この子の声！ちゃんと評価して！いい加減なことやってたらタマ潰すわよ！？」

——まだ、名前聞いてなかったわね。私は信楽房江、芸能プロダクション「ピースメイカー」の社長をしております。あなた、お名前は？」

あまりの押しの強さから本能的に逆らわない方がいいって判断した水瀬は、反射的に答えてしまった。

「み、水瀬、悠理です」

「まあまあ。芸名いらないわね。悠理ちゃん？カラオケくらいやったことあるでしょ？一曲でいいから、歌ってみて」

「へ？いえあの、ぼ、僕は」

「一曲歌ってくれたら、今日の所は勘弁してあげる」

「ほ、ほんとうですか？」

「信頼第一がビジネスの基本よ？カラオケ流してあげるから」
「ううっ……」

困った。

水瀬は困惑していた。

実は、水瀬は歌を歌ったことは、物心ついてからほとんどない。というか、教養として音楽を習ったものの、趣味として歌ったことがないのだ。

だから、いきなり言われても何を歌っていいのかすらわからない。

そうだ

心当たりが一曲だけあった。

中学時代、英語の勉強の一環として教わった曲。

教育熱心で、学校に慣れない水瀬に対しても真剣に接してくれた、

水瀬にとってのたった一人の“先生”――。

メガネがトレードマークの、あの先生が教えてくれた曲なら、なにかなるかもしれない。

「あ、で、でも、あるかな」

「ここはテレビ局よ？何万曲でもカラオケにしてあげるわよ！さ！」

「えっと、Midnight with the Stars
って、確かそんな曲なら……」

「待ちなさい……何やってんの！パツと出しなさい！パツと！」

水瀬が初めて歌った人の作った曲。

Midnight with the Stars

真夜中、星と君と――

先生が好きな映画に使われた曲だと聞かされた。映画のタイトルを聞いたら、ほとんどのクラスメートがなぜか引いていたっけ。

数分後、イントロが流れ出す。

目を閉じた水瀬の瞼の裏に映し出されるのは、あの日のこと。

あまり話しも出来なかった同級生達と一緒にいたあの日。

自分を見つめるみんなの顔。

教壇に立たされ、みんなの興味深げな表情にさらされた時、僕は恥ずかしかったんだよ？先生――。

ちらりと横を向いた先には、カセットプレイヤーの再生ボタンに指をかけながら微笑む先生の顔。

みんな、キレイじゃなかった。

先生の授業も、ホントは楽しみだったんだよ？

でも、もう、会うことは出来ないんだよね。

あの戦争で、みんな、みんな死んだから。

先生も――

ああ、先生の授業も、もう、永久に聞くことができないんだな。

あのね？ 実はあの日、僕、宿題、忘れてたんだよ？

ごめんね。先生。

水瀬は歌う。

二度と戻らぬ過去への追憶と共に――。

Midnight with the stars and you

(真夜中に星達と君と)

Midnight at a rendezvous (真夜中の

逢瀬を)

Your eyes held a message tender

(君の手にはやさしいメッセージ)

Saying I surrender all my love

to you (「私の愛のすべてをあなたに捧げるわ」と)

Midnight brought us sweet romance (真夜中に甘いロマンスのひとときと)

I know, for my whole life through (これからずっと、君を忘れない)

I'll be remembering yours (いつまでも君のことを忘れない)

Whatever else I do (この先に何があろうとも)

Midnight with the stars and you (真夜中に星々と君と)

曲が終わるまで、居合わせた全員が聞き惚れていた。

透き通るような声色が奏でる、語り手の思いが心にしみこむような恋歌。

歌に込められた思いを余すことなく引き出し、聞く者に目を閉じるだけでその光景を、その想いを容易にイメージさせるほど、不思議な説得力さえ持つ――。

まさに美声だった。

「いや、社長！ あんなスゴいの、どこから引っ張ってきたんですか？」

オーディションにも頻繁に引っ張られる評論家でもあるディレクターが興奮気味に社長に言った。

「逸材ですよ！ 綾乃ちゃん獲得出来なかったけど、この子なら挽回できますよ！ 私が保証します！」

「え？ ええ。そ、そうね」

予想を遙かに上回る水瀬の歌に、正直、社長は気圧されていた。

―何千人とオーディションに立ち会ってきた私だって、若手で、音楽的にこんなにもスゴイ実力者は、せいぜい、目の前にいるこの子だけだったものね。

偶然とはいえ、こんなスゴイ子がこの世にいるなんて、世の中、捨てたもんじゃないわ。

「音程が完全に安定していますし、こりゃ、相当な音感の持ち主ですね。いや、とにかく声がいい！透き通っていて、まるで滑らかに心に染みいるようだった！こりゃスゴイ！」

居合わせたスタッフも驚きを隠せない程の水瀬の一曲だったが――。

一方、

「はううううっ (〃ー㇏ー) σ＝」

水瀬はその場にうずくまっていた。

恥ずかしくてたまらなかったのだ。

「も、もういいですかあ？」

「はい！お疲れ様！契約書作るから、外出たら少し待っていて！」

「はあ？」

レコーディングルームの分厚い扉が開き、出てきた先には驚いた顔の綾乃達が待っていた。

「すごい！水瀬君って！」

若手の歌手として当代随一、“歌姫”の異名を恣にする綾乃も水瀬の実力には敬服した様子だった。

「せ、瀬戸さあん。助けて……僕、人前で歌ったのなんて経験あんまりないんだよお」

「うふふっ。慣れれば大丈夫」

「慣れたくなあい（号泣）」

「ま、大変だったわね」

「お姉さんの薄情者、イジメだあ」

半泣きの水瀬がようやくのことで食堂に戻ってきたのは、かなり後のことになる。

ついていった理沙に帰り際、幼児化した水瀬が文句を言いっぱなしだったのは別の話。

「ま、確かにあれならデビューさせてみたいって思うのは人情よ」
「知らないもん」

食堂に入って、水瀬達が出くわしたのが、騎士警備部の騎士達と女生徒達、つまり、警備にっていた全員。

「あっれえ？」

「水瀬君？」

女生徒達が驚いた表情で水瀬を見ていた。

「あ、あれ？百瀬さん達、どうしてここに？」

「だって、水瀬君が交代するから休めって通信が」

「警部補、確か水瀬君と共に警備につくと無線連絡がありました
が」

「交代？僕、そんな指示受けていないよ？い、今、誰が瀬戸さん
の警備に？」

全員の顔色が変わった。

「今どこ！？」

「10階の楽屋！」

水瀬達が全力疾走で階段を一気に駆け上がる。

周囲への被害など、この際どうでもいい。

「瀬戸さん！」

扉をあけた先には、驚いた表情のマネージャーがいるだけ。しかも、仕出し弁当を口に運ぶ途中で凍っている。

「瀬戸さんは？」

「い、今、お手洗いに」

「行って！」

水瀬の指示に女生徒のみならず、警備部の騎士達までもがとっさに動く。

トイレは無人。

全員が手分けして探すことになった。

――まずい。

水瀬は内心で自分を呪っていた。

うかつすぎだ。

僕は何でこうもトラブルに巻き込まれるんだろう。

いくつかの角を曲がった時、大きなケースを乗せた台車を押す4人組にすれ違った。

“クリーニングの大江”と書かれた台車を押すのは、中年の男達。先に女らしき二人が歩く。全員、作業着に帽子姿で、特に不審なところはなかった。

クンッ

例えば水瀬といえど、この時に“匂い”に気づかなければ、永久にチャンスを失っていたろう。

だが、偶然にも水瀬はその“匂い”を感じ取るコトが出来た。

「――待って」

4人組の前に回り込んで制止する水瀬。

手にはスタンブレードではなく、霊刃が握られていた。

「中を見聞したい。現在、当方は警視庁騎士警備部の指揮下にある。拒否する場合、公務執行妨害と同様に――」

こういう時のためにと教えられた警告を、水瀬は最後まで口には出せなかった。

ギンッ！！

同様、までしゃべった時には、霊刃が相手のナイフを受け止めていたからだ。

正しくは、ナイフタイプの霊刃。刃の部分だけ霊刃となるよう、加工されたタイプだ。

つまり、彼女が魔法騎士だということでもある。

ギリッ

「行け！ここは押さえる！」

水瀬と鎬を削る女の鋭い声に、男達が台車の上の袋を担ぎ上げて駆け出そうとする。

「待ってったら！」

そこを、水瀬の放った魔法の矢が襲う。

互いに騒ぎが大きくなることを嫌い、大がかりな魔法を使うことを避けるために最も基本的な魔法の矢による攻撃とならざるを得ないとはいえ、大気をプラズマ化させるほどの熱量を持つ魔法の矢が放たれてもスプリングラーが作動しないところをみると、彼女たち

はいろいろ細工してくれたらしい。

ガンガンガンッ

あちこちから金属音がした所から考えると、どうやら防火壁を閉じたいらしい。

逃走経路以外の防火壁で追っ手を阻止するつもりなのだろう。

さっさとケリをつけたい。

騒ぎの火消しはお姉さんに頼むことにしよう。

納めた税金分は働いてもらわなければ。

まずは、男を始末することにしよう。

女は、その気になればいつでも殺せる程度にすぎないし。

「ちいっ！」

女は水瀬の魔法攻撃を防御魔法で男を庇いつつ、魔法の矢と霊刃で反撃してくる。

彼女に言わせると、“こんな狭いところで下手な魔法を使えば、こちらの被害もどうなるかわかったものじゃない”と、水瀬より余程現実的な判断に基づいているのだが。

だが、彼女は正直焦っていた。

彼我の実力差は圧倒的だ。

全く勝てないことは、他人に言われるまでもなく、彼女自身がわかりきっていた。

とにかく、あいつが逃げてくれれば任務には成功する。

そう。それだけでいい。

私のことなどどうでもいい。

最悪、私にはこれがある。

無意識に手がポケットの中のスイッチに行く。

押せば腹部に巻いた高性能爆薬の束が爆発する。このフロア位なら吹き飛ぶほどの――

双方が魔法の矢を放ったのはほぼ同時。

しかし、その数は水瀬の方が圧倒的に多い。女は自分の放った矢をわざと爆発させ、矢の誘爆を誘うが、矢は何本となく、爆発をかくぐって襲ってくる。

「くっ！」

楯の形成が間に合わない！

バンッ！

女が魔法の楯を展開する前に魔法の矢が彼女の目前で爆発。

後ろにいたもう一人の女を巻き込む形で床に叩きつけられた女の頭から帽子が吹き飛ばされ、細い細工物のような美しい金髪がこぼれ落ちる。

女はそれにかまう事なく、魔法の攻撃をかけてくる。

「はあああっ！」

魔法の矢とタイミングをあわせて水瀬に突撃、跳躍して防御魔法の真上をかいくぐり、水瀬を狙う攻撃。

違う。

水瀬の直感は鋭い警告を発していた。

真下

床の建材に魔力を通し、真下から床材の破片が水瀬に襲いかかる。真っ正面からの魔法の矢を防御魔法で弾いた所を、上からの攻撃を受けた水瀬は、対抗する魔法を放つと同時にとっさに後ろに飛び退けて難を逃れたが、一瞬の判断を誤れば、挽肉になるところだった。

女も、反撃は覚悟していたらしい。

水瀬の攻撃もまた、攻撃は防がれていた。

――まずい。この人もかなりの使い手だ。

ここで瀬戸さんをさらわれるのはまずいけど、この人にもいろいろ聞かなくちゃならないなみたいだ。

――なら。

水瀬は魔法の矢を10本作り上げ、一気にそれを放った。

狙いは女ではなく、荷物を抱えて角を曲がろうとする男だ。

女の防御魔法が魔法の矢から男を守るが、男は突然、つんのめって前に転んだまま動かなくなった。

「何!？」

「光ったモノだけが魔法攻撃じゃないよ」

「なっ!!」

男に気を取られていた女は、水瀬が自分の懐に飛び込んでいることに気づくのが遅れた。

ガッッ

「ぐっ!!」

作業着の下に着込んだ防御服がなければ内蔵が破裂したろう水瀬の霊刃の一撃が鳩尾に決まり、女は崩れ落ちる。

女の胸からこぼれ落ちた、奇妙な細工がされたロザリオが水瀬の目にとまった。

第八話 「動き出した闇」

よりにもよってテレビ局で発生した魔法騎士同士の戦い―。

意地でも隠してもらわないと、次の仕事に響く。
だから、税金分は働いてもらった。

隠せないものを、ものの見事に隠してのける。
やれなければ官僚ではない。
それが、官僚クオリティ。

やってのけたのは理沙だった。

爆発はテレビ局に何らかの恨みを持つ者が持ち込んだ爆発物が連続して爆発したものであり、10階にて発生した突然の防火シャッターの作動は、テレビ局の棟内管理プログラムにハッキングした者の仕業である。

これらは同一犯の犯行の可能性が高く、現在、警察が不審者の割り出しに全力をあげており、すでに容疑者を絞り込んでいる。

警察からの公式発表はそういうものだった。

人命に関わるような事件での公式発表の第一要件は、いかに大衆を安心させられるか。

事件へ大衆に不安を感じさせてはならない。例えそれが虚報であっても、大衆へは、まず安心を与えればよい。所詮、大衆は、自分に都合のいいことこそ、真実として受け止めてしまう愚物だから。「大丈夫です」 Ⅱ 「真実です」 で十分なのだ。

他にも話題性のある事件は数多い。

後は、如何に大衆の記憶から事件を忘れさせるかに腐心すればいい。

理沙がやったことは、その程度のことだ。

情報網がどれほど発達しようとも、大衆はそれに比例できるほどは発達していない。

大衆に「テレビ局での事件」という“サーカス”と、「安心感」という“パン”を警察は与えただけ。

ただ、それだけだ。

その裏で、別な仕事をする者、いわば世間とはことなる「本当の真実」を追いかける――

それが今回の水瀬達だった。

事件の後、イリスとその一味を拘束したのは、警察ではなかった。

というか、警察は、イリス達は逃げたものと認識しており、よりにもよって拘束されていることすら、知らなかったのである。

「催眠誘導による尋問結果、報告書です」

「本人が気づいている様子は？」

「まずないですね。ウチのスタッフは優秀ですから」

「ふむ」

デスクに置かれた書類を一瞥しただけで、窓の向こうを走り去る車を見送る男。

「この騒ぎ、最後まで責任をとってもらおうでしょう。あのバカ息子め」

「あら？悠理君、頑張ってますよ。ホント、少しは褒めてさしあげればいいものを」

「フン」

1時間後、

月ヶ瀬神社水瀬宅

お茶とお茶菓子がのった座卓越しに水瀬をにらみつけているのは、イリスだった。

「――どういうことだ？」

あからさまに警戒心をむき出しにするイリースに、水瀬は平然と答えた。

「どうされたい？」

「――クッ」

「お茶、冷めるよ？尋問中、満足に水も飲めなかったでしょ？ご飯、すぐ出来るから」

「いらん」

「このお菓子、美味しいんだよ？」

「いらんといったらいらん！」

「あっそ」

「お待たせいたしました」

割烹着姿の女中が運んできた食事を座卓に並べ始める。

「食べていいよ」

「いらん」

そっぽを向くイリースだったが、鼻孔から入ったなんともいえない香りに思わず

グウウウウウツ

そんな音が部屋に響き、さすがにイリースも赤面した。

「体力奪う目的とはいえ、満足に食事も与えないっていうのはどうかと思うけどね」

「十分な食事がとれるなぞ、この国位だ。何日も飲まず食わずなどということは、幾度となく経験済みだ」

「……ま、食べられるウチに食べたほうがいいよ？」

「い、いらん」

「じゃ、僕が」

水瀬が手を伸ばすが、それより先にイリースがフォークを掴んでいた。

「食べるというなら、食べる」

「じゃ、どうぞ？」

上手そうな湯気を上げるハンバーグをにらみながら、最後の躊躇をするイーリスに水瀬は言った。

「変な警戒はするだけ無駄だよ」

返事の代わりにハンバーグにかぶりつくと、後は遮二無二に食らいつくだけ。

何となく理沙を思い出しながら、その光景を黙って見つめている水瀬だったが、イーリスの食事が終わってから、口を開いた。

「食べた？」

「う、うむ」

「じゃ、こっちのお願い聞いて」

「断る」

「所属している組織への敵対行動に手を貸せとはいわないよ。ただ、君の力が借りたいだけだよ」

「断るといったら断る」

「……ガンコお」

「何だと？」

「あのね？もしかしたら、逆に君は組織に貢献出来るかもしれないないんだよ？利害は結構一致すると思うんだけど」

「？」

「瀬戸さんの拉致が目的でしょ？だとしたら、拉致対象が殺されたら困るんじゃない？」

「……瀬戸綾乃の命を狙っている者がいると？」

「そ。で、君に力を借りたいんだ。使える人手がいなくて」

「断る。私は組織の人間だ。組織以外の命令に従ういわれはない」

「……」

剣呑な目でしばらくイーリスをにらみつけていた水瀬が言った。

「じゃ、お金払って」

「何？」

「ご飯のお金。店屋物だから高かったんだよ？2万4千円、税別」

「ち、ちょっと待て」

「払えないの？」

「わ、私の持ち物全て没収しておいてなんだその言いぐさは!？」

「無銭飲食で警察へ突き出していい？」

「ふ、ふざけるな! 大体、食べていいといったのはキサマだろうが!」

「“タダ”だとはいってないもん」

「き、キサマ! 人をだます気か!？」

「警察経由で帰れるかもよ? 無銭飲食で捕まったなんて組織が知ったら、君がどうなるかまでは保証しないけど」

「……!!!!!!」

「協力して」

一体、私が何をしたというのだ。この国に来てからロクな目に遭わない。

信心が足りないと言っても言うのだろうか……。

イリスは天に内心で文句を言った後、諦めたように言った。

「……な、何をすればいい?」

「あのね?」

その日の夜のことだ。

一体、何なんだろう。

短期間で命を狙われ、誘拐されかけた綾乃は、何もかもまったくわからなくなっていた。

芸能事務所と同じ。綾乃の高い人気から仕事は多いが、反面、

警備の人間が現場についてくる状況は、取引先との関係上から好ましくない。

自然、事務所も綾乃への仕事を敬遠し出していた。おかげで学校に行けるのはいいが、綾乃としては内心納得できない。

問いつめても母からは上手くあしらわれ、頼みの父も「お母さんの言うとおりにしなさい」としか言わない。水瀬君に至っては「うーん。どうなんだろうねえ」とまるで他人事だ。

親身になって相談に乗ってくれる人が周りにいない。それが、今の綾乃にとって最大の不満だった。

仕事の帰り道のこと。

綾乃は事務所の用意したタクシーで帰宅しようとしていた。

「まったく、いい加減にして欲しいわね、あの学校も」

横で愚痴り続けているのはマネージャーの須藤だ。

「訓練に協力たって、長すぎるわよ。おかげでこっちがどんな迷惑を被っているのかわかっているのかしら」

「まあまあ。でもいいじゃないですか。警備の人雇わずに済むんですから」

「まあ、そりゃそうだけどさ——」

ガコンッ

車が不意に止まった。

人気のない公園の中。運転手は無言でハンドルから手を放そうとすらしめない。

「ち、ちよっと!?!」 須藤が青くなって運転席に身を乗り出す。

「ちよっと! 何やってんのよ! こんな所に止めるなんて……」

突然、ぐったりした須藤が床に崩れ落ちた。

「す、須藤さん!?!」

「出ろ」

「きゃっ！」

不意にドアが開き、綾乃は車から引きずり降ろされた。

「なっ、なに——ひっ！」

声を上げようとした途端、目の前に刀を突きつけられ、綾乃は言葉
を失った。

見ると、数人が自分を取り囲んでいる。

逃げようとすれば殺されることは明らかだ。

「瀬戸綾乃だな？」不意に暗闇から男の声が聞こえてきた。

震えながらも頷く綾乃。

「母は倉橋由里香、間違いないな？」

こくん。

「倉橋の恥部の血、穢れの血、倉橋の名の元に、お前には消えて
もらおう」

「ち、ちょっと待ってください！」

やっと声が出た。

「わ、私、何も知りません！いつ、一体、何で私がこんな目に遭
うんですか！？」

「……知らずにいてもいいことだ」

「……」

「倉橋家のことは知らんだろう……そうか。やはりな——知らず
ともよいことだ。倉橋の巫女は一人いれば良い。邪魔者は消す。た
だ、それだけだ」

「わ、私、巫女なんて知りません。修行だって——」

そう。綾乃にとって母が巫女だったことを知ったのは、小さい時
分、悪さのお仕置きとして祝詞を間違わずに最後まで読まなければ
外に出してもらえなかった頃だ。

綾乃にとって、巫女らしいこととは、お仕置きと同義語だった。

だから、巫女らしい修行すらしたことがない。

巫女は修行を積んだ者になる。

綾乃はそう勝手に解釈していたからなおさら、自分が巫女の血を持っているというだけで殺されるのは納得が出来ない。

「この世界は理づめで理解出来はしない。行き場のない思いを胸に、生き続けるのが人だ。恨むならば、この世をこんな風に作り上げた神とやらにでも言うんだな」

チャカッ

白刃が振りかざされる。

「もし、生まれ変わる機会があれば、もっとマシな世界に生まれてこい。さらばだ」

綾乃の首目がけて刃が振り下ろされようとした直後――。

複数の爆音が綾乃の周囲で炸裂した。

怖くて目をつむる綾乃の耳に聞こえてくるのは、男達の怒声と悲鳴、そして破裂音。

綾乃の腕を誰かが無造作に掴む。

目を開けようとして、綾乃の意識は遠のいた。

「――こんなことになるとは聞いていなかったぞ」

公園の高台でその光景を眺めつつ、綾乃を抱きかかえているのは、イーリスだった。

「三つ巴の戦いなぞ、こちらから御免被るものを……」

「う……ん……」

うっすらと目を開ける綾乃。

「？」

「ケガはないはずだ。立てるか？」

見たことのない金髪の女が自分を見つめている。

どこからか、香の匂いがするなか、綾乃は恐る恐る女に訊ねた。

「あ、あの……私」

「殺される手前で助けた」事務的で素っ気ない返事に、綾乃は先程のことを思い出した。

「殺される……？」

あの時、イーリスは、綾乃の立場を語る男達の話聞き終わった所で綾乃の救助のために魔法攻撃を仕掛けようとした。

しかし、それより先に男達に銃弾の雨が注がれ、イーリスは事態の主導権を取り損ねた。

「じ、銃って」

「NATO制式の5.56mm自動小銃弾。銃声からおそらく米軍のM-16A2。数12。」

およそこの国で容易に手に入る代物ではない。銃声と同時にあの男達の倍数の騎士が突入。交戦状態に突入した」

「そ、それで」

「私がやったことはたいしたことではない。大がかりな閃光を放って目つぶしを喰らわせた後、お前を抱きかかえてここに逃げただけだ、それだけだ」

「……あ、あの人たちは」

「クラハシ、と名乗っていたな。お前の母方の関係だろう。より詳しくは——」

ギリリ。

イーリスがあの手を抜いた。

「隠れているのはわかっている。出てこい」

綾乃を庇いつつ、闇にむかって言い放つイーリス。

闇からはただ、声だけが聞こえてきた。

「……その娘を渡してもらおう」

「断る」

その言葉と同時に、イーリスは、自分達を取り囲まれていることを知った。

黒装束に身を包んだ男達――。

何かのテレビ番組で見た、忍者を彷彿とさせる彼らが、イーリスと綾乃を包囲していた。

イーリスが驚いたのは、その瞬間まで、イーリス自身が、彼らの存在に全く気づくことが出来なかったことだ。

戦闘経験豊富なイーリスにとって、それは全く、ありえないことだった。

「なっ！」

「きゃっ！」

包囲網の一部が綾乃を背後から羽交い締めにする。

「くっ！」

何とか綾乃を守ろうとしたが、胸に複数の切っ先を突きつけられた状況ではどうしようもない。

しかも、体が動かない。

「先程の者達と同じと考えるな。我らはむしろ、綾乃様をお守りしたいのだ」

「――利害が一致するようだな。ならばこのような扱いはなかろう」

「利害を判断する立場にお前はない。それは我らが主が決めることだ」

「ならその者に伝えておけ。こちら仕事だとな」

「い、イヤッ！」

男達は綾乃を包囲網の外に引きずり出す。

男達が自らを楯に綾乃を守ろうとするからには、どうやら「綾乃様をお守り」云々は本当だろう。

「レディはもっと丁重に扱え」

旋風と共に聞こえた言葉――。

旋風が過ぎ去った時、男達は力無く大地に転がっていた。生きていたのか、死んでいるのか、それすらわからない有様だった。

「……全く、あのバカ息子が」

暗闇の中から出てきたのは、背の高い男だった。

おそらく40代。整った知的な顔立ちが印象的だ。

「倉橋が忍を使っていることなぞ、とうに知った上と思っていたが」

ブチブチ言い続けるながらも、その場にへたり込んだイーリスと綾乃を助ける。

「大丈夫か？ 愚息が世話になっているな」

「あ、あの……」

親しげに話しかけてくる男。

どこかで見た気がするが、どうしても思い出せない。

「名付け親の顔くらい覚えていてほしいものだが」

「……？」

少し残念そうな顔をしつつ、男は綾乃の手をとった。
「悠理の父親だよ。もう、忘れたかな？綾乃ちゃん？」

水瀬の父、由忠だった。

第九話 「蜥蜴の尾」

倉橋が割れている。

綾乃を殺そうとする勢力と、守ろうとする勢力に。

「事態は三つ巴所か乱戦状態ということか」

息子から報告を聞いた由忠が腕組みしながら唸る。

「お父さん」

ゴッソッ！

口を開いた水瀬の脳天に由忠の一撃が炸裂する。

「バカモンッ！ 仕事中大！ 大佐と呼べ大佐と！」

「……先月まで少将だった大佐ドノ」

涙目で精一杯のイヤミをいう水瀬。

ゴッソッ！

「上官侮辱罪で殺されたいか！」

「ホントのことなの……」

「あら、由忠さん、降格ですよ？」

お茶を持ってきた由里香が驚いた顔で訊ねてきた。

「このバカ息子の不始末のおかげでな」

「ホントは伊勢の巫女にちょっかいだして問題になったから」

3 発目はなんとか逃げる水瀬

「まったく、とにかくだ。倉橋の二勢力に、イーリスのいう何とか教団、そして我々ということか」

「あの、大佐。倉橋のもう一つの勢力となんとか共同戦線は」

「張れんな」

「？」

「奴らが何のために綾乃ちゃんを拉致するかだ」

「……あ」

そう。

言われてみれば出来るはずがない。

彼らの目的は恐らく水月の儀の巫女としての綾乃。

そして水瀬達は水月の儀そのものから綾乃を離したい。

共同歩調など、とれるはずがない。

「少しは頭を働かせろ。焦っているぞ」

「すみません」

「ただ、限界はあるぞ」

「ですね」

「限界？」

「事は公には出来ない。極秘にやるにはこちらの手駒が少なすぎる」

「近衛からの増援は？」

「相手は倉橋だ。下手に動くとな事は公になる。うち（水瀬家）の手駒も動かせないな」

「あの、由忠さん？」 由里香が迷いながら言った。

「いっそのこと、綾乃が狙われていることを明らかにすれば……」

「マスコミが気づき、倉橋が手出しできなくなると？ それこそ逆効果だ。マスコミの取材攻勢に紛れ込まれたらそれこそ対応が困難になる。しかも、他にも倉橋の巫女の力を欲しがっている勢力は少なくない。争奪戦にこれ以上のエントリーは御免だ」

「じゃ、綾乃は」

「我々だけで守るしかない。学校は悠理、お前の責任で何とかしろ。外は私とごく少数で何とかする」

「イーリスさんは？」

「芸能活動中の護衛につける。何とか教団への牽制にもなるし、第一、女だから何かと役に立つ。で」

ちらりと由里香を見る由忠。

「私を引き留めている理由は？綾乃ちゃんの護衛ならバカ息子で十分なはずだが」

「はい。ご意見を伺いたくて」

由里香が懷から取り出したのは一通の手紙。

「有里香からです」

「!？」

手紙の中身は、要約すると以下の通り

母が重体で余命幾ばくもない。

ただ、やはり母子の情は消すことも出来ず、母は由里香に会いたがっている。

手紙を書く少し前に母は勘当を解除した。

どうか、一目でいいから、母と会ってほしい。

「ワナだ」

由忠は、手紙をテーブルに放り出すと言い切った。

「みすみす殺されに行くようなものだ。止めろ」

「おばさん、止めた方がいいです。絶対、ワナです」

「わかっています」

決意を目に秘め、由里香は言った。

「馬鹿なことを。昭博は何と言っている」

「相談しました。君の判断を信じるとおっしゃっていただきました」

「おいおい、無責任にも程があるぞ……」

「主人は、私を信じてくださっています。倉橋、いえ、水月の儀に人生を狂わされた者同士として」

「しかし、綾乃ちゃんはどうする!？」

「悠理君にもしもの時はお願いいたします。水瀬家との縁談の件、よもや破棄されはなさらないものと信じておりますが？」

「……一人娘を孤児にしても守ろうとするものか? それほどの価値があるのか!? 何様のつもりだおまえら夫婦は!」

戦いの中で最も大切なのは生き延びること。

だからこそ、自分は大切にしなければならぬ。

守るべき者も、生きていればこそ、守れるのだから。

だからこそ、由忠は命を軽んじているとしか思えない由里香の言葉に噛みついた。

子をお大切に思い、子を守るためにその命すら代償として差し出す。その気持ちは、同じ親としてわかる。

だが、子として、それを喜ぶかは別だ。

親を自分のために失ったことを、子供が喜ぶだろうか?

否

断じて否だ。

とかも、それが母というならばなおさらだ。

断じて、由里香のこの軽はずみな行動は止めなければならない。

「欲しいのは未来です」

由里香は言い切った。

「私達夫婦の、いえ、倉橋によって今、綾乃という私達の未来が失われようとしているんです」

「エゴだよ! そんなものは! おまえらが死んで、あの子が助かったって、あの子が喜ぶはずはないだろう! 守るといって、未来を殺そうとしていることに、何で気づかない!」

「それでも、私は行かなければなりません」

「勝手にしろ！自殺志願者まで面倒見切れるか！」

「お父さん！」

「ならお前が面倒見ろ！そんなエゴに付き合えるか！冗談じゃないぞ！」

「お父さん、少し冷静になって下さい。おばさんも、もっと考えて」

水瀬の説得に、二人共、従おうとはしなかった。

「俺は断る」

「私は、行こうと思います。有里香の所へ。過去を清算しに――」

イーリスを押さえれば、綾乃の拉致を目論む連中は黙らせる事が出来る。

問題は倉橋だ。

そう睨んだ由忠の読みは今のところ当たっていた。

イーリスが寝返ったのか、それとも単独でチャンスを狙っているだけなのか、おそらく彼らも見極め切れていないらしく、彼らからの動きはない。

だが、時間的には倉橋家はそろそろ動く。

だからこそ、綾乃の護衛には実力者が欲しい。

判断の吉凶が占われようとしていた。

「――ぐわあああっ――！」

イーリスの放った火球の直撃を受けた男（騎士）がなすすべもなく吹き飛ばされる。

帰宅途中の綾乃を襲った場所は、なんと堤防沿いの公園の中。
学校帰りの人目につくこんな所で襲ってくるとは、敵も余程焦っているらしい。

イーリスが頼まれた仕事、それは綾乃の護衛。

拉致の対象を護衛しろなど、依頼する者の正気を疑いたくなるが、しかし、今のところはイーリスはその任務に忠実に従っていた。

敵が動かなくなるのを確かめたイーリスはナイフを鞘に戻した。

「大丈夫だな？」

「は、はい」

背後に立つ綾乃を一瞥すると、何事もなかったかのようにその場を離れようとするイーリスだったが、

「ち、ちょっと待ってください！」

「？」

綾乃はハンドバックから何かを取りだしながらイーリスの腕を掴んだ。

「ケガしてます。絆創膏、ありますから使ってください」

よく見ると、イーリスの右腕から薄く血がにじんでいた。

「この程度、どうということはない」

「よくありません！」 気色ばんでイーリスに詰め寄る綾乃。

「？」

「女の子なんですから、ダメです。跡が残ったら大変じゃないですか！」

イーリスは言葉が出なかった。

“女の子”として自分を見る者がいるとは思っていなかったから。

イーリス自身、自分を戦闘兵器として見ることはあっても、性別

で自分を見ることをいつの間にか忘れていた。

そうだ。私は女だったな……。

それすら忘れていた自分が何だかおかしかった。

そう。

私は女だ。

私自身が忘れていても、変わることのない真実。

それを、思い出させてくれる者がいるとは――。

「そうか。なら、もらおうか」

「はいっ」

「イーリスさんって、日本語上手ですね。ご出身はどちらなんですか？」

ベンチに座り、イーリスの腕に絆創膏を貼る綾乃が、不意にそう訊ねた。

「何？」

「あ、よければ聞かせてもらえればなって」

「……お前達日本人が知らない、東欧の小さな国だ」

イーリスは不意に空を眺めながらポツリと言った。

「山脈の麓、ほとんど岩だらけの貧しい土地だった。どこまで行っても荒野が続く不毛な大地が広がる。ただ、そこに住む人々は、例え貧しくても神を信じ、明るく日々を精一杯送っていた」

「いい所だったんですね」

「――そんな中に生まれたはずの私の記憶は、銃声と硝煙の匂いから始まっている」

「！」

「私の国は、長い間、内戦が続いていた。多くの人々が当たり前の様に殺し、殺されていく。そんな状況だ。もう、殺し合う理由す

ら誰も彼も忘れていたのかもしれない。そして、戦禍は、村にもやってきた。今の私の記憶は、そこから始まっている」

「イーリスさん……」

「当時、まだ子供だった私には敵が誰だったのか、なぜ、村が攻撃されるのか、何一つわからなかったし、わかる術すら持たなかった……襲撃の後、私を守って死んだんだろう、母親の死体の下からはい出した私が見たものは、かつて私の愛した村だった廃墟と、私の愛した村人達だった死体達だ……村でただ一人の生き残った私にとって、戦災孤児の私にとって、世界は決して優しくはなかった。嘆きの言葉を聞く者すらない中で、私は泥水をすすり、人間の屍肉すら食べ、生き延びようとした。そして、私は今所属している組織と出会い、修行の日々の末、今、ここにいます」

「あ……あの」

「つまらんことを言った。忘れてくれ」

「ごめんなさい！」

綾乃はベンチから立ち上がり、ペコンツと頭を下げた。

「あ、あの、私、そんなに深い過去があったなんて知らなくて、い、イヤな事を思い出させてすみませんでした！」

「……なぜ、謝る？」

「で、でも」

「過去は否定できない。ただ、あったことをあったこととして話ただけだ。何もお前に非はない」

「イーリスさん」

「むやみに謝るな。お前達日本人の悪い癖だ」

「イーリスさんって、強いですね」

「？」

イーリスの横に座り直した綾乃が感心したように言った。

「運命ってよく言うじゃないですか。私、なんだか全部運任せで来たから、自分で運命を切り開いてきたイーリスさんみたいな人って懂れるんですね」

「懂れ？」

「ええ。自分の運命を自分でつかみとる強さが、私にはないから」
「……お前は、そうしなければならぬ」

「でも私……」

「今、お前は人生の岐路に立たされている。今回の件は、そういう意味だ」

「え？」

「殺されるか、倉橋の巫女として、あるいは我が教団の依代として自己を消されるか、あるいは、今の生活の延長か」

綾乃は目を見開いてイーリスを凝視した。

「全ては、お前の意志一つだ」

「イーリスさん」

「お前は、運命を決める。未来は、自らの意志で勝ち取れ」

綾乃は、じっとイーリスを見つめた後、思い切って訊ねた。

「勝ち取れますか？ 私でも」

「それはお前次第だ。お前がどうしたいのか、それをまず見定めろ。無闇に神を頼るな。この世界の神は偽りの神。真実の神の力は期待できない。最も期待できるのは己の内面、いわば心だ。心を研ぎ澄まし、その声を聞け。そうすれば道は開く」

あの口論の夜が明け、それぞれが自らの目指す目的に向け、動き始めた。

由里香は倉橋へ戻る道を進み

由忠は由里香の護衛監視を直属の部下に指示し、イーリスと共に
いずこかへ姿を消した

しかし、決別したように見える二人は、同じ道を歩いていた。

進むべきは――

ただ、己自身の信じる道。

ただ、それだけのこと。

「お母さん」

母の部屋に入るのは綾乃にとって久しぶりだった。

「あら？どうしたの？」

荷造りに追われる由里香を心配そうに見つめる綾乃。

「大丈夫？」

「何が？」

「実家に戻るんでしょ？あの……」

チラリと見たテーブルの上には、あの某手裏剣が鈍い光を放っていた。

言葉に詰まる綾乃。

彼女だって、何がなんだかわかってはいない。

ただ、母親が危険な目にあうのを何とか止めたい。

ただ、それだけなのだ。

「綾乃」

荷造りの手を止め、静かに綾乃を見つめる由里香。

「――人はね。結構毎日を運任せで生きてる。だけど、時には自分から運命を切り開かなければならない時だってあるわ。自分の手で未来を作り、守る。そんな時がね」

「お母さんにとっての未来って何なの？死ぬかも知れないんでしよう？それって、命より大切なことなの？」

「……そうね」

由里香の未来が、泣きそうな顔で由里香を見つめている。

「そんなのヘンだよ！死んじやったら何にもならないじゃない！」
無言で綾乃を見つめる由里香の視線は、いつしか優しい眼差しに変わった。

いつもの綾乃を見る眼差し、慈愛の眼差し。

「あなたも、親になればわかるわ。きっとね」

「そんなの……」

私は、その意味を、今、知りたいのに。

何が起きているのか。

そして、私に何かできないのか。

お母さんは勝手だ。

でも、ここでこれ以上お母さんの足手まといにはなりたくない。

だから、泣きたいけど止めよう。

そう。お母さんのためにも、ここで泣くべきじゃない。

それでも——

心の中で、綾乃は泣いた。

その日の夜

トイレに部屋を出た綾乃がしでかした失敗は一つ。

ただ、致命的な一つだった。

水瀬と由里香に、寝るときは必ず必ず掛けろといわれていた呪符をカギと共に外したままにしてしまったこと。

そして――。

コンッ

コンッ

「……？」

ドアを誰かがノックする音で綾乃は目を覚ました。
目ぼけ眼をこすりながらドアに向かう綾乃。
自宅のことだ。警戒心は最初からなかった。

コンッ

コンッ

「誰？お母さん？どうしたの？」

返事はない。

「？」

ドアノブに手を掛けた途端、

「！！」

全身を走る電撃に綾乃の意識は途絶えた。

カチャ……

開いたドアの向こうから現れたのは黒装束の男達。

一人の手にはスタンガンが握られている。

全てが音もなく進む。

ぐったりと床に倒れ伏す綾乃をそのうちの一人が抱きかかえ、

そして、彼らは夜の闇に消えていった。

綾乃の家の前に止まっていた車は2台。

玄関と勝手口の双方に一台ずつ。

綾乃が乗せられた車が裏口から発進した後、由里香を抱きかかえるもう一つの黒装束の集団が玄関を出た所で、彼らは立ち止まざるを得なかった。

月明かりの下、するどい眼光が男達をにらみつけている。

もし、犬に例えるなら、彼らを待ち受けていたのは単なる番犬ではない。

むしろ地獄の番犬、ケルベロスそのものだ。

人間というより魔族という方がしっくり来るほどの恐怖を相手に与える男。

そう。

由忠だ。

「どこへ行くのも自由だが、その女は置いていってもらおうか」
その一言に、わずかな衣擦れの音を残して黒装束の男達が一斉に
由忠を襲い、そして、逆襲を受けた。

「地獄行きがお望みか」

彼らの目に由忠は動いたように見えなかった。
玄関に、鈍い音が響き渡る。

「ぐっ！」

「がっ！」

何のことはない。

ただ、彼の一撃が彼ら全員を同時に襲い、彼らがその力に屈した
だけだった。

「……倉橋も案外不甲斐ない」

由忠が放ったのは単なる手刀。

ただし、12の目標を同時に攻撃でき、命中すれば防護服越しで
も無事では済まないほどの、だ。

断末魔の痙攣にもがく彼らを踏み越え、玄関に倒れる由里香を抱
きかかえる。

どうやら薬で眠らされたらしい由里香の艶めかしくうなじに張り
付く髪や、少し開き気味な寝間着の胸元を眺めながら、由忠は思う。

子供を産んだとは思えない華奢な腰に手を回すとつくづくだ。

(やっぱりいい女だ)

昭博め、あいつはやっぱり何か間違っている。

——あいつの顔を立てたり、妊娠してなければ絶対あの時……

「……」

ぶつぶついう由忠の横に現れたのはイーリスだった。

「敵か？」

「敵です」

「ほう？」

「瀬戸綾乃の誘拐は諦めました。しかし、その女とて倉橋の巫女。ならば、瀬戸綾乃のかわりとしては申し分ないでしょう」

「支離滅裂だ」

何もないかのように由里香を玄関の中に運ぶ由忠。

「何もわかっていないだろう？何もわからず、進む先がどこなのかも気づかず、ただ遮二無二進むのはバカのやることだ」

その後に続くイーリス。

「それでも私は命令に従います」

月明かりに照らし出されたイーリスの髪は銀色に光り輝いていた。その決意に満ちた眼差しと共に、由忠の目にはイーリスが輝いて

映った。

「無駄だ」

「無駄でも！」

「……」

ナイフを抜くイーリスを、何故か由忠は見ていない。

「教団に戻る？奴らにとって、お前はもう用済みらしいぞ？」

「私は教団の——」

言い終わる前にイーリスは由忠に抱きしめられる形で地面に横たわっていた。

銃声は1発。

とっさに張ったイーリスのシールドを破り、イーリスを抱きかかえた由忠の頬をかすり、玄関に風穴を開けた。

「対呪用特殊加工弾だな」

魔法騎士の展開するシールドを突き破るように魔法によって加工された銃弾。

間違はなく、魔法騎士たる者を殺すための弾丸。

それが二人を襲った。

その意味が、イーリスの思考を制圧した。

「……」

「わかってるな。今の弾道、どこ誰が狙われていたのか」

「わ、私は」

真っ青な顔で震えるイーリスは、弱々しく両腕で体を抱きしめた。

そう。

弾丸は由忠ではない。間違はなくイーリスを狙っていた。

「私は職務に失敗した。だが、だからといって用済みにされるほど」

「安いんだよ。奴らにとって」

「！」

「いまの一撃が、その証拠だ」
「う、うそだ」

教団。

それはイーリスにとって抛るべき所、そして、全て。その全てから、イーリスは拒絶された。

誰でもいい。

イーリスは願った。

これが、

これが、何かの間違いであると告げて欲しい。

何かの間違いだと―――。

だが、由忠の口から出た言葉は、違った。

「お前は、教団に捨てられたんだよ」

イーリスは、遠のく意識の中で、地獄に堕ちる浮遊感を感じ、そして、意識を失った。

第十話 「倉橋」

その日の朝、由忠の機嫌は最悪だった。

由忠が撃破した黒装束の男達が倉橋の勢力ではなく、イーリス達メトセラ教団の勢力だったことが判明したから。

つまり、由忠の誤認が、綾乃の誘拐を成功させる決定打となっていたことを、由忠自身が認めざるを得なかったということになる。

「やむを得ないことです」

綾乃誘拐の報に接した由里香は、青くなったものの、気丈にもそう言っただけだ。

いっそのこと、怒鳴られた方が、由忠は気が楽だった。それがなかったことが由忠の機嫌をさらに悪くさせていた。

「――で、どうするんですか？」

同様に怒り狂っている息子が苛立った顔を由忠に向けてきた。

怒り心頭という息子の顔を見たのは、由忠にとっても久しぶりのことだ。

「水月の儀まで待つ」

由忠は投げやりに言った。

「最低でも、儀までは奴らは綾乃ちゃんを殺せない。殺す勢力から死にものぐるいで守ってくれるだろうよ」

「それまで、指をくわえて見ているというんですか？」

いつになく険悪な声色の水瀬。

「他に何が出来る？」

「瀬戸さんの拉致されている場所を――」

「とうの昔に手配済みだ。魔導師共が血眼になっている。結果は

すぐ出る」

「出たら、僕が行きます。倉橋を根絶やしにするのが一番です。
βタイプのメサイア借りて殴り込んでやる」

「……機動兵器でなにをやらかすつもりだ。お前は」

「フレイム・ランチャーで家ごと焼き殺します。仮に生き残った
奴はMLで蜂の巣にして――」
マジック・レーザー

「あれはお前のおもちゃじゃない。絶対ダメだ」

「でも！」

「どうにもお前は綾乃ちゃんのことになると理性を失うな……」
あきれ顔の由忠。

これが単なる要人警護だったら、悠理はここまで焦ることはない。

由忠はため息混じりに息子の顔を見つめた。

やはり、女が絡むと変わる辺り、俺の子か……。

「いいか？ 今、倉橋から綾乃ちゃんを奪還しても、それだけでは
事は終わらない」

由忠は思う。

こいつにこんな風にかんで含めるような言い方を最後にしたのは
何年前だろう。

由里香が娘を守る答えとして倉橋行きを決めたなら、俺は父親と
して息子の未来のために何が出来るか、俺も、俺で答えを出さねば
ならない。

綾乃という未来を選択した息子のため、父親として出来ることは
してやりたい。

だから、由忠は言った。

「すぐに、何度でも、あいつらは綾乃ちゃんを奪いに来る。そして、綾乃ちゃんを殺そうとする勢力も、メトセラも、まだ諦めているわけじゃない。綾乃ちゃんを奪還することは、昨日の昼まで時計の針を戻すだけのことだ。それじゃあ意味はない。大体、よく考えてみる」

「？」

「いいか？何が問題なのか。綾乃ちゃん自身というより、倉橋の巫女としての血が問題なんだ。倉橋の巫女の血は綾乃ちゃんの子供にも引き継がれ、いわば水月の儀が行われる度に綾乃ちゃんか綾乃ちゃんの子供が狙われることになる。呪いの連鎖だ」

「あっ……」

「わかるな？この連鎖を、今、ここで断ち切らなければならない。それに、アイドルが行方不明では、警察も動くことになる。マスコミもだ。下手に動けば命取りになりかねない。もう、綾乃ちゃんがさらわれたことが公になるのは時間の問題だ。そうなれば今まで通りには決していけない。いいか？これは命令だ。決して独断で動くな。いいな？」

「……わかりました」

不承不承という顔で頷く水瀬。

「新型メサイアの調整、まだしばらくつきあわなくてはならないんだろう？遥香もかなり手こずっているらしいから、しっかり手伝ってやれ」

「でも、父さんは？」

「手を打つ。大人でなければ出来ないあたりの、な」

ポンッと水瀬の頭に手をやってから、由忠は部屋を出て行った。

——ここ、どこ？

綾乃が目を覚ましたのは、見たこともない部屋の中だった。
畳敷きの広い和室。

ドラマ撮影で泊まった地方の豪華な旅館を思い出させる太い柱を
ぼんやり眺めながら、綾乃は、部屋で寝ていたはずの自分が、なぜ、
こんな所にいるかを考えた。

「誰？お母さん？どうしたの？」

ドアノブに手を回した所までは覚えていたが、後の記憶がない。
気が付くと、いつの間にかパジャマが着物に替わっている。

どうということ？

思い当たるフシは、一つ……。

ガラ

襖が開き、神主の装束に身を固めた男が入ってきた。

穏和な顔立ちに中肉中背、あまり悪人という顔ではない。

「お目覚めですか？」

「は、はい……」

「そうですか……いや、起きあがらなくて結構。疲れておられる
でしょうから、そのまま結構。まずは」

そう言つて、男は綾乃の布団から少し離れた所で正座すると、深々と頭を下げた。

「不作法をお詫びいたします。私は倉橋に仕える神官の一人、倉橋祐一といえます。あなたの御母堂、瀬戸由里香様とは従兄弟になる者です」

「そ、その方が、なぜ、私を？」

「全ては、倉橋の為です」

は？

そう言い切られても……。

それで人が理解できると本気で思ってるんだろうか？この人……。

「あのですね？話しが大きすぎてわかりません。私をさらったり、殺そうとしたりすることが、なぜ、倉橋のためなのです？」

「……いずれ、わかります」

祐一は、そう言つて立ち上がった。

「今は、体を休めていて下さい。何かございましたら、隣部屋に控えている者に」

二の句を綾乃が口にする前に、襖は閉まった。

襖の向こうは、向かいに襖の代わりに格子がはまった部屋になっていた。

綾乃のいる部屋と外界を行き来させないようにするための、いわば座敷牢だ。

その座敷牢をくぐった祐一を待ちかねたように数名の神主姿の男達が近づいてきた。

「祐一様。いかがです？」

「申し分あるまい。儀の準備は？」

「滞りなく。問題は――」

「黒達か」

考え込む祐一。

黒――。

倉橋の闇を支え続けた騎士集団、俗に言う忍達。

何度も自らの敵を排除するために使った経験のある祐一だからこそ、敵とした今、その存在は驚異だった。

「あまつさえ、今回は水瀬家の介入は必至と」

「水瀬家が？」

「綾乃様は水瀬家の嫡男との縁談が決定しております。いわば、自家の嫁がさらわれたことになりますので」

「私は知らんぞ！そんなことは！本当か！」

「事実です。黒達と水瀬家が激突し、あまつさえ共倒れならば最善ですが」

「無理だ。水瀬家が黒達程度で相手になるか。あのバケモノの血を倒すことなぞ人間には不可能だ。東、水瀬家の当主とコンタクトはとれるか？」

「どうするおつもりで？」

「和解を図る」

「は？」

「水月の儀、終了まで介入を控えてもらう。儀の後、綾乃様が水瀬家に嫁ぐかどうかは、綾乃様ご自身に判断していただければ良い」

「しかし」

「巫女として生まれ変わった者が、倉橋を捨てることが出来るものか」

意地の悪い笑みを浮かべる祐一。

「巫女は力だ。力を手に入れた人は、それを手放すことなぞ出来はしない。あの力を手にしたら、綾乃様だって倉橋から離れることなんて考えようもしないだろう。有里香様のようにな。」

それに、水瀬家との縁談だってどっちにしても失敗する話さ。

わかるだろう？どんなに傳かれたとしても、東京生まれのアイドルが、長野の田舎暮らしに耐えられるはずあるまい？元々、その程度の話さ。なら、我らがそれを壊したとして誰が非難できる？結果は同じなのだ。むしろ：そうだな。水瀬家からは感謝してもらっていいくらいだ。家の不名誉を事前に清算してやったんだからな」

「では、水瀬家を騙すおつもりで？」

「今の当主が、それを見抜けなければ騙したことになるまい？見抜けぬ方が悪い。それに、倉橋に残ることは綾乃様ご自身の意志だ。水瀬家としても無碍には出来まいが」

「では」

「意地でも我らの儀は成功させる。そして、有里香様にはお休みいただこう。次代の力は我らのものとせねばならない」

「儀は、我らが命に替えても」

「頼む」

どうしろというのだろう。

途方に暮れた綾乃は、ぼんやりと天井を眺めながら考えた。

今日、何日？

今、何時？

確か、今日はTKV局で2時から撮影で、4時からグラビア撮影があつたつけ。

あ、借りていたCD、今日が期限じゃなかったかな……。

やるべきこと。

やらなければならないこと。

やりたいこと。

次々と頭にそんなことが浮かんでは消えていく。

すべて、今の自分には出来ないことだという認識と共に――。

あの時、イーリスさんは言っていた。

「今、お前は人生の岐路に立たされている。今回の件は、そういう意味だ。殺されるか、倉橋の巫女として、あるいは我が教団の依代として自己を消されるか、あるいは、今の生活の延長か」

「全ては、お前の意志一つだ」

「お前は、運命を決めろ。未来は、自らの意志で勝ち取れ」

私は、そう言われた。

だから訊ねた。

「勝ち取れますか？ 私でも」

そして、言われた。

「それはお前次第だ。お前がどうしたいのか、それをまず見定めろ。無闇に神を頼るな。この世界の神は偽りの神。真実の神の力は期待できない。最も期待できるのは己の内面、いわば心だ。心を研ぎ澄まし、その声を聞け。そうすれば道は開く」

でも、もう、私には選択肢はなさそうだ。

もしかしたら、これが私の望んだ結果なのかもしれない。

自分の力で生きるのが怖いから。

誰かに頼っている方が楽だから。

だから、私は楽な方へ逃げたのかもしれない。

よくはわからないけど、巫女として傳かれる生活は、確かに楽な

んだろうし……。

綾乃は痛感した。

ここから逃げ出すことすら考えられない。

誰かが助けてくれることしか考えられない。

それどころか、自分で生きる道を見つけようとすらしない。

わからないものを、わからないまままで放り出している。

だめだ。

やっぱり、私は、弱い――。

ゴトゴトゴト

不意に室内に響く音によって、綾乃が現実に取り戻されたのはすぐのことだった。

何だろう。

部屋に向かって何かが近づいているような音。

音は――。

そう。掛け軸からだ。

綾乃が音が聞こえてくる方角を見つけたのと同時に、掛け軸がそつと動いた。

「？」

綾乃が掛け軸を凝視している中、出てきたものは、瞳だった。

掛け軸の裏からそつとこちらを見つめる瞳。

周囲への警戒心と、目の前にいる綾乃への驚き、そして憧憬、感

動、そういった様々な感情が読み取れる。

「あ、あの……」

声を掛けた途端、

「うっわっ！ ホンモノだぁ！」

年の頃は12歳位、巫女装束が愛らしいあどけない顔立ちに好奇心一杯の瞳を潤ませている女の子が、掛け軸の裏から出てくると、綾乃をしげしげと見つめてきた。

「ね、ねねねね！ 瀬戸綾乃でしょ？ 本人だよな？」

「え？ ええ」

「わーっ！ 感動っ！ 私、ファンなんだぁ！」

「あ、ありがとう……」

「わっ、さわっちゃったぁ！ なんかスゴイ！ 私感動っ！」

綾乃の周りを飛び跳ねながらそういう女の子に、綾乃は少し引いていた。

「綾乃様？」

襖の向こうから不意に声が聞こえるのと同時に女の子は掛け軸の裏へ走って戻っていく。

「何かございましたか？」

「あ、ごめんなさい。何でもありません。少し、ドラマの役作りを……」

「はぁ……」

掛け軸の裏から、そっと顔を出した女の子を手招きしつつ、綾乃はそう言った。

きっと、ヘンなコトしてるって思われるんだろうけど、でも、この子、きっとあの人達に出会うことが出来ないんだろうし。

警戒しながら近づく女の子に、綾乃はそつと言った。

「もう少し小さい声で。私、瀬戸綾乃です。お名前は？」

「私？倉橋亜里砂」

次の言葉に、綾乃は息を飲んだ。

「私ね？水月の儀をやる巫女なの」

くらはし・ありさ
倉橋亜里砂

倉橋有里香の娘。

倉橋の巫女。

しかし、ただの少女に過ぎない存在――。

「亜里砂様！」

綾乃の監禁されている場所から戻った亜里砂の元へ、乳母が血相を変えて飛んでくる。

「一体どこへ――」

「山に遊びに行ってきただけよ」

「いけません！」

乳母は声を荒げ、亜里砂は内心で舌打ちする。

「あちらの山は、今、巫女様と袂を分かった裏切り者達が巣くう処です！そこにお嬢様が行けばどんなメに会うか」

そんなことはない。

亜里砂は説教を聞き流しながら思う。

あの人たちだって、ちょっと前までお小遣いくれる位親しく接してくれたんだ。

それに、次の巫女は私なんだから、そんなにヒドイことはしない

はず。

大体――。

「さ！修行の時間です！」

「みたい番組があるんだけどなあ……」

乳母の後ろをトボトボと歩きながら呟く亜里砂だが、乳母の怒りに火を注ぐだけ。

「巫女の修行にテレビなんて不要だと何度！」

「はあい」

乳母について歩きながら、亜里砂は修行への不満を口の中だけで抑えた。

一番ヒドイのは、私の自由を奪う、乳母や御母様達じゃない。

今度の日曜だって、あかりちゃんが誘ってくれたのに、だめだって言われた。

また、私一人だけ遊びに行けない。

いつも、私一人だ。

いつも、みんなの話題に、私だけがついていけない。

学校で、私がどれだけ辛い思いしているか、誰もわかってくれない。

そんなの、ひどすぎるじゃない。

大体、倉橋の巫女になって、私に何の意味があるって言うんだろ
う――。

巫女は、神に仕える身だという。
でも――。

神って何？

祈りを捧げ、舞を舞う日々。

それが私にとって、何の意味がある？

誰かに見せるわけでもない。

ただ、神という、「何か」に仕える日々。

望んだことじゃない。

でも、

亜里砂は思う。

じゃあ、巫女を辞めていいっていわれても、私、

何になりたいのだろう。

何が出来るんだろう。

そうだ。

こんな時、どうしてきたのか、

今夜、綾乃ちゃんに聞いてみよう。

——って、言われても……。

その夜、亜里砂を前に綾乃は途方に暮れていた。

そんな難しいこと、私に答えられるはずはない。

そんな質問はもんださんか和子さんにしてほしい。

でも、亜里砂の真剣な目を見ると、何か答えなくてはならないという気にはなる。

「そうね……」

考え考え綾乃は答えた。

「何が出来るか、何がやりたいか、それを、亜里砂ちゃんの年で決めるのは、早すぎると思います」

「綾乃ちゃんがアイドルになりたいって思ったのは？」

「ほんの最近のことです。亜里砂ちゃんの年で今の自分を想像すらしてなかったです」

「そうなんだ……」

「私、亜里砂ちゃん位の時は、お菓子屋さんになりたかったんですよ？」

「綾乃ちゃんが？」

「ええ。お菓子、好きだったから」

バツが悪そうにペロツと舌を出す綾乃の仕草に、亜里砂はようやく安堵のため息をついた。

「じゃ、まだ、私はどうするかなんて、考えなくていいんだ」

「ええ。今は、例え与えられたこととはいえ、今、やらなければならぬこと、やれることをきちんやりすることが大切です」

「うん……あとね？」

「？」

不意に表情が暗くなった亜里砂に、綾乃は気づいた。

「どうしたんです？」

「綾乃ちゃん、大切な人を喜ばせるために、ついたウソって、いいことなのかな」

「え？」

「あのね？大切な人に、喜んで欲しいって思って、それでウソをつくこと」

「そう、ですね。ウソは確かに悪いことです。でも、それで誰かが幸せになるなら、それは決して悪いことじゃないと思いますよ？」

「でもね？それで、みんなが変わっちゃったとしたら、それって、いいことなのかな」

「亜里砂ちゃんは、何かウソをついたのですか？」

「うん……」

亜里砂は、覚悟を決めた。

「あのね？水月の儀って、神様との結婚の儀式だってこと、綾乃ちゃんは知ってる？」

「え？ええ。聞きました」

「結婚するってことは、オンナになってなくちゃいけないってことだよね？」

「え、！？」

突拍子もない発現に、綾乃の思考は一時停止してしまった。

この子、何がしたいの？

オトコとオンナの関係なんて、現実に経験のない私に聞かれても困る。

「ど、どどどという、い、いい意味でしょうか？」

「綾乃ちゃん、声が裏返ってる」

「か、かかかか関係ありません」

「あのね？私、ホントはまだなんだ」

「ま、まままままだ。とは？」

「だから……」

赤面しながら呟くように言ったのは一言。

「あの日」

「……え？」

「だから、まだ、私、きてないんだ。本当は」

第十一話 「イーリス」

「だから、だから私——」

泣き出しそうな顔

すがるような眼差し

ああ——。

綾乃は想う。

この子は悩んでいる。

よかれと思って嘘をつく。

誰でも一度はある経験だ。

だけど、その嘘が広まって、どうしようもなくなった時、どうすればいい？

取り消したくても取り消せない。

そんな時、どうすればいい？

この子は、それを相談できる相手すらいないんだ。

だから、私の所へ来た。

教えて欲しくて

そして、

救って欲しくて――

私は、この子が救えないかもしれない。

でも、出来る限り事はしてあげたい。

それが、間違っていたとしても、私は、私の出せる救いの手を、差し出さねばならない。

「あのですね？ 亜里砂ちゃん」

綾乃が口を開いた途端、

ドンッ！！

その言葉を遮るように、鈍い音が部屋を揺るがせ、天井から埃が落ちてくる。

とっさに亜里砂を庇う綾乃だが、鈍い破裂音が何度も襖の向こうから響いてくる。

綾乃は知っていた。

この破裂音が銃声だということを。

だから、亜里砂を掛け軸の裏に押し込んだ。

「綾乃ちゃんも！」

「狙いは私です。私から離れば、亜里砂ちゃんは大丈夫です」
「で、でも！」

「亜里砂ちゃん」

綾乃は微笑みを浮かべながら亜里砂に言った。

「昔、誰かから聞いたことがあります」

「綾乃ちゃん？」

「ウソもつき通せばホンモノになるって。だから、亜里砂ちゃんはこのウソをつき通せばよいのです。亜里砂ちゃんの場合、ただ、時を待てばいいのですから、簡単です」

亜里砂が答える前に、掛け軸が綾乃の姿を隠した。

部屋の外は、やや奇妙な戦場だった。

袴を着た神主や巫女達が、牧師やシスター達と銃撃戦を展開している、そんな光景。

安易なマンガの世界が現実のものとなっていた。

ただ、マンガでない証拠に、撃ち合っている弾は、ホンモノだ。

「どうしてここがわかったというんだ！」

銃の弾倉を交換しながら、神主の一人が叫んだ。

「近づけさせるな！綾乃様をお護りしろ！」

言い様、フルオートで牧師目かけて撃ち、すぐに伏せる。

鍾乳洞の入り口から、電気ノコギリのような音が響く。

同時に、ついさっきまで頭のあった場所を無数の弾丸が飛び抜けていった。

牧師達も牧師達で機関銃まで持ち込んできたのは、もう確認済みだ。

証拠に、目の前に転がっている巫女2人の死体は蜂の巣にされて

いる。

「銃刀法違反で通報してやろうか」

「こっちだって同じでしょうが」

横にいた若い見習神主がヘルメットを被りながらそんなツツコミを入れてきた。

「ここ来るまで、M-16なんて、戦争映画でしかみたことなかったけど、向こうもMG-34なんて持ってきてるし。もうメチャクチャだ」

「綿野さん。祐一様より連絡。騎士が来ました！射撃を停止して下さい！」

「了解した。撃ち方止め！」

無論、こっちが止めたからといって、むこうが撃つのを止めてくれるはずもなく、彼らはただ、頭を低くして、弾丸の雨をしのぐしかなかった。

そして――

「騎士をつれてこなかったのが幸いでしたな」

肉の塊と化した牧師達の死体を前に、神主の一人が安堵のため息をついた。

「ああ。まさか向こうも、こっちが武装していることも、まして騎士がいることも、知らなかったろうし」

「綾乃様は？」

「ご無事です」

「よし。このゴミを片づけろ。綾乃様に穢れをお見せするな」

東京某所

メトセラ教団 本部 執務室

「全滅だど!？」

電話越しの報告に、驚きを隠せないという表情の男がいた。

「どういふことだ! 騎士こそいないものの、戦闘のプロが――」

男は、そこまで言っつて、言葉を失つた。

首筋に突きつけられた切っ先に、気づいたからだ。

「騎士か」

「そういうことだ」

刀を向けているのは、由忠だつた。

「全く、厄介な存在だよ。君たち騎士というのは」

男は、無言のまま、受話器を置いた。

「お前より、少しは全うだと思つてゐるがね」

「……フツ。何をもつて全うと?」

「自分で考えろ。ここでお前と、哲学論争を交わすつもりはない」

「自分の意見を述べること位、いいのではないのか?」

振り返つた男は、刀を向ける相手の背後にいる女性の姿に、ほんの一瞬だけ、目を見開いた後、自嘲気味に笑つた。

「――やあ。イーリス」

「……戻りましたとはいひません」

「そうか……君は神を捨てたか」

「私が神を捨てたのですか? それとも、神が私を捨てたのですか?」

「神は、意志だよ」

男は言つた。

「内面の意志こそが、神だ。自らの内面からの言葉こそが神の言葉であり、それに従ふのは、敬虔なる信者の務めだろう」

「我々が、神の名の下に行つたことは、どの神、いえ。どの方の内面の言葉だつたといふのか、お聞かせ頂けませんか?」

「決まつている」

男は、イーリスを哀れむように言つた。

「私だ」

「!」

「より、心の内面からの言葉を聞くことが出来る者、それこそがより高い階層にいる存在。いわば、神の代理人だ。それが、私だ」

「詭弁を!」

イーリスの怒鳴り声に、男は全く動じた様子もない。

「——詭弁? ほう? 詭弁というのかね。真実を」

「私は、そんなことを真実として受け入れない! 神は、神の声は——」

「ならば、君の言う、神の名の元、あまたの人を殺めた君とは、一体、何者なのかね」

「!」

「私はただ、神の代理人として、己の内面からの言葉を君に伝えただけだ。手を下したのは、君だが」

「そ、それこそが詭弁というもので——」

「詭弁というなら、詭弁という方がいい」

胸を張った男は、革張りの執務椅子に深々と腰を下ろした。

「開き直ったか?」 由忠は刀を鞘に戻しつつ、訊ねた。

「だが、その詭弁を求めたのは誰だ? 神の声を求めたのは誰だ? 殺すべき敵、愛すべき相手、生きるべき道、規範。私は神の代理人として、君達の求めに応じて、相応のものを差し出したはずだがね」

「そ、それは——」

「それを棚に上げて、今更に私に罪をかぶせるといのか!」
男は怒鳴った。

「詭弁? 神の声を詭弁などと、神を冒瀆するのもいい加減にしろ! イーリス! その心故、神はお前を見捨てたのだ! それがなぜわからない!」

「おためごかしは、終わりか?」

口を開いたのは、由忠だった。

「悪いが、俺は現実主義者でね。自らの行動に、神だの悪魔だの

は絡めないことにしている。その俺が、今のお前らのやりとりを、現実の世界の言葉に翻訳してやるよ」

「翻訳？」

「結局、誰がそのかして、誰が手を下したのか。その責任が誰にあるのか――ただ、それを神とやらを絡めて言いあっているだけだ。イーリス、お前は一つ忘れている」

「？」

「神は、理由であり、結果ではあっても、口実ではない。自らの行動の責任を神に転嫁させるようなマネは、神を冒瀆するだけだ」

「！！」

イーリスは、驚きの眼を由忠に向けた。

「この世界における、神と時間ってのはな」

不意に由忠の右手が動き、執務机の引き出しから銃を取りだそうとした男の腕を斬りつけた。

「俺達、生きる人間に、全てを任せている。俺達は、神を規範としても、言い逃れの道具にすることは出来ないように出来てるんだ」

ああ、そうだ。

イーリスは何かを悟った気がした。

確かに、この男という通りだ。

私の母を殺したあの時、私は、あの悲劇を、神のせいに出来るか？
敬愛する神のせいに出来るか？

否

断じて否だ。

ただ、私は、神に頼りすぎていたのかもしれない。

悲劇からの救済を求め、ひたすら祈り、修行しつづけた。

ただ、神の救いだけを求め、神の意志と信じたからこそ、人をも

殺した。

だが、結局、それは私の言い逃れに過ぎなかったのだ。自ら判断するのが怖かっただけだ。

怖かったから、神という存在を言い逃れの口実に使ってきただけ。ならば、私はどうすべきだったのだ？
どうすればいいのだ？

簡単だ。

私はただ、自らを自らの力で律すればいい。
ただ、それだけなのだ。

神の教えに背かず

自らの意志で、自ら生き抜く。

それこそが、生きるということだ。

「ではイーリス」

由忠は問う。

「どうすればいい？」

「こうします」

ナイフを抜いたイーリスは、男へと歩き始めた。

迷いのない眼は、驚愕の表情を凍り付けた男を捉えていた。
しかし、

澄んだ耳は、男の言葉を聞かず

澄んだ心は、男の存在を否定し

澄んだ腕は、男の肉体を否定し

澄んだナイフは、男の生命を否定した。

ただ、それだけだった。

「よかったのか？」

首のない男が座った椅子を一瞥し、由忠はイーリスに訊ねた。

「はい。お世話になりました」

イーリスは、執務机に備え付けられたパソコンを操作しつつ言った。

「起爆スイッチが作動します。あと5分で、この建物は爆破されます。止めることは出来ません」

起爆のキーを押し、イーリスは過去の自分に決別した。

イーリスは想う。

これでよかったのだ。

そう。

私はこれで良かったのだ。と。

明日からからどうすればいいのかもわからない。

だが、心は晴れていた。

心が晴れているなら、私は生きていけるのだ。と。

生きたい――。

イーリスは、そう心から願えるようになっていた。
生きて、生き抜いてみたい。と。

「なら、もう少し、つきあってもらおうか」

由忠は、意味ありげな顔でイーリスに言ったが、

「今回の件、最後までおつきあいさせていただきます。なんなりとご命令を」

殊勝にも、そう言っただけのイーリスは、由忠の含みがわからなかった。

だから、

「よし。じゃ」

由忠のエジキになる運命が、避けられなかった。

「？」

「ここを処分して飲みに行くぞ。朝までな」

不意にイーリスの腰に手が回った。

「え？ ええっ!？」

「つきあうんだろ？」

イーリスは、何かを間違えたことに気づいたものの、後の祭りだった。

前話

次話

◆でっち水瀬より

ご無沙汰してます。

”美奈子ちゃんの憂鬱”だけ進んでましたが、ようやく、本編も進めました。

この後、イーリスの貞操はどうなるのか？

つか、この”男”、名前くらいつけてあげればよかった。

声とか、イメージは、私の中の”種死”のぎちょードノなんです
が……誰か、名前つけてあげて下さい。

第十二話 「年月の居場所」

東京駅構内

『さて、次のニュースです。一昨日、東京都内の宗教施設で発生した大規模な爆発は』

駅構内のテレビをちらと見た後、由里香はホームへ向けて歩き出した。

さつきから由里香の少し後ろを歩く青年は、フリーターらしい。ルーズに履いたズボンにあごひげという、今風の、どこにでもある風体だ。

「あっ」

「おっと」

そのフリーターの目に、由里香が、すれ違おうとしたサラリーマンとぶつかった姿が飛び込んでくる。

お互いに謝り、そしてすれ違う。

どこにでもある光景だ。

フリーターは努めてそれを無視した。

それが意図的なものとわかっていたから。

キオスクで駅弁とお茶を買い、鞆に詰めながら列車を待つ。

一人旅なんて初めてだ。

何度も切符を確かめる由里香の口からため息が出た。

いつも、昭博さんが隣にいてくれた。

それが、支えだった。

それが、全てだった。

今度は違う。

でもそれは、私が決めたことだ。

それでも、不安はかき消すことが出来ない。

女一人の弱さというべきか。

切符の買い方から何から、昭博さんのマネをして、なんとかここまでこれたけど、この先のことは何もわからない。

でも、行かなければ。

その一念を胸に、由里香は列車に乗り込んだ。

（誰かが、見ているようだけど……ごめんなさいね？）

その手には、旅行鞆と、針状の発信器が握られていた。

新幹線に揺られること3時間。特急に揺られることさらに2時間。東京に来た時は、まる一日かかった旅路が、今は違う。違う？

そう、列車から降りた光景は、何もかもが違っていた。約17年ぶりに見た駅は、いつのまにか建て替えられ、駅前の景色も、変わり果てていた。

クラスの人々と一緒に食べにいった角のあんみつ屋はコンビニ

に変わっている。

東京に出る前、昭博さんに入ったレストランはもうどこにもない。

「……」

歩くこと10分

それは、かつて通い慣れた母校への道。

倉橋の存在を忘れることが出来た唯一の世界への道……。

坂を登った先に、由里香の母校があった。

建物は昔のままなのに、不思議と違和感を感じる。

それはもう、由里香と学校に何の縁もなくなったということなのかもしれない。

「あーっ！待ってよお！」

「亜里砂ちゃん遅いよお!？」

道を歩く生徒達の制服も、昔と違っている。

辺りを見回しても、見知った者などいはいしない。

「……」

しばらく学校を見つめていた由里香は、そのまま踵を返し、坂を下った。

ここに、自分の居場所がないことを知ったから。

17年の年月は、倉橋由里香の存在を、この街から消し去っていたのだ。

倉橋家はここから電車で5つ目の駅で下車、バスで25分の距離。

都市化の波からいつの時代も取り残されてきたような、辺鄙な土地だ。

当然、宿泊施設など、由里香にも心当たりがなかった。

由里香は3つ目の駅で下車することにした。

鄙びた温泉で知られ、旅館や民宿には事欠かない。

由里香は、かつて倉橋家で使った関係で、唯一知っていた老舗旅館に宿をとった。

ここは、あの頃と変わっていない。

それが、安心感と寂しさをない交ぜにした複雑な心境を由里香に抱かせた。

「はいはい。お客様、ご案内いたしますね？」

六十の坂をとうに越えたような、人の良さそうな仲居が先に立ち、部屋へ案内してくれた。

ちなみに一泊2万。1週間の予定、すでに前払いしている。

昭博が自腹で泊まっていたら、夫婦喧嘩モノの値段だが、やむを得ない。

内心で夫にわびながら、へそくりで代金を支払った主婦が、ここにいた。

「あら？東京からですか？」

「はい。もうしわけございません。飛び込みで」

「いえいえ。近頃、こんな田舎に来る人も少なくて……」

仲居がいれてくれたお茶を飲みながら、気がつけば世間話に花が咲いていた。

「でも、珍しいこともあるものですねえ。昨日と今日で東京から何人も来るなんて」

「あ、そうなんですか？」

「はい。倉橋の神社でお祭りがある関係ですかねえ。大学の先生と、その助手の方達でしょ？それと、外人の女連れのオトコの人」

「まあ」

「この二組、私のカンですけど、そういう関係みたいですよ？」

「不倫……ですか？」

由里香も人並みに興味はある。

娘に「オバサン」とバカにされても、だ。

この話題だけで、仲居と由里香は、夕食の時間まで話し込んでいたという。

夜、由里香は夕食に舌鼓をうち、温泉を堪能した。

後はお酒。

何か、目的を忘れそうな勢いで楽しんでいる自分に気づいていたものの、

（そ、それでも）

由里香は必死に自己弁護していた。

（わ、私だって、綾乃を育てるのに一生懸命だったんだから。これくらいのご褒美を自分にあげたっていいですよ……ね？）

またも夫にわびつつ、湯上がり、浴衣に袖を通した由里香は、珍しく髪を結い上げた。

腰まである黒髪は、由里香の自慢だ。娘が髪を伸ばしているのも、その影響が強い。

髪を結うだけで印象は全く違って見える。

自分の何かを変えることで、非日常の姿をとらねば、何か、誰かに申し訳ない、そんな気がする由里香だった。

湯上がり。

「あら？」

先ほどの仲居がカートを押して歩いている。

カートの上には、湯気を立てる鍋と銚子の山。

さすがに重いらしく、仲居も苦勞しているらしい。

「仲居さん」

「あら？お客様」

「手伝いましょうか？」

「いえ！とんでもない！仲居生活45年、そんなことをお客様にさせたら」

カートを押す力を強めた途端、

グキッ

いい音がした。

「い、痛たたたたっ」

「腰、お悪いんですの？」

「は、はい。やはり歳ですかねえ……」

「ちよつと待ってくださいね？」

ポウッ

仲居の腰にやった由里香の掌が不意に輝く。

治癒魔法だ。

「あ、あら？」突然、腰の痛みがなくなったことに、仲居は驚いた。

「お年なんですから、無理しないでくださいね？」

いいつつ、カートを押す由里香。

「は、はぁ……？」

「これ、どこまで？」

「あ、土手の間です……お願いできますか？」

「はい」

途中、二人は話し込んでいた。

全ては、倉橋家の代が変わってからだ。

倉橋家が中心になって、バブルに乗りそこない、観光開発に失敗したせいで、観光客が激減、この旅館も左前が続き、30人いた仲居ももう4人しかいないこと。

それでも、近頃は倉橋も割れていて、分派となった者達が温泉を

観光資源として再利用しようと、いろいろ取り組んでいてくれるから、もう少ししたら昔通りの経営が期待できるかもしれない、など。

倉橋の代が変わってから。

その言葉が、由里香には重かった。

もし、私が代をとっていたら、この旅館はどうなっていたんだろうか。

仲居は言った。

「いえね？別に倉橋様に文句つけるつもりはないんですよ？でも、今の御当主様、ご存じですか？女性の方なんですけどね？あんなり人望がない方で、いい評判がないんですよ。旦那様には早くに死なれて、苦勞されているせいかもしれませんけどね」

「あ、いえ。旦那様が？」

「ええ。政略結婚だったんですよ。本当に好きだった方とは結ばれることなく、イヤイヤ結婚したそうで、それでも、娘さんが生まれてすぐ、ご主人も事故で亡くなられたんですよ。もう12年位前でしかねえ」

「……」

苦勞したのは、私だけじゃなかった。

でも、私は昭博さんと綾乃という幸せに包まれて日々を送れた。

それなのに……。

有里香……。

由里香は、不意に、目頭が熱くなるのをおさえられなかった。

でも、母さえいてくれれば。

「あの、先代の御当主は？」

「それがですねえ……」仲居の顔が曇った。
「？」

イヤな予感がした。

「誰も見ていないんですよ。かれこれ10年以上」

「え!？」

由里香の両眼が、驚愕に見開かれる。

「行方不明……らしいんですよ。倉橋で代替わりのお祭りがあつた夜から」

どういう、こと？

有里香は、母は危篤といってきた。

10年近く、母はどこにいたというのだ？

倉橋の先代当主だ。

それが行方不明で騒ぎにならない？

そんな、馬鹿なことが……。

「あの? お客様？」

「あ、ああ、ごめんなさい」

立ち止まったままの由里香の顔を、仲居が心配そうに見つめていた。

「さ、お鍋が冷めてしまいますね。急ぎましょう」

努めて気丈に振る舞ったが、内心の焦燥感は、どうにもならなかった。

「ここです。ありがとうございます」

仲居が由里香に一礼して、カートから鍋を降ろした。

「土手の間」の表札が掲げられた部屋からは、賑やかな三味線や男女の笑い声が聞こえてくる。

よく言うどんちゃん騒ぎだ。

「昔は、こんな賑やかなお部屋ばかりだったんですよ？」

仲居は残念そうに言った。

「芸者を上げて大騒ぎ。楽しかったのなんのって……ただ、ですね？」

「ただ？」

「……どこから、いつ呼んだかわからないですよ」

仲居は不思議そうに言った。

「え？」

「誰も見ていないっていうんですよ？この部屋の芸者さん達が入ってきたの。いえね？ここで芸者の置屋やっている所は全部知っているんですけどね？全員、見たことのない芸者さん達ばかりで」

仲居は首を傾げつつ、扉を開けた。

「失礼いたします。お待ちいたしました。お鍋とお酒をお持ちいたしました」

その声に、室内から陽気な男の声がする。

「あ、はあい！さ、悠理君、飲むぞ！」

ピクッ

その声に聞き覚えがあった。

「土手の間」の中では、金屏風を前に芸者が5人。

三味線をかき鳴らし、舞い踊っていた。

式神だということは、由里香にはすぐわかった。

そして、見慣れた男と、一見、少女と見まごう少年が、酒の満たされた朱色の大杯を飲み干していた。

夫・昭博と娘の婚約者・水瀬悠理……。

「あの……」

「おや？きれいなお方！どうです？一緒に」

「なっー！」

夫がかなり酔っていること、そして、自分が髪を結い上げていること。

それが夫の判断を狂わせている。

由里香が、そのまま凶状に及ばなかったのは、そう思いこむことにしたからだ。

そんな妻の心境に気づかない夫は陽気に言う。

「旅先で袖すり会うのもなんとやら。ささ。飲みましょう！」

「うんうん」と水瀬。

どうやら、水瀬までかなりできあがっているらしい。

髪を結い上げた由里香が誰か、まるでわかっていない。

水瀬のことは、綾乃に伝えることにしつつも、由里香は怒りを抑え、

「わっ。いいんですか？」

「ええ。ささささ」

勧められるままに差し出される杯を飲み干し、かに鍋を食べ、そして……。

そろそろお開きの頃。

もう床にはお銚子が数十本転がっている中で、由里香が昭博に尋ねた。

「で、ここの宿代、どうやって工面したんです？」

「え？ああ。妻に内緒で株取引です。裏口座を妻に知られたら、僕は死にます」

「そんなこと、していたんですね？」

「はは。何か、よく聞くと、声が妻に似てますねえ。あなた」
「これでも？」

由里香が髪を解き、昭博と水瀬の酔いは、一瞬で吹き飛んだ。

「ゆ、由里香さん……どうして」

「お、おばさん？」

思わず抱き合ってふるえる二人を前に、由里香は怒りの形相で仁王立ちした。

「悠理君」

そのドスの聞いた声は、さすがに年季が入っていた。

「は、はい……」

思わず正座する水瀬。

「楓の間に移ってください。ここから先は子供の見ていいものではありません」

「し、失礼します……」

「あ、待ってください悠理君！僕も！」

水瀬に続き、土手の間の入り口まで逃げた昭博だったが……。

ガッ！

浴衣の襟首を捕まれた昭博は、そのまま室内に引き戻され……。

逃げつつ、水瀬は何故か、古い川柳を思い出していた。

「女房に、土手であったが百年目」

岡場所に行っているわけじゃないのに、おじさんもお気の毒……。

背後から、すさまじく鈍い音と、昭博の悲鳴が聞こえた気がした。

水瀬は思う。

おばさんって、やっぱり、綾乃ちゃんのお母さん、なんだなあ……

…。

「楓の間」

「あ、あのお……」

無言で朝食の膳に向かう由里香に、ためらいがちに水瀬は声をかけた。

「おじさんは？」

「まだ寝ています。もしかしたら、永久に」

まだ由里香の機嫌は最悪らしい。

まるで、同じ状態の綾乃と会話しているような緊迫感が、水瀬を苦しめる。

「は、ははっ……」愛想笑いは、乾ききっていた。

「悠理君、覚えておきなさい」

「は、はい」

「夫は妻に隠し事してはなりません。こと、お金と女性については」

「き、肝に銘じておきます」

おいしそうな朝食が、水瀬にはなぜか、砂をかんでいるようにすら感じられた。

「で、おばさん。これから先は？」

「昭博さんと話し合って、その後、倉橋に向かいます」

「じゃ、僕、護衛します」

「いえ。水瀬君には別件でお願いしたいことがあります」

「僕に？」

「はい」

昭博との『話し合い』の後、返り血を温泉で流す間に、水瀬に、倉橋家周辺の地図や測量図などを、自腹（由里香曰く「綾乃への口止め料の“ごく一部”」）で用意させると、それらを元に、いくつかの指示を水瀬に与え、自らは単身、駅へと向かうべく宿から出た。怪しまれないように、登山姿にリュックという出で立ちだ。

「あら？」

宿の角から、車が一台出ていった。

ナンバーは品川。

仲居の話していた、東京からのお客だろうか。

（免許、とればよかったかしら）

風が涼しい。

木々の葉は緑から赤へ変わり、風に誘われるかのように宙を舞う。

もう、秋だ。

バス停をかなり前で降り、由里香は徒歩で倉橋を目指すことにした。

山道を進むことになるが、ここからなら人目に付かずに倉橋の家を見下ろせる高台に出ることが出来る。

道を歩きながら、由里香は思う。

ここは変わっていない。

17年前から、ずっと。

秋の足音を聞きながら、由里香は、木々を、その落ち葉を、全てを愛でるように歩いた。

自然と会話する。と、よく人は言う。

それが巫女として、基本的なことだと教えられてきた由里香にと

って、自然の中を歩くことは、決して遊びではない。

それは、自然の声に耳を傾け、自然と全ての歩調を合わせる、いわば会話そのものだ。

言語化できない、しかし、確実に感じる事が出来る。

そんな会話。

由里香は自然の言葉に耳を傾けつつ、言った。

ただいまーと。

目指した高台にたどり着いたのは、登り初めて10分後のことだ。眼下に鬱蒼とした森が広がり、その中に倉橋家と神社が見える。

「……」

なぜか、その光景を正視したくなかった。

ただ、高台の一角にある大きな石に、そっと手を触れる由里香。

悲しいとき、つらいとき、由里香はこの石に座って時を過ごした。声を上げて泣いても、誰からもとがめられない唯一の場所。

石が、昔に比べて小さくなっている、そんな気がした。

倉橋の巫女として育った日々が走馬燈のように由里香の脳裏をかすめる。

辛かった。

悲しかった。

でも、

それを押し殺して生きていたあの頃。

それが、当たり前だったあの頃。

高台を包囲しつつある彼らもそうだ。

倉橋という呪縛に縛られ生きる。

それが、生きるといえるのだろうか？

あの頃、私は本当に、生きていたといえるのか？

「……全く、本当に来たのか？」

由里香の感傷を破壊するように、声が高台に響いた。

由忠だった。

「由忠さん……？」

背後にいるのは、見知らぬ金髪の女性。

「ああ、旅館に泊まっていた二人組って、由忠さん達だったんですか」

「何の話だかは知らないが、とにかく、だ」

由忠とその女性は剣を抜いた。

「死に急ぐな」

「大丈夫です。少しくらい護身の心得はあります」

「だから……」

由忠はあきれ顔で由里香に言った。

「一応は倉橋の出だろうが。本当に相手が誰だかわかってるのか？」

「当然、存じております。ですが、私だって——」

由里香が言い切る前に忍達が藪の中から飛び出してくる。

「ちっ！」

とっさに応戦体勢をとる由忠だが、それよりも先に動いたのは、なんと由里香の方だった。

「由忠さん。見ていてくださいませ」

そう言う由里香の掌に光が集まる。

「水龍の剣！」

由里香が忍達めがけて掌を突き出した途端、由里香の掌から螺旋状の渦が飛び出した。

まるで水にも見えるのは、青い炎。

由里香の掌から飛び出しているようにも見えるその一撃は、襲い来る忍達を逆襲した。

「ぐあああああっ!!」

渦に触れた忍達が爆発に巻き込まれ、次々と地面に転がる。

「済みましたわ」

何でもない。という顔で由忠に、そう告げる由里香。

地面に転がり、くすぶり続ける忍達は、ピクリとも動かない。

「呪文……いや、圧縮魔法か」

その光景に、思わず由忠は独り言のように呟いた。

「はい。たしなみ程度ですが……」

（おいおい……）

圧縮呪文は、長い呪文の詠唱を必要とするよう詠唱魔法を加工し、呪文発動のキーワードを唱えることでいつでも発動できる魔法だ。

ただし、使用は簡便そうに見えて、実際には呪文の詠唱よりもかなり難しく、高位の魔導師でもなければ使いこなすことができないことは確かだ。

それを、こうもあっさりと使いこなす目の前の女性に、由忠はあきれかえる他になかった。

「と、とにかく、実力の程はわかった。だが、相手は騎士だ。君は——」

「その時はお守り下さいませ」

「お守りって……あ、おい！監視を付けていたはずだが!？」

「あ、あの方々は……」

由里香は、恥ずかしそうにうつむきながら言った。

「振り切りました……」

「振り切ったあ？」

「はい……あの、電車の中で発信器を別の方にとりつけまして……多分、あの方々は、その見ず知らずの方を監視しつつづけているもの」と

「……」

あの無能共、絶対クビだ。と由忠は気が遠くなる思いで目の前の女性を見た。

「あの、由忠さん？」

「とにかくダメだ！何かあったら俺が昭博に恨まれる！」

「……どうしても、ダメですか？」

「当たり前だ！」

ついつい語気が荒くなる由忠。

ここはヒロイックファンタジーの世界じゃない。銃弾一発で人が死ぬことはあっても、生き返ることがない現実世界だ。お姫様のようないい台詞を唱えれば、すべての危険から逃げられるほど、あまいはずがない。

それが、現実だ。

「……わかりました」

目つきが突然、剣呑なそれになる由里香。

「い、いや、あの……」

その目つきが、遥香を連想させ、由忠は思わず身構えてしまった。いやな予感がする。

よく考えたら、この女も“人妻”だ。

しかも、昭博から、夫婦喧嘩で勝ったなどと聞いたこともない。

夫婦喧嘩の際、“妻”がこういう目になった時が敗北の前兆であることは、さすがに本人だけによくわかっていた。

（こりゃ、まずい……）

その予感ハ的中した。

「――では、かつて、あなたが私に迫ってきたことを、遥香さん

にバラしてもよろしいのですね？」

「へっ？」

「初めてお会いした頃、あなたが私に何と言ってきたか、どんなことをしてきたか、今でも一言一句、一挙手一投足、全て覚えております。それを、遥香さんに告げてもよろしいんですね？」

「い、いや、それはだな……」

よく覚えていないが、そんなことをされたら、俺は間違いなく遥香に殺される。

思わず、後ずさる由忠と、逆に距離を詰める由里香。

「よろしいんですね!？」

だめ押しが来た。

「くっ……」

ほんの少し、にらみ合いになる二人だが、

「わかった……」

肩を落としながら由忠は言った。

「ただし、俺の指示にしたがうことを条件とする。飲んでくれれば護衛は引き受けよう」

「はい（＾―＾）」

「……」由忠は、ちらりと由里香の清純そうな姿を見つめ、深いため息をついた。

（まったく、とんだじゃじゃ馬だ……）

第十三話 「変」

●倉橋神社高台

「昭博と、あのバカが？」

「あ、あの……せめて息子さんなんですから、その……バカって」
「これでも特上の扱いだ」

チラリとイーリスを見るが、イーリスは肩をすくめて“お手上げ”の仕草をする。

「息子が出しゃばってきたのは、まあ、いいとして、昭博がここへ？」

「はい」

「何故だ？」

「さあ……」

「さあって、なあ」

「主人の行動は私には理解できませんもの」

「それでも女房か」

「遥香さんが同じ事言っていましたわよ？私というものがありながら、どうして由忠さんがヨソで女を作るのかわからないって」

「……昭博にも考えがあつてのことだろう。で？今、どこにいる？」

「宿で寝てます」

「寝てる？もう昼すぎだぞ？」

「自業自得です。妻に隠れて裏口座作るわ、高いお料理飲み食いするわ……」

声が震えてきたので、由忠はそれとなく話題をそらせることにした。

「で、旦那の代わりに、何をしようとしていた？」

「実は……私にもわからないんです」

「はあ？」

「ただ、ここに来なければならない。そう思って」
そっと、由里香は石を撫でた。

「……で、用事は済んだのか？」

「それすら、わかりません……」

申し訳ない。という顔の由里香。

「——儀式の動きはまだない。一度、宿まで戻れ。イーリス、
護衛しろ」

「はい」

「由忠さんは？」

「倉橋に用がある」

「倉橋へ？」

「呼び出された」

●数日前 東京某ホテル

由忠が祐一からのコンタクトに接触したのは、イーリスとベッド
を共にしている最中のことだった。

——殺す

内容の如何を問わず、お楽しみを一時中断された由忠が最初に決
意したのはそれだった。

ただでさえさつきから、

目の前の御馳走（イーリスinベッド）のお預けを喰らい、
仕事について文句を言われ、

書類仕事の催促を喰らい、

頼みの息子は昨日から行方をくらませてどこにいるかわからない
中だ。

（いえ。大佐がお忙しいのはわかりますけど、一応、親なんです
から）

無断欠席の息子のせいで、学校からかかってきた南雲大尉の文句
を聞き流し、

（会議は無断欠席！事務仕事は放り出したまま！仕事やる気ある
んですか！？）

樟葉にキれられ、

（大佐あ！お願いですから決済回して下さい！）

福井中尉達、事務職員の涙ながらの訴えに押され、徹夜仕事を約
束し、

（自主規制！！）

目の前で感情を高ぶらせたイーリスの甘い声すら聞き流し、

そこまでして――

何が悲しくてオトコの声を聞かなければならない？

「数日中にそっちに出向く！その時話せばいいだろう。こっちは取り込み中だ！」

大体、祐一の会話は遠回りすぎて、何が言いたいのか要点をなかなか言わないのも悪かった。

すべてにキれた由忠は、携帯電話目掛けて怒鳴り散らすと、イリスの待つベットへ向かった――。

倉橋の思惑など、知ったことか。

由忠にとって、全てはそういうことだ。

●倉橋分家

――さすがに、名家というわけか。

広い庭は、よく手入れされた季節の草花が遷ろう時を彩る。

建物も長い風雪に耐えたからこそその風格を放つ。

趣味に合う作りを眺め、由忠はしばしの時を忘れていた。

――今度、家の修理ついでに、庭はこうやってみるか

降格人事に伴う減給処分、さらに浮気――。

すべてにキれた妻に吹き飛ばされた家は、現在も半分が廃墟のままだ。

いい加減、なんとかしなければならぬ。

せめて、悠理が「帰省する」などと言い出す前に。

（あの築山はそのまま、楓がいいな。下には桔梗はどうだろう）
倉橋の件とは全く別問題を考えつつ、由忠は目の前の茶が冷めるのにも構わず、ただ、庭を見ていた。

すつ。

不意に襖が開き、神主姿の男が入ってきて、平伏した。

「お待たせして申し訳ございません」

由忠は、この男に見覚えがあった。

神社本庁の集会でみかけた、この県の代表格ではないか。

互いに神職同士、しかも格がある。無碍な対応は出来ない。

「いや。連絡も超越さずお伺いして申し訳ない。で？何か願い出たいことがあると？」

祐一の申し出は、ストレートだった。

「――綾乃様を、諦めていただけませんか」

由忠は黙った。

申し出がストレート過ぎるのが、逆に気になったからだ。

「綾乃様、とは――瀬戸綾乃のことか？」

「はい」

「瀬戸綾乃は現在、誘拐されたものとして警察の捜査対象になっているはずだが？」

「そこはそれ、でございます」

「誘拐したのは、あなた方と、認めるのか？」

「いえいえ。お連れただけでございます」

圧倒的な自信が祐一の言葉の端々に感じ取れる。

自分がやったら、近衛という超国家レベルの権力の存在があるといえる。

しかし、倉橋にそれほど力があるとは、到底、思えない。

その根拠が由忠には気になった。

「誘拐して、あまつさえ、それを探す者に諦めろとは、虫がよすぎはしないか？そもそも、本人は今、どこにいる」

「安全な場所に」

「本人の生死も確かめずに約束事など出来るか。まずは本人と会わせて欲しいものだが」

「いやはや、難しいものですなあ……」

祐一は、頭をかきながら、由忠を見た。

くだけた仕草だが、決して何もくだけていない。

綾乃に会わせる気は、毛頭ない。

「……」

「……綾乃様は、倉橋の跡取りです」

「それはあなた方の都合だ。我々水瀬家、そして瀬戸家にも都合はある。何より、本人の意志がどこにもないではないか」

「綾乃様の御意志は、いずれ決めて頂きます」

「継承の儀式のことか？」

「はい」

臆することなく、祐一は言った。

「本家の儀式に対抗する形で、今度の満月に」

「あと、3日か」

「さすがによくご存じで。ご理解が早くて助かります」

「儀式の後、倉橋の巫女として、その力を手にした者として、進退を決めてもらう。そういうことか？」

「ますます話が早い」

「断る」

「——ほう？」

「その申し出、応じたとして、水瀬家としての旨味がどこにある？損ばかりではないか」

「成る程成る程……」

クツクツ。

喉を鳴らせる笑い声が、由忠の神経に障った。

「いやはや。その通りでございますな。いずれにせよ、我々も次代の倉橋主流となるわけです。水瀬家とも蜜月の関係でいたいものですから」

パチンッ

祐一の指が鳴った途端、祐一が入ってきたのとは別の襖が開いた。無言で入ってくる背広姿の男の手にはジュラルミンのカバンが握られている。

「迷惑料込みということで、一つ——」

開かれたカバンに入っていたのは、金塊だった。

金額になおせば、恐らく、億単位の額では効かないだろう。

「——息子の嫁を、これで売れ、そういうことか？」

「滅相もございません。あくまで、水瀬家に嫁ぐか否かは、綾乃様のお決めになられること。——倉橋の巫女としての責務を自覚いただいた上の話ですが——せめて、水瀬家におかれましては、倉橋の儀が終了するまで、介入を控えて頂ければ、それで」

「我が家へ、瀬戸綾乃、次代の巫女が嫁ぐはずはない——そう確信してのことか」

「まさか」

じっ。と見つめ合う二人。

やがて、由忠が口を開いた。

「よかろう」

由忠は言った。

「水瀬家として、今回の件からは手を引く」

祐一の顔がパッと明るくなる。

「ただし、条件が三つある」

「何なりと」

「まず一つ、息子だ」

「ご息子が、何か？」

「いわば自分の妻を誘拐されたことに腹を立て、最早、家として止めることが出来ない。息子の介入は、水瀬家としては止められないかわりに、水瀬家は、息子の行動の一切に、家として関与しない」
「やむを得ますまい。ただし」

祐一が逆に念を押すように言った。

「万一の際はご覚悟を」

祐一のその目は、

（たかがコドモ、介入できるならやってみろ。殺してやる）
と言っていた。

「無論だ」

何のことはないと言う顔で応じる由忠。

（悠理がこの程度の小物共にやられるなら、逆に見てみたいわ）

由忠は、視線を庭に向けながら、続けた。

「第二に、瀬戸家のことだ」

「瀬戸家、ですか？」

「現在、瀬戸家から護衛任務の依頼があり、これに水瀬家が家を上げて取り組んでいる。家のメンツにかけて、仕事を投げ出すことは出来ない」

「――成る程」

「瀬戸家の行動については、水瀬家も予測できないが、儀式に關与する場合、水瀬家としては介入をしないものとする」

「最悪は、瀬戸家――由里香様と、我々の問題だ。と?」

「第三に、倉橋本家の件だ」

「――」

「倉橋本家については、いろいろ借りがあるので、介入はさせてもらう。分家の儀式ではないので、黙認してもらおう――以上だ。飲めるなら、申し出に応じよう」

数分の沈黙の後、祐一は言った。

「わかりました。それで手を打ちましょう」

ずっと差し出されるカバンを、由忠は一瞥しただけ。

「今後とも、両家の繁栄を祈って」

「うむ」

●倉橋分家別間

「祐一様、首尾は」

由忠を送り出した祐一に、取り巻きが寄ってくる。

「ふん」祐一の目は、軽蔑しきったものだった。

「バケモノも黄金色には弱いらしいわ」

「交渉は、成立したのですか」

「ああ。いろいろ条件をつけてきたが、水瀬家が介入することはない。少なくとも、我ら分家の儀式には、な」

「本家には介入を?」

「ああ。可能性は示唆していたぞ」

「では、儀式の後は」

「後は、綾乃様次第だな。綾乃様は？」

「お薬で、よくお休みになっておられます」

「催眠誘導薬の効果は？」

「万全です。自分のことを、倉橋の巫女だと思いこんでいただいております」

「よろしい」

祐一は満足そうに頷いた。

「さらによく暗示をかけておけ。二度と芸能界や、水瀬家のバカ息子のことなぞ思い出せないくらいにな」

●旅館「さくら」楓の間

「馬鹿者！」

その怒鳴り声に、室内の建具までが悲鳴を上げたように振動した。そして、

ゴッンッ！

室内に鈍い音が響く。

由忠が息子の頭をグーで殴った音だ。

「痛ぁーいっ！」

「やかましいわ、このおおうつけ！」

「うううっ……」

「勝手に動くなとあれほど言っただろうが！」

「だって、だってえ……」

「だってもへチマもあるか！」

ゴッンッ！

「反省の色がない！」

ゴッンッ！

「由忠さん、まあ、それくらいで……」

たまらず由里香が止めに入る。

「学校は無断欠席！仕事は放り出したまま！貴様、今の立場でや

る気があるのか！」

「だから、あまりに、その――」

振り上げた由忠の腕を、由里香がそっと止めた。

「教育上、これ以上は逆効果ですわ」

「ええいつ。息子はこれ位厳しくしなければならんというのに」

「そりゃ、私は男の子は育てたことありませんけどね……」

「悠理！　ことが済むまで今回の件はお預けだ！　帰ったら覚悟しておけ！」

「うっ、う……ううっ……」

うえーんっ！

水瀬は、もう本当に泣き出していた。

「由忠さん。ホントに悠理君だって綾乃のこと心配して――」

「それとこれとは話は別だ」

由忠は言った。

「後、3日で儀式が始まる。連中は神経を高ぶらせている。こんな時に下手な動きをすれば、逆に綾乃ちゃんの命が危ない」

「儀式が？　でも、儀式の準備の動きが」

「3日もあれば十分だろう」

「場の浄化だけで一ヶ月はかかるんですよ？」

「？」

由忠は、由里香のその言葉にひっかかった。

「場を浄化するなら、神道の儀式でいえば、結界を張って――」

「高台から見ましたか？　場の結界は、一カ所、そうです。本家の儀式の場しかなかったですよね」

「……」

そういえばそうだ。

連中、どこでやるつもりだ？

「元々浄化しきった場所なら最初から不要なんですよ」

振り向くと、そこには昭博がいた。

「昭博」

「お久しぶりです。先輩」

「お前、どうしてここに？」

「いやあ。先輩の情報調べてたらここに予約とったっていうから、ああ、先輩も動いてくれるんだなあってわかったもので」

ハッハッハッ。と笑う昭博の言葉に、由忠はあきれ顔で訊ねた。

「俺の情報？」

「ええ。あの女性との関係とか……あの南青山の女性の件とか、高円寺の例の人妻とか、六本木の女性自衛官とか、桜田門の女性キヤリアとか」

「……遥香にバラしたら殺すぞ」

「ま、絶対、先輩は動くってみてましたから、いろいろ手を尽くしまして」

「それで何でオナナの情報ばかり」

「そりゃ、一番効果が見込める情報ですから」

「……お前、最初から俺を強請るつもりだったな」

「先輩って、昔から金で動く人じゃないですからね。でもほら、先輩が動いた所が僕の動き所だってふんできましたから、手っ取り早く手に入る材料として」

由忠の殺気を無視するように、「やむを得ず」と笑う昭博。

「——情報の出所は？」

「内証です」

「……」

こいつ、情報部に入ってくれないかな。と、由忠は本気で考えていた。

「昭博さん。それは今後の水瀬さん所へのカードとして置いておくとして」

「おい！」

「最初から浄化された場所、とは？」

「以前、学生時代、倉橋の神社を調べぬいたことがあるんですよ。御母様の許可があったから、分家扱いの僕なら一生入れないような所までね」

「よくとりつけましたね」

「由里香さんとの結婚の条件、それでしたから」

「昭博さん？」

「コホン、高台の石、あれですよ」

「あれが？」

「そう。実はね、あそこが、本当の儀式の場なんですよ」

昭博の説明だと、こういうことだ。

儀式の場は、元来があの高台、いわば高台そのものが聖域だった。それが、時を経るにつれて儀式も変化し、場もより神社に近い地へと移された。

「何故、あの高台が聖域に？」

「由里香さんなら、ご存じでしょう？」

「何故です？」

「来月からのお小遣い停止、解除してくれたら教えてあげます」

「……」

握った拳を振り下ろす直前、由忠の冷たい視線を感じた由里香は、何とか拳を納めた。

夫より世間体をとる、人妻の意地そのものだ。

「コホン……いいでしょう」

「ありがとうございます」

「昭博、感謝しろよ」

「お礼はいずれ精神的に。では、ヒントです。あの高台、地下には何があるでしょう」

「地下?……あつ」

「そう。あの高台、下は鍾乳洞なんです。随分と大きい、ね」
「鍾乳洞?」

「ええ。今では神社のごく一部の者しか知らないはずですが、かつては神社の最大の聖域だったんです。昔の本殿は、鍾乳洞の中にあつました。ほら、水瀬さん所の神社と同じですよ。あの竜穴洞」

「水を生み出す聖域、ということか」

「ご明察。万物の源となる水を生み出す源の真上、清涼な水が生み出される“産み”の力の集まる場所、というか、多分、鍾乳洞を女性の子宮としたら、あの高台は間違いなく女性の性器そのものということですね」

「それが、何故、遷ったのです?」

「解釈ですよ」

「解釈?」

「そう。周辺の地形を女体と捉えたと、高台は女性のいわば性器そのもので、現在の位置は、風水的に見て、ヘソにあたる場なんです」

「産みの場より、体の根元に場を移した」

「そうです。儀式が“産み”の儀式から“降ろし”の儀式へと変化したことはご存じでしょう。場も同様に、神の子を“産む”儀式から、力を“降ろす”儀式にふさわしい場に遷ったということですね」

「……」

「それで?あの場が元々清浄というのは?」

「やだなあ……由里香さん」

「?」

「禊ぎですよ禊ぎ。常に流れ出る水が全ての穢れを流す、それが禊ぎでしょう?つまり、水が常にその内側で流れる場、つまり、場そのものが常に禊ぎの場となっているんです。だから、あの場は常に清浄なんです」

「……我々の視覚的な清浄ではなく、精神的な意味での清浄、そういうことか？」

「そうです。だから、あの場は浄化なんて不要なんですよ」

「随分な大仕掛けだな」

「ま、それより問題は、ですね？」

昭博が、どこからか周辺の測量図を取りだした。

高台の付近に数カ所、赤いマジックでバツ印がつけられている。

「昨日、ざっと悠理君に頼んで周囲を偵察してもらった結果です。

このこと、このこと、ここ、こちらはまだ未調査です」

昭博が指さす場所は、赤いバツ印の所。一部がマーカーで囲われ、“未調査”と書かれていた。

「ここに、入り口があります。全てが警戒され、神主の出入りが盛んです」

「それが？」

「あの鍾乳洞、僕達がここを出るまで、入れるのはごく一部、限られた者だけだったはずです。ペーパーの神主が入っている場所じゃないんです。僕だって、御母様の許可があって初めて入れたんですから」

「普通に立ち入り禁止場所になっている、ということではないか？儀式も近い」

「そう解釈したいのですが」

昭博の一瞬の沈黙の意味は、由忠にもわかった。

「綾乃ちゃんがこの中に？」

「頻繁に巫女の立ち入りが確認されています。儀式の準備ではなく、食事を持った。つまり、中に神主以外の人がいるということですよ」

「供物ではないのか？」

「悠理君も神社の子、人の食べる食事と供物の区別くらいつくでしょう」

「悠理」

「間違いなく、供物ではありません。巫女さん達の立ち話を耳にしましたが、“綾乃様”という言葉が会話の中に」

由忠は黙考した後、息子に口を開いた。

「……悠理」

「はい」

「救出は待て」

「!？」

すぐさま、救出命令がくると思っていた悠理は、動きを止めた。

「なっ——」

「確実に綾乃ちゃんがいる場所を突き止める。それから、武装した騎士及び一般人との交戦が予想される。綾乃ちゃんを連れて高台から脱出する場合のルートを選定、俺に報告しろ。日付変更までに、だ」

「……はい」

「不満か？」

「いえ」 いいつつ、そっぽを向く水瀬。

「……」

「由忠さん？」 由里香が由忠の袖を引っ張りながら言った。

「ん？」

「こういう時は、親として、頑張れ、くらいは言うものですわ」

——ハア、ハア、ハア

亜里砂は真っ暗闇の洞窟の中を必死に走っていた。

(どうして?)

(何で?)

そればかりが頭に浮かぶ。

後ろは振り返りたくない。

振り替えれば、彼女がいる。

亜里砂は、恐怖に押しつぶされそうな中、自分の身に何が起こったのか、子供なりに理解しようとした。

事の起こりは、いつものように、綾乃ちゃんの所へ遊びに行ったこと。

儀式の準備のため、二、三日、会えなかったのは、正直寂しかった。

綾乃ちゃんだってそうだろう。

だから、今日はこっそりオヤツを持ってきた。

ばあやにみつかったら取り上げられる。

みちるちゃんのくれたチョコレートだ。

とても甘くておいしいチョコレート。

きつと綾乃ちゃんだってよろこんでくれるに違いない。

そして、いつもの通り、掛け軸を超えた。

そこは、亜里砂の知らない空間だった――。

「……」

綾乃ちゃん。

そう呼びかけようとして、亜里砂は言葉が出なかった。

場の空気が、恐ろしく重い重圧となって亜里砂を襲っていたからだ。

亜里砂の視界に入ってきたのは、燭台の薄暗い灯りに照らし出された巫女の装束。

それが、誰なのか、亜里砂は一瞬、理解できなかった。

「何者ですか？」

巫女の装束が発せられた言葉。

それが、儀式に臨む母より発せられるそれよりも重く、亜里砂に襲っていたのだ。

だが、その声に、亜里砂は嫌でも聞き覚えがあった。

だからこそ、信じたくなかった。

その声が、大好きな人から発せられているなんて――。

亜里砂が、なけなしの勇気を振り絞っても、声が出てこない。

「――」

じっと見据えてくる鋭い眼差し。

まるで刺されているような感覚すら与える眼差し。

自分の心の奥底まで見抜いているかのような眼差し。

とても子供に耐えられる代物ではない。

いつもなら、明るい笑顔で出迎えてくれた。

「いらっしやい」と――。

例え、数日会えなくても、でも、それでここまで接し方が変わるはずもない。

だが、彼女の身に、何が起きているのか、それを理解する術を、亜里砂は持っていない。

「何者です」

接する者に重圧を与える冷たい声。

発しているのは――。

綾乃だった。

第十四話 「ぬくもり」

「あ、綾乃ちゃん？」

「何者です？」

「わ、私だよ。亜里砂だよ！」

亜里砂は、まだ信じていた。

これが、綾乃の冗談だと。

何かの間違いだと。

そう。

そうだよ。

きつと、綾乃ちゃん、ドラマの練習中なんだよ。

私、そこに間違っに入って——。

綾乃の右手が軽く動いた。

ブンッ

何かが、自分をかすめて飛んでいく鈍い音の後、亜里砂は、頬に鈍い痛みを感じた。

さわると、血が出ている。

「——えっ？」

「倉橋の血を汚す者が、何の用です」

立ち上がった綾乃の手には、棒手裏剣が握られていた。

「えっ？えっ？」

後ずさろうとするが、膝がうまく動かない。

「消えなさい——この世から！」

冷たい声でそう言い放つと、綾乃は手裏剣を亜里砂めかけて投げ

つけた。

亜里砂が避けられたのは、亜里砂の生まれもつてのすばしっこさ、そして、身についていた手裏剣術の賜以外、何者でもない。

手裏剣の軌道が自分の急所を狙っていたことは、亜里砂の年でもわかった。

「……っ！」

掛け軸をめくり、亜里砂は一目散に洞窟の中へと逃げ出した。

「はあ、はあ……」

この洞窟は、亜里砂が偶然、発見したものだった。

一見、岩の割れ目にしか見えない上に、入り口が小さく、亜里砂のような子供でないと入ることは出来ない。

洞窟そのものも入り組んでいて、迷路のようになっている。

亜里砂が、あの部屋への入り口を見つけられたのは、本当に偶然だったのだ。

その反面、亜里砂は洞窟の構造を熟知していた。

大人が追ってきてても逃げられる場所は、いくつも見つけている。

だから、洞窟の中なら、有利でいられる。

だが、

ここから出て家まで戻る……。

その距離は、亜里砂には絶望的な長さに感じられた。

そして、

亜里砂は、その道を通るしかないのだ。

ガサガサガサ

藪の音が耳障りなまでに大きく聞こえる。

「いたぞお！」

追っ手がついたらしい。

母に知れたら――

ばあやに知れたら――

そして、

捕まったら――

ばくばくする心臓。

がくがくする膝。

すべてが恐怖によるもの。

つぶされそうになりながら、亜里砂は思った。

いつも誰も助けてくれない。

誰の助けも求められない。

それが、私。

でも、綾乃ちゃんが来てくれた。

この家のことはよく知らないはずだから、もしかしたら、助けてくれるかもしれない。

でも――

助け

その言葉の意味は、よくわからない。

どう助けてもらいたかったのか、それもわからない。

でも、そう思うことは間違いだったというの？

神様は、私に助けを授けてはくれないの？

助けを求めては、いけなかったの？

私、いつも頑張っていたよ？

それでも、ダメなの？

何で、ダメなの？

追っ手の懐中電灯の灯りが、ついに亜里砂を捉えた。

「いやがった！」

「！！！」

「捕まえろ！」

亜里砂の耳に飛び込んでくる男達の殺気だった声。

自分に向けられてくるニンゲンの、生々しい罵声、そして殺気。それは、すでに亜里砂の心を射抜いていた。視線が向けられる度、

罵声を浴びせられる度、

亜里砂の心は、確実に傷ついていた。

——逃げたい。

亜里砂は心の底から願った。

いやだ。

こんなのが世界なら、私は世界から逃げたい。

こんな声を浴びながら生きるのは、いやだ。

どうして、そんなイヤな世界で、私は生きているの？

倉橋亜里砂——。

それは巫女。

彼女が仕えてきたのは神。

その神が亜里砂にさしのべてきたのは、救いの手ではなく、むしろ残酷な手だった。

ズルッ

「!?!」

亜里砂は、木の根に足を取られ、転倒した。

膝や手が痛む中、それでも泣くのをこらえ、亜里砂は走り出そうとして、出来なかった。

「このガキィ！」

ガツッ

「!」

肩に走った鈍い激痛に、息が止まった。

追っ手の男が木刀で殴りつけた痛みだ。

「うっ……うううっ……」

うずくまって痛みに耐える亜里砂の口からはうめき声が漏れる。

しかし、その苦しむ姿は、むしろ追っ手の男達の怒りに油を注ぐようなものでしかなかった。

「手間かけやがって！」

追っ手の男達は、力任せに亜里砂を蹴り、殴り続け、辺りには鈍い音が響き渡った。

その度に 亜里砂の華奢な体は、まるで人形のようにはじき飛ばされる。

数分、

亜里砂にとって絶望的に長い時間、

もう、亜里砂は動くことすら出来なかった。

それでも、それでよかった。

誰の救いの手も望めない。

かくも残酷なのが世界なのだと、亜里砂は悟っていたから。

ただ、ひたすら楽になりたかった。

闇の中で眠りたい。

眠っている時だけは、私は自由だから――。

恐い御母様も、ばあやも、いない世界にいけるから。

多分、私は、眠ることが出来る。

遠くで誰かの声がする。

「おい。どうする？」

「殺しちまおう。祐一様へのいい手みやげだ」

「あっ、ああ」

「こんなガキ一人殺したって、誰もどうとも思わねえよ」

そうかもね。

亜里砂は思った。

誰のことかわかんないけど、そうかもしれない。

亜里砂の意識は、闇の中へと、落ちていった。

第十六話「ぬくもり」

●倉橋分家

「不審者はまだ捕まらないのか!？」

祐一は苛立たしげに怒鳴った。

「子供だということではないか! 大の大人が束になって何をやっているか!」

「それどころではありません」

部屋に入ってきた男が祐一に告げた。

「追っ手に出た甲田達が殺されました」

「何？」

「ほとんど挽肉、人間の原型すらとどめていない状態だそうです。」

「――水瀬家か」

「水瀬家の嫡男は、背が低く、小学生並ともいいます。綾乃様の略奪に失敗し、追っ手と交戦し――」

「そんな所か」

苦々しげな顔の祐一が言った。

「綾乃様は？」

「ご無事です。ただ」

「ただ？」

「綾乃様は、侵入者は、亜里砂様だ、と」

「!？」

●倉橋本家

「亜里砂はどこにいるの！」

「そ、それが」

「わからないというのか!?! 乳母のお前がそばにいながら、この体たらくは何だ！」

「お、お許し下さいませ！」

恐怖に震えながら平伏する乳母の前に、有里香は怒りに肩をふるわせていた。

すでに亜里砂が部屋を抜け出したことが知れてから数時間。

トイレなどという発想は、すでに誰も持っていない。

有里香は、震える声で執事を呼んだ。

「平沢！」

「はい」

「もしものことがある! 分家へ行け！」

「もしもの時は？」

「考えるな！言われた通りに動けばいい！」

「はっ」

平沢は、高い背を折り曲げるように一礼すると、部屋を出ていった。

●東家

倉橋神社の摂社は、かつて10を数えたという。

しかし、戦後、未だに神社として体裁を保っているのは、わずかに一つにすぎない。

それが、ここ「水森神社」だ。

老いた夫婦二人が神社を護っている、小さな神社。

というより、隣接する幼稚園と昔ながらの剣術道場の一部といったほうがいい位、神社としては小さく、観光名所も兼ねる倉橋神社とは、最早、縁があるのか疑わしい程、疎遠な関係にすぎない。

「ご迷惑をおかけします」

老夫婦に深々と頭を下げているのは、水瀬だった。

「いや。無事で何よりじゃ。それにしても——」

ピンとのびた背筋、がっしりした体型、鋭い眼光。長くのぼした髭。

意志の強さを感じさせる老人が、襖をにらみつけた。

「無抵抗に近い子供に、何ということ——」

その声は、憤慨に彩られていた。

「一命は取り留めています。今、僕たちが代わる代わるですけど、治癒魔法をかけていますし」

ガラッ

楔が開き、隣の部屋から出てきたのは、由忠だった。

「終わったの？」

「ああ。後は由里香が見ている。熱が引かない」

「連続で治癒魔法ですからね。やむを得ませんね」

「悠理、電話で聞いたことだが、もう一度、話せ。何があった」

ドカッ。と不機嫌そうな顔であぐらをかいた由忠は、水瀬の茶碗に手を伸ばしながら言った。

「家庭内暴力の現場に居合わせたというわけではあるまい？」

水瀬の説明は、簡単だった。

闇に紛れて進入路を探索中、数名の男が何かを追っているのに気づいた。

近づく、何かに暴行をふるっている。

よく見たら、この子だった。

追っ手を始末した後、この子を運ぼうとしたが、この家の側まで来た時、容態が悪化。

家の陰で治癒を続けていた所を、この老人に発見された。

「で、電話を借りて、俺たちを呼びつけたというわけか」

「装備をほとんどもっていないもん。人手が必要だから…」

「助かるのですな？」老人が、まるで念を押すように訊ねた。

「ああ。肩をはじめ、骨折10カ所、内臓破裂3カ所、打撲擦り傷数知れず。重傷どころじゃない。よく助かったもんだ」

はあ。水瀬が深い安堵のため息をついた。

「だが、ただの子供というわけではあるまい？」

「無論です」

言下に言いきったのは、老人だった。

「あの子は、ただの子ではありません」

何故か、老人は居住まいを正した。

「あの子は」

ガラッ。

「東」

老人の言葉を遮ったのは、隣部屋から出てきた由里香だった。

「間違いないのですね？」

「……」

訝しそうな顔で由里香を見つめる老人と、老婦人。

「……あなた？」

「ばあさん。誰だったかな？」

「おじいさんが覚えてなければ、私が覚えているはずがありませんよ」

「ばあさんの方がモウロクしておるまい」

「あの……」

ばつが悪そうに由里香は言った。

「……もう、お忘れですね」

由里香もまた、居住まいを正して老人に頭を下げた。

「お久しぶりです。倉橋由里香でございます」

「……」

「……」

そう。目の前にいるのは、かつては倉橋家家督相続の筆頭にいた女性。

忘れることなど出来る存在ではない。

「い、いやはや！これは失礼いたしました！お嬢様！このようなあばら屋によくぞ！」

最早、老夫婦は平伏していた。

「何をおっしゃいます」

由里香は笑っていった。

「東は私にとって武道の師匠。ここの道場のことも、よく覚えています」

「お、恐れ入りまする」

「なるほど、儀式を」

老人は、そう言うのと、深いため息をついた。

「馬鹿げたことを」

「馬鹿げた？」

「倉橋の巫女の力は、いや、神の力は、本来、私利私欲のために使うものではない。それは、この地、民のためにこそ使われるべきもの。歪んだ力は、歪んだ結果しか生まぬ」

老人は言った。

「先々代までは、こんなことはなかった。先々代の巫女様は、その点を正しく御自覚されていた。だから、この地は豊かになった」

「？」

「代々の巫女様の功績に尾びれ背びれがついたとはいえ、巫女様の本来の力のありようは、治水、つまり、水を治めるためのものじゃ」

「水を？」

「そうじゃ。この辺りは、昔から夏の日照りと、雨期には伏川の氾濫に苦しめられてきた。犠牲も半端ではない。だが、この村だけは違った。何故かわかるか？お嬢ちゃん」

「わかりませんっていうか、僕は男の子です」

「ウソはいかんぞ」

「本当ですよ……」

「まあ、いい。答えは、巫女様がいたからじゃ」

「……治水っていうより、天候を操作していたんじゃないんですか？」

「そうじゃ」

「……」

気象コントロールが可能な魔術——。

それは、歴代の「大」の形容詞がつく魔導師達ですら容易に出来ることではない。

それを、歴代の巫女はやっていたというのか？

「じゃから、この村周辺は、巫女様のおかげで、常に温厚な環境が維持されていたというわけじゃ」

そういうこと、何でもないって顔で言わないで欲しい。

水瀬はそう思った。

「で、その力が、他でも求められるようになった」

「そうじゃ。どんな將軍、殿様といれわようと、お天道様相手に勝てるか。米の出来の善し悪しが全てじゃ。だから、昔は倉橋の巫女の力を皆が求めたのじゃ。じゃが、時代の中で、倉橋の巫女の力も変質していった。気象操作の力は、いわば地を生かす力。そのもののじゃが、やり方によっては——」

水瀬は、ちらりと由里香を見た。

下唇をかみしめた由里香の顔は辛そうだった。

「逆も出来る」

「逆？」

「そうじゃ。正しく使えば生かす。逆を行えば、殺せる」

「地を、殺す？」

「地を殺せば、作物は作れない。人も住めない。生きていけん。倉橋の敵となった者は、その住む地を殺される。地の殺し方は、やりようによっては人のみを殺すことも出来る。そういうことじゃ」

「呪い？」

「そう。呪いそのものじゃ。今日日、倉橋の力を求める者のほんどは、この呪いの力を求めてくるといってもよい」

「先代の頃は、やむを得なかったがな」

「何故です？」

「倉橋を、先祖代々守り抜いてきた自然を破壊するような開発から護るためじゃ。代々護り続けてきたもんを守るためじゃ。やむを得ぬわ。東京のコンクリートの中しか知らぬ者達に、この地をいようにされてたまるものか！皆のため。大義のためじゃ」

「――そして、それしか知らない有里香は」

由里香はつぶやくように言った。

「負を正として使い続けてきた」

「お嬢様……」

「正と負は、常に一つではありませんからね。負も時には正となり、正もまた、負になる」

由里香は肩を落とした。

「難しいものです」

「……儂ら、儀式も倉橋の力も、いらんです」

老人は言った。

「儂らは、昔ながらの生活を守りたいだけなのですわ。力に左右され、血と欲望にまみれた神域なぞ、見たくありませんわ。現に」
老人は、ちらりと襖を見た。

「あんな年端もいかぬ者をああする連中に成り下がっておる」

「おっしゃる通り……です」

「だから、儂は倉橋とは縁を切りました。倉橋に仕える中でも、まともな奴らは皆そうです。いつか、また昔のような平穏な倉橋が戻ることを信じて、皆、精進だけは怠っておりません。……まあ、儂ん所は、おかげでバアさんには迷惑かけっぱなしじゃが」

亜里砂が目を覚ましたのは、翌日の昼過ぎだった。

——ここ、どこ？

見慣れない天井

おでこが冷たい。

冷たさを感じるように、目を閉じる。

ああ、なんだか体中が痛い。

ズキズキする。

それに、

くーっ

おなかが空いた。

ガラッ

「あら？ 起きたのね」

誰かが部屋に入ってきたらしい。

見てみたいけど、体が動かない。

「お粥、作ってきたけど、食べられる？」

「う、うん……」

「じゃ、起こしますよ」

上半身が起こされて、ようやく顔が見えた。

それは、亜里砂が見知った人物だった。

「お、お母様？」

亜里砂の顔が、蒼白になったかと思うと、亜里砂は布団に突っ伏して泣き始めた。

「ご、ごめんなさいごめんなさい！ もうしません！ もうしません

から！」

「あ、亜里砂ちゃん？」

手が亜里砂に近づく。

「やあああつ！！！」

亜里砂の絶叫が、部屋に響き渡る。

「！？」

「ぶたないでえ！いうこと聞くから！いい子になるから！！」

「亜里砂ちゃん！」

驚いて伸ばした手を、亜里砂は乱暴に払いのけた。

最早、亜里砂は暴れていた。

それが、今の亜里砂にとって、どれだけ危険なことか、由里香にもわかっていた。

「やだやだやだあつ！！！！」

いつも、亜里砂に近づくその手は、怒りと憎しみに満ちあふれていた。

罵声と共に振り下ろされるその手は、常に亜里砂にとって恐怖でしかなかった。

それが、今、側にいる。

イヤだった。

一番イヤなモノが、今、目の前にある。

「大丈夫だから！」

だが、違った。

その手は、力強く、そして、優しく、亜里砂を抱きしめた。

「大丈夫。大丈夫よ？もう大丈夫。私たちが護ってあげるから」
「うっ……うっ……」

きゅっ。と抱きしめられた感触。

柔らかい。

いいにおいがする。

昔、本当に昔、嗅いだ覚えのあるような匂い。

泣きたくなるほど、安心できる匂い。

「大丈夫よ」

耳元でささやかれる声の、何という安堵感だろう。

私は、これが何なのか知っている。

味わっている。

でも、それは昔、ずっとずっと昔のことだ。

何だったんだろう。

———そうか。

あの時だ。

亜里砂の出した答えは、子供の亜里砂にとって、例えようもなく

惨めで、惨めであるが故に、あまりに悲しすぎた。

「うつ……うつ……」

「亜里砂ちゃん？」

ひとしきり、“それ”に包まれた亜里砂は、

「うつ、うえええええんつつつ！！！！」

声を上げて泣き出した。

気がゆるんだのか？

悲しいことを思い出したのか？

そうかもしれない。

しかし、違う。

亜里砂が、“それ”の正体に気づいたから。

亜里砂が味わうことすら出来ずにいた“それ”

求めても恐怖でしか報われなかった。

でも、亜里砂は“それ”を求め続けた。

“それ”は……

母の、ぬくもりだった。

第十五話 「儀式二日前」

倉橋分家で男二人が向かい合っていた。

「分家は一切、そのようなことに感知していない」

祐一は、目の前の男に言い切った。

本家から派遣されてきた執事、平沢だ。

「およそ修行に耐えられずに家出でもされたのではないか？」

「亜里砂様がそのような娘だと？」

「所詮は子供だ。そのように追いつめたのが誰かを考え、猛省された方がよからう」

「……」

「とにかく、分家としては感知しないことだ。第一、こんな夜中に押し掛けられては、こちらも迷惑だ。——お引き取り願おう」

「わかりました」

平沢は席を立った。

「待て」

不意に祐一が平沢を呼び止めた。

「何か？」

「——当主に伝えよ。瀬戸由里香が動いているとな」

●東家

由里香が居間に戻ってきた。

「あの子はどうした？」

丁度、地図を前に水瀬と話し込んでいた由忠が訊ねた。

「泣き疲れて眠ってしまいました」

「倉橋亜里砂——本人に間違いないのだな？」

「あの子はそう言っていますし、そうでなければ、あのように殺されかかることはなかったのでは？——ありがとう」

由里香は水瀬からお茶を受け取った。

「厄介な話だ。いずれにせよ、あの子を本家に戻すがな」

「戻すというのですか？あの子を！？」由里香の顔色が青くなっ
た。

「倉橋の巫女ですよ？儀式が」

由忠は、由里香の顔を一瞥してため息混じりに言った。

「お前が倉橋有里香なら、どう考える？」

「えっ？」

「俺たちと同じだ。向こうだって娘が行方不明となっている。今頃、血眼になってあの子を探しているだろうし、死にものぐるいで取り戻しにかかるぞ」

「……それでも、戻したらあの子は」

「分のいい賭だと思っ^{かけ}ているがな」

「賭？」

「誰だっけ？あの子に倉橋の巫女は継げないといったのは」

「——あっ」

「そうだ。火の属性が強い娘には倉橋の巫女は継げないんだろう？それなら、あの子が儀式に出ても、儀式は失敗する。本家の儀式はそういう程度のことだ」

「ただ、儀式に出させてあげるだけ——由忠さんは、そう言いたいのですね？」

「まあ最も、これは昭博の発案だがな」

「昭博さんの？」

「ああ。あのタヌキ。これで本家に恩を売り、あの子の負傷は分家の仕業だと、あの子自身に語らせることで分家と本家の対立を煽ろうっていうんだ。聞いた時は感心したよ」

「それって、いいことなんですか？」

「共倒れが期待できる。だから、あの子は戻す。それで本家と分家は決定的だ。俺達はそうしなければならぬ。なにしろ、俺達があの子を保護したことで、本家、分家が共通の敵として俺達を認識

したら、逆に俺達と倉橋家の総力戦に変わる」

「そ、そうです！本家の儀式が潰れるのです。分家にとっても問題は」

「そこが問題なんだ」由忠はお茶で喉を湿らせてから続けた。

「分家とは表面上、和議が成立し、俺達は本家相手に戦うという形になっている。だが、本音を言えば、我々は邪魔な存在だ。ならば、共通の敵を潰すために本家と手を組むことは容易に想像できる。分家は何の負担もなしにな」

「本家は亜里砂ちゃんを取り戻し、分家は私達……いえ、私を潰すことで」

「そうだ。本家、分家共に悪い話じゃない。第一ここは倉橋縁の家だ。探索に来ることは間違いない。相手に生体追跡能力を持つ魔導師がいれば――」

不意に、玄関でチャイムが鳴った。

「おいでなすった」

由忠は刀を拵んだ。

●東家

本家は乱暴といえば乱暴な方法で亜里砂を奪還した。

生命体が個別毎に持つ生体反応を感知する魔術“生体追跡”を持つ魔導師（巫女）が東家に亜里砂がいることを感知し、本家関係者が東家に文字通り乗り込むと、有無を言わず眠っていた亜里砂を拘束、車に乗せて戻っていった。

すべての時間を合わせも3分とかかかっていない。

由里香を絶対魔法障壁で隠した由忠達がしたこと。

それは、ただ他の部屋で息を潜めて事態を見守るだけだった。

●市内

「――ありがとうございました」

古ぼけた家から出てきたのは、昭博とイーリスだ。

「ふうっ。やっぱりそういうことかな」

んーっ。と、大きく伸びをした昭博がため息混じりにそう言った。

「教授」

「はい？」

「何故、今頃になって倉橋家先代当主の所在を確かめようと？」

“大学のフィールドワークの一環”と称してあちこちの老人を訪ね、倉橋の情報をかき集める昭博の情報収集能力、そして、イーリスを“留学生”と言い切る面の厚さに、イーリスは正直、脱帽していた。

「イーリスさん」

常に笑みをたたえる顔がイーリスを見た。

「あなたは、先代当主について、どの程度ご存じですか？」

「あなたから聞いた限りです」

倉橋家先代当主

くらはし・しずや
倉橋静夜

倉橋家の巫女の地位を15歳で継承。以降、倉橋家当主として辣腕をふるい、政界・財界共に高い発言権を確保。倉橋家の地位を高めた。

現在、行方不明。

「そうですね」

昭博は、生徒からの答えを聞くように楽しげに頷いた。

「では、次です。イーリスさん。数十年に1度という儀式があります。その執行をあなたが担当します。あなたにはわからないことがあります。さて、誰に聞きますか？」

「それは――先に儀式を行った先任者に」

「またしても正解です」

一瞬、（馬鹿にしているのか）と思ったが、これが昭博のキャラクターだということをイーリスはすでに理解していた。

「今回、問題は、いるはずの先任者がいないで、そのまま儀式の準備が進んでいる。しかも、分家独自の儀式を認め、聖域を開放しているにも関わらず、です」

「儀式、格式、全てが滅茶苦茶になっているのに、何故、先任者から異議があがらないのか。それがわからないというのですか」

「はい正解です。なにより、10年以上、その人を、誰も見ていない。普通、これってどう思います？」

「まさか!」

イーリスも、さすがに目を見張った。

「いや。さすがに十数年経っていると、探しづらいですねえ。事件ならもう時効だ。あ、イーリスさん。丁度、喫茶店があります。お茶でも、いかがですか？」

●倉橋本家 亜里砂の部屋

「……んっ」

そっと額におかれたタオルの冷たさに亜里砂が呻いた。
ピッ

取り出した体温計は38度を示した。

まだ熱がひかない。

治癒魔法の痕跡があるから、その反動だということはわかっている。

誰かが、亜里砂を助けてくれた。
何とお礼を言えばよいのだろう。
この子の命の恩人だ。

私は、この子が生きていてくれただけでいい。
この子が生きてさえいてくれれば、私はなにもいらないのだから。
もう、倉橋家も何もいらぬ。
この子と穏やかに暮らしたい。
暮らしたかった。

それも今となつては……淡い夢でしか、ない。
すべてはあの日の結果……

どうせ肉体を乗っ取られた身だ。

この魂だって、いつまで正気でいられるか、正直、わからない。

“あれ”が肉体を解放してくれるわずかな時間、それが今。
それまでに出来ることはしておかねば……。

時が来れば、また亜里砂には地獄が待ち受けている。

私には、それが止められない。

親として、なんと無様なことか……。

昨夜、この子に何があったのか、それはわからない。
だが、もうそんなことは私にはどうでもいいことだ。

東家が亜里砂を誘拐したのだから報復を。そう叫ぶ者達は黙らせ
た。

あの東が、そんなマネをするはずがない。
それはわかりきったことだ。

いずれ、この子の口から真実が知れる。

その時、私がこの状態でいることはないだろう。

“あれ”が下手なことをしないよう祈るしか、ない。

“あれ”が戻ってくる。

この体に乗っ取るまで、時間がない。

私は急いでペンをとった。

●倉橋分家

「成る程な」

“亜里砂、本家へ戻る”

その報告を受けた祐一は、感心したように頷いた。

「本家と分家の結束を促進させるような馬鹿ではない、ということか」

「祐一様、今後は、如何様に？」

「綾乃様は？」

「儀式の準備に入られております。報告では順調と」

「そうか。場の準備は？」

「基礎の設置にかかっております。本日中には」

「ということは、本家もか」

「はい。周囲へ境界を張り、祭壇もほぼ完成していると」

「明日が、勝負だな」

「襲撃部隊、準備は怠りございません。ご安心を」

祐一は、報告を終えた部下に頷きながら言った。

「さあ、歴史を変えよう」

●夜 旅館 椿の間

「いよいよ明日だな」

由忠は、そう呟いて杯を空けた。

「先輩の方は？」隣で酒を飲んでいたのは昭博だ。

「本家は俺と由里香、イーリスがかかる。悠理が分家へ儀式開始と共に殴り込むつもりだ。昭博、お前は？」

「由里香さんがいないので、折り入ってご相談が」

「相談？」

「お母様の件で」

●旅館 女子露天風呂

「ふうっ」

湯に浸かったイーリスから深いため息が出た。

「イーリスさん、温泉はいかがです？」

後から入ってきたのは由里香だ。

「ええ。悪くありません」

「それにしても、どうしてあなた程の方が由忠さんと」

「この事件、最後までつきあうと約束していますので」

「そうじゃなくて……」

「？」

「どうして、そういう関係に？」

「……？……なっ！」

その言葉の意味に気づいたイーリスは、赤面して立ち上がった。由里香は、生まれて初めて見る白人女性の肢体を赤面しながら見

た。

「ゆ、由里香さん？あ、あの、私は……」

「こういつては何ですけど、かなり悪い評判ですよ？女に関しては、由忠さん」

「下半身に節操がないというか、女をなんだと思っているのか、本気で聞いてみたいというか」ここぞとばかりに由忠をコキ降ろす由里香。

「それでも、あなたは関係を――」

「持っていません！あれは未遂です！」

「えっ？」

「あの後、すぐに奥様から電話がかかってきて、もう散々な目に」

●数日前 都内 某ホテル

未知の感覚が、イーリスを支配していた。

浮揚感に似た感覚。

それが、快樂だと、イーリスは知った。

もっと味わいたい。

もっと、この快樂に身を任せたい。

その先を知るのは、私を抱くこの男だけ。

この男が、私を知らぬ世界へと導いてくれる。

ぐいっ。

強引に抱き寄せる男に身を任せるイーリスは、次に来る瞬間に備

えた。

ピーピーピー

室内に不意に響きわたったのは、携帯電話の着信音だ。

「くそっ！誰だ！携帯電話なんて開発したヤツは！」

（こんなモノ作ったヤツは絶対地獄に堕ちている！）

由忠は怒りを満面に表して携帯を掴み、その顔を白くさせた。

「……どうした？」

『どうしたじゃありません！』

相手は、妻、遥香だった。

声色からして、かなり怒っている。

『悠君、どうしたっていうんですか？学校から問い合わせが』

「悠理？知らん。勝手にどこかほつつき歩いて」

『それが親のセリフですか！？あなたの子ですよ！？』

「そんな怒鳴るな！あいつだっていい年なんだから」

『親としての責任を放棄するつもりですか！心配してくださってもいいじゃありませんか！』

「……ふざけるな！親に手を引かれなければ何も出来ないわけではない！」

『だいたい、今、何をなさっているのですか？今日はこちらに来ていただけるお約束でしょう？』

「仕事だ仕事！」

『頼んでいた仕事はどうなっているって、麗菜殿下から直接お電話がありましたよ？』

「……なっ、何！？殿下から直接！？……あ、ああ。あれか……」

頼まれていた仕事があったことは覚えているが」

『殿下、カンカンでしたよ？とりなしておきましたけど』

「……殿下がご立腹？……だ、だから忙しくてそっちまで手が」
『やってないんですか！？』

「……わ、わかつている！だがなあ……」

『都内なら今すぐ殿下にお届けしてくださいな』

「む、無理言うな！」

なにをしているんだろう。

私がこんなに待っているというのに、電話を相手にしている。

私は、電話より価値がないのか？

そんなことはないはずだ。

イーリスは、由忠にしなだれかかった。

「はやく、してください」

「いっ！？」

由忠は、その一言に凍り付いた。

『あ・な・た？』

妻の声が絶対零度まで下がった。

「あっ、ああ」

『今の声、どなたですか？』

「き、気にするな！映画だビデオだDVDだっ！」

『——今、そちらに向かいます。逃げても無駄ですよ？』

プッ

電話が、切れた。

●旅館 女子露天風呂

「……で、修羅場、と？」

「1時間後にホテルが崩壊。巻き添え喰らわないようにするだけ」

で精一杯でした」

イーリスは複雑な表情を浮かべた。

「で、でも、その後は？」

「大佐は、必死の命乞いの結果、一命を取り留めました。その後、私は奥様のお許しを受け、部下として動いています。そういうことです」

「でも、同じ部屋にいたのでは？」

「あの部屋は二部屋あります。そのうちの一つを使っていますから問題はありませんし、夜は、遥香様がお食事がてら監視にいらっしやいます。それにお互い——まあ、軍人、みたいなものです。だから、室内で野営でもしていると思えば」

「あつ、そ、そう——なんですか？ 私、よくわからないんですけど」

「とにかく、間違いはありません！ 私は処女のままなんですから！ イーリスは言い切った。

「それに、私だって、あの奥様を敵に回す程、愚かではありませんせん！」

「は、はあ……」

（遥香さん、よっぽどのことをしたんだなあ）由里香はそう思った。

「とはいえ……」

イーリスは湯に浸かりなおした。

その顔は複雑だ。

「確かに、シスターとして、女として、貞操は守れました。しかし、あそこまで行って何もなشتていうのが……女として何か大切なものを失ったというか、傷つけられた気がしてなりません」

「……まあ、複雑ですわね」

●旅館 椿の間

「先代当主が行方不明だということは知っている」

由忠は酒を脇に置きながら言った。

「それがどうした？」

「……亡くなっている可能性が」

「あり得るな」 由忠は腕を組みながら目をつむった。

「……病気、ですか？」

「悠理君、病死や事故死なら、きちんとお葬式が出るでしょう？」

「あっ。そうか」

「殺されて、闇に葬られたと？」

「問題はそこです」 昭博は言った。

「10年の間、失踪届等、役所への当主行方不明に関する一切の届け出がなされていません。むしろ、当主を行方不明のままにしておきたがっているみたいです」

「本家が、当主を始末したと？」

「しかもです」

昭博は、一枚の紙を見せた。

名前が書き込まれ、すべての名前に赤い斜線が書かれていた。

「前回の儀式に参加した巫女のリストです」

「？」

「……全員、数年以内に、病死、事故死、行方不明……先輩、おかしいと思いませんか？」

「……儀式の情報を闇に葬ろうとしたと、いうことか？」

「そう考えるのが妥当です。多分、口止めですね」

「待て、先代当主が行方不明になったのは確か」

「そうです。儀式の最中といわれています。少なくとも、儀式の翌日以降、先代当主を見たものはいません。つまり、当主を本家が殺し、それを秘匿するため、儀式の最も近くに配される巫女達を殺すことで、当主に何が起こったかを闇に隠した。僕はそう思っています」

「理由は何？」水瀬が、誰に言うでもなく、ぽつりと言った。

「だから」

「違いますよ。おじさん」水瀬は言った。

「当主を殺す理由です。殺さなくても、隠居させちゃうとか、老人ホームに放り込むとか——浮気ばらしてお母さんに始末させるとか、不祥事全部明らかにして社会的抹殺を謀るとか……痛っ!!」
水瀬の脳天に由忠の一撃がめり込み、水瀬は沈黙した。

「この親不孝者め!!後半はお前の腹の中だろうが!」

「まあとにかく、悠理君のいうことももっともなんです」

「ったく、昭博、お前、こんな息子を持たずに済んだことを神に感謝しておけ」

「ははっ。息子を殴るって父親の醍醐味を味わえないのは、辛いですよ?」

「そんなものか?」

「そうです。——先代当主の話に戻ります。僕もそれには迷っています。悠理君の言うとおり、何故、当主は殺されなければならないのか?みんな、そこがわからない。だから、みんな、当主が行方不明になったと信じ込まされているんだと思うんです」

「儀式に、何かあったかな?」

「そう考えるのが適当ですね。正直、前回の儀式の詳細がまるでわかりません。だから、推測の域を出ることもないのですが……」

「いや。違うな」

「?」

「儀式の執行は、まだ先代当主がとりおこなっていたはずだ。なら、由里香の時と同じはずだ。問題は」

おかしい。

全てがおかしい。

何が？

今の当主が、だ。

先代当主を亡き者にし、

やって無駄な儀式を強行し、

それで、何を得るといふのだ？

何を望んでいる？

このままでは、本家の名声は失墜し、分家にとって代わられるぞ？

「昭博」

由忠は昭博に言った。

「倉橋有里香についての情報を教えてくれ」

「有里香さんの？」

「彼女が、すべてのカギだ」

第十六話 「儀式前日」

「有里香について——ですか？」

イーリスと共に戻ってきた由里香がきよとした顔で訊ね返した。

「唐突に——何ですか？」

「いや。いままで気にもしなかったが、どんな人物か把握しておきたい」

「今更？」

口にした後、由里香は思わず口を閉じた。

「そうだ。今更だ」

由忠は表情を変えずに答えた。

「我々の敵はあくまで倉橋分家、目的は綾乃ちゃんの奪還。それだけだった。分家には体面上、本家への敵対の意志は示したが、ともに相手をするつもりはない。」

「あくまで儀式を阻害させる……ただ、それだけと？」

「——血を分けた妹と殺し合うつもりか？」

「いえ、それは」

「そうなれば後味が悪すぎる。本家の儀式が本来の意味では失敗し、形だけでも成立させておけばよいのだ。儀式の成立をもって本家は正統な継承者として亜里砂を立て、分家は求心力を失う。——あくまで綾乃ちゃんを使う分家の儀式だけは阻止する。それで良い」

「？由忠さん？分家とは、既に手打ちをされたのでは？」

「私が介入しない、それを認めさせたただけだ。他は知らん」

「よかった」由里香はほっと胸をなで下ろした。

「悠理君から、賄賂受け取ったって聞いた時は、どうやって由忠さんを殺そうかと思ってたんですけど。手間が省けましたわ」

「――昭博」ジロツと昭博を睨む由忠だが、「人妻ですから」と、昭博は涼しい顔だ。「しかも悠理!」

「何です?」

「お前、どこで知った!?!」

「――神社関係者全員知ってるんじゃないですか? 水瀬家の当主が、分家当主に難癖つけた挙げ句、なけなしのお金分捕って、何だか悪どいことしでかすつもりだって」

「あ、あんの野郎っ……!!!!」

震える声を隠そうともせず、由忠は刀を握んだ。

「由忠さん? ここは堪え時ですよ?」

「ゆ、悠理……か、構わん。あの当主、必ず殺せ……」

「金塊、半分分けてくださったら」

「アレは家の建て直しに使う金だ!」

「えっ? また立て替えるんですか? 家、新築したの、半年前ですよ?」

「うっ、うるさい! 気に入らないからだっ!」

「――この事件終わったら、見に行っていないですか?」

「ダメだダメだ! いいか! 年内に帰って来ることは、絶対に許さ
んっ!」

「?」きょとんとして父親を見る水瀬。

「と、とにかくだ」

その視線を避けるように、由忠は大げさに咳をしてから続けた。

「とにかく、事態がここに来て、ようやく気づいたただけだ。敵は
もつと別にいるとな」

「敵? 由忠さんは、有里香も敵だと?」

「娘が殺されかかった親のセリフとも思えないな」

「そ、それはそう、ですけど……」

由里香は言葉を詰まらせて俯いた。

これまでの事態は現実として認めよう。

だが、心のどこかで、妹が自分の娘を殺そうとしていることを認めたくないのだ。

あくまで本家の一部の暴走。

そう思いたいのだ。

「本家の意図が読めないんだ」

「？」

由忠の一言に由里香は顔を上げた。

「失敗する儀式は、あくまで形式的なものでしかない。それは、当主たる有里香にはわかっているはずだ。それに加えて、何故、成功する可能性が高い分家の儀式を放置している？もし、分家が成功すれば、本家が傾くだけでは済まんぞ？」

「はあ……？」

由里香は由忠の言葉を頭の中でかみ砕いて理解しようとして、気づいた。

「そう、いわれれば」

「だから、当主の考えが、その人となりを知りたいのだ。由里香は、姉としてどう見る？」

「……」

由里香は、言葉に詰まった。

血を分けた大切な妹だ。

それを“敵”としてどう見るか、それを聞かれている。

「有里香は、妹は……昔は優しい娘で、私には自慢の妹でした」

由里香は、絞り出すように続けた。

「小鳥が好きで、熱心に餌をあげて喜ぶような娘でした。修行も私よりずっと熱心で、出来の良い娘でした」

「で、悠理。今の評価は？」

「その……」水瀬は、ちらりと由里香を見た後、言った。

「はっきりいって、芳しくありません。冷酷で、人を権威と恐怖で牽引するようなタイプ。金と力のためなら、人を殺すことも厭わないだろうと、周囲の評価は驚くほど低いです。しかも、自分の子供を含む、周囲への暴力は日常茶飯事と」

「昭博、補足することは？」

「……まあ、ありませんね」

昭博も浮かない顔だ。

「小さい頃は、本当に可愛い娘でした。よく一緒に遊んだものです。今でも信じられません。あれほどの娘が、どうしてこうも人望を失ったか、聞き込む度に驚かされました」

「……慈愛に満ちた娘が、なぜ、そこまで変わったものか」

「——修行のため、親元を離されたのが、そもそのきっかけかもしれません」

俯いたままの由里香は言った。

「何があつたのかは、存じませんが」

「修行？ 実家の神社でやれば良いではないか。この馬鹿息子も、騎士修行こそ他でやらせたが、神主修行はうちでやったぞ？」

「僕、お父さんから何一つ教えてもらったこと、ないですけど？」ボカッ

またも由忠の一撃が水瀬の脳天に炸裂した。

「本当のことなのに！」

「やかましいっ！」

「無理はないのです」

由里香は、親子のそれを見ないフリをしてやり過ごした。

「既に母の心は、長女である私に跡を取らせることで決まっていたでしょう。一子相伝の倉橋の儀式、継ぎもしない者に、例えそれが娘でも、教えるつもりが、母には無かったのです」

「で？有里香が修行に出されたのは？」

「10歳の頃でした。友達と離れたくないと泣いていましたが：場所、よくは知らないのです。ただ、遠くの神社で、静御前を祀っている神社だと」

「静御前？」

「はい。あの“静や静”の、あの静御前です」

「ん？——待てよ？その歳いうことは……おや？」

ピクツ。由忠の眉が動いた。

「どうしたのです？」

「ああ。そうか……あの神社……あの巫女か」

何かを思いだしたように、考え込む由忠。

「ご存じで？」

冷めたお茶を乱暴に飲み干した由忠が語り出した。

あれはまだ、オヤジが、年甲斐もなく左翼大隊筆頭騎士やっていた頃だ。

A県の神社で第三種事件が発生、近衛から数名の魔法騎士が派遣され、返り討ちにあった事件があった。

事を重く見た近衛から派遣されたのが、俺とオヤジだ。

現地に到着して理由がすぐにわかったよ。

その神社、確かに名は全国的に知られていたし、人は多いものの、祭祀はいい加減。

あれじゃ、やってないのと同じだ。

神社の聖域は低級霊に汚染され、神社の連中はその低級霊を神霊だと思いこむ、それがさらに低級霊を呼び込むという、よくある悪循環に陥っていたわけだ。

“そいつ”は、よっぽどアタマに来たのか、片っ端から低級霊や人間を取り込んで力を取り戻そうとしていた。

気づいた俺達は、即座に阻止と封印に動いた。

ところが、神社の人間が、俺達に反対したおかげで、結局は“そいつ”を取り逃がす結果に陥った。

結局、現在に至るも“そいつ”の所在は不明。

近衛の判定は、“そいつ”の出自からして、危険レベルA A A。つまり、かなり厄介な相手ということだ。

——まあ、今考えれば、あの神社の連中も、その時は怨霊に動かされていたのかもしれないがな。

「“そいつ”って、静御前のことですか？」

「そうだ。そしてその時、巫女の一人として神社にいたのが、有里香だろう」

「——手を出したんですか？」

ボカツ!!

「まだ13歳だったんだ！早すぎるわ！」

「そこまで知っているって……結局、狙っていたんじゃないですかあ……大体、神社を敵に回したのって、巫女さんに手を出したことが原因ではないですよね？」

どうやら、水瀬の懸念は的中したらしい。

由忠は血相を変えて怒鳴った。

「ちょっと2・3人つまみ食いしただけだ！オヤジは神主の女房まで相手していたぞ!？」

「……もう、いいです」

「由忠さん……それはちょっと」あきれ顔の由里香

「いくらなんでも」と昭博

「人として、どうかと思いますが？」めまいを押さえるイーリス。

「と、とにかくだ！」

これ以上、人としての評価を下げたくない由忠は、咳払いをした後、続けた。

「それはいい！——俺が手を出さなかったのは」

「ほらやっぱり狙ってた」

「悠理、黙れっ！——あの歳で、あんな冷酷そうな女を、見たことがなかったからだ」

「冷酷？」

「ああ。心を閉ざし、憎悪に満ちた目をした巫女というのが俺の印象だ。周りの連中が目すら合わせないほどだぞ？だから覚えているんだ。どうすればあんな歳で、ああも冷たい人間になれるのか。とな」

それは、由里香が最後に見た、そして水瀬達の知る有里香そのものだ。

間違いであることを願っていた由里香の願いは、無惨にもうち碎かれた。

「……」

「つまり」水瀬がまとめるように言った。

「その、静御前の神社で、何かあったというのですね？」

「そう見るのが妥当だろうな」

「あの——」

昭博が手を挙げて言った。

「本家と事を起こす前に、ちょっとお願いがあるんですけど」

●倉橋本家

「有里香様。祭壇の設置、浄化共に滞りなく進んでおります。このままですと、予定通り、明日夕方までには全ての準備が整います」

「うむ」

本家奥の部屋で巫女から恭しく告げられ、大仰に頷くのは、有里香だ。

亜里砂の部屋で見せた慈愛は、片鱗も感じさせることはない。圧倒的な威圧感。近づくだけで殺されそうな殺気――それが、彼女という存在を構成していた。

「黒」

「お側に」

声はするが、気配はない。
いつものことだ。

「分家はどうした？」

「儀式を急襲します。目的は倉橋祐一の首」

「亜里砂を殺さんとしたあの愚か者の首、かならず我が前に届けよ」

「御心のままに」

「――ふん」

パシンッ！

亜里砂の手にした扇子が人払いを告げ、その周りから人の気配が消えた。

「……」

灯明だけの暗い室内。

その中で、有里香は思案にふけった。

分家は黒に襲わせれば良い。

黒達、忍軍の力を投入すれば、それを阻止する力は、分家にはない。

分家の儀式は襲わせない。

儀式は成功して良いのだ。

いや。成功してもらわねばならない。

この女のためでも、この家のためでもない。

そう。

ただ、私のために。

パサッ

手を伸ばした途端、長い袖が音を立てた。

「?」

見ると、乱暴に丸められた紙があった。

自分が丸めた紙だ。

「――馬鹿が」

有里香は自分の頬を撫でながら、侮蔑するように、唇の端をつり

上げた。

「こんな手紙で、真実を告げようだと？——有里香よ。お前は何年経っても、愚か者だ」

ポッ

軽い音がして、紙が一瞬のうちに炎に包まれた。

「この期に及んで、平穏を望むとは……」

勢いよく燃えた炎は、次第に勢いを失い、後には黒い炭が残るだけ。

「己の、この家への憎悪する願い、我がかなえてやるのだぞ？何を今更、追放した姉を頼るというのか？」

有里香は、楽しげに笑い出した。

「クッククッ……儀式は始まる。案ずるな。おのれら姉妹の娘達は、しっかり使ってやる。だから、安心しろ」

言い聞かせるような、それでいて勝ち誇った声が、暗い室内に響く。

「本家はこれで終わりだ」

有里香は、そう言って立ち上がると、衣擦れの音を引き連れて歩き出した。

「それがお前の願い。かなえてやるわ」

「亜里砂！亜里砂はどこ！？」

有里香は襖を開くと、大声で亜里砂を呼びつけた。

儀式まであと20時間を切った。

第十七話 「倉橋の巫女 前編」

「頼みたいこと？」

「ええ。お話を聞く限り、どうも、杞憂とは言い切れなくなってきたので」

昭博は、頭をかきながら言った。

「どうした？」

「僕たちは、全てを見誤っている気がしているのです」
「？」

「考えてみてください」 昭博は、急須からお茶を注ごうとして止めた。

「ありゃ、お湯がない」

「昭博さん。私やりますから、続きを」

昭博から急須を受け取った由里香が続きを促す。

「ああ。由里香さん。すみません——で、ですね？先輩の話
を聞いていると、まず、事の発端の設定から間違っていたように思
えるのです」

「俺の？」

「ええ。僕たちの認識において、事の発端って、いつですか？」

「そりゃ、綾乃ちゃんの暗殺未遂」

「そこです——アチチッ」

昭博がいれたてのお茶の入った茶碗から手を離して耳たぶを触った。

「綾乃の暗殺は、僕たちが介入するきっかけにすぎません。僕が
いわんとしているのは、この倉橋が狂った発端——きっかけです」
「？由里香の儀式でもないのか？」

「先輩の話聞くまでは、僕もそう思っていました。由里香さん
は？」

「違うのですか？」

「うん。これは、あくまで僕の仮定でしかありませんけどね？ 以外と、僕たち当事者ですら、知らない間に準備は始まっていたように思えるんですよ」

「——おじさん。つまり、有里香さんのことを疑っているんですか？」

「そう。悠理君、推理小説が好きってだけはあるね。キーは有里香さんだよ」

「有里香が？ でもそれは倉橋——」

「違う違う。倉橋家当主就任、ううん。儀式も何もない、ずっとずっと前に、すでに予定されていたことが、今、起きているんだと思うんだ。つまり、有里香さんが、修行に出ていた時に始まったことがね」

「そんな前に？ おい、昭博、話が滅茶苦茶じゃないか？」

「論理的矛盾を抱えていることは否定しません。子供の頭でここまでの計画を立案することが困難なことは、僕も認めます」

「——入れ知恵をした者、そして、影で有里香を操る者がいる。教授はそうお考えなのですか？」

「いやあ。さすがに頭いいですねえ。イーリスさん。どうです？ 今度、大学入りませんか？ あなたなら助手に欲しい」

「結構ですが、しかし、その者の姿が見えません。それほどの人物なら、むしろ既に表に現れているはずですよ。見えない、ということとは、いない。ということなのは？ そもそも、それほどの人物なら、由里香さんや教授という近親者が知らぬはずが」

「そう。姿が見えないんだよね。だから、先輩達に頼みたいんですよ」

「？」

「真の敵が誰か、見極めて欲しいんです。これ、大切なことですから」

「真の敵？」

由忠は眉をひそめた。

敵は倉橋家ではないのか？

「ええ。倉橋を潰しても構わないと思っている存在が仕切っているからこそ、今回のこの異常事態が生まれた気がするんです。でなければ、いろいろ説明がつかないんですよ。共倒れの危険性については、本家と分家、共に気づいていないようすし」

「で？お前のことだ。目星はついていないんじゃないのか？」

由忠のその一言に、昭博は頭をかきながら答えた。

「いやあ。理屈こねても、それが見えないんですよ。そこが僕の限界かもしれませんねえ」

「――嘘をつけ」

由忠は、不満そうに呟くとお茶を飲み干した。

「倉橋有里香を操っているのが、“あいつ”だと、そう言いたいんだろうが」

通路を歩きながら、倉橋祐一は、儀式に対する準備に余念がなかった。

「本家の襲撃の準備は？」

「儀式開始の雅楽を合図に、重迫撃砲、対戦車砲の集中砲火がかかります。その後、騎士と自動小銃で武装した兵計40が突入します」
「クッククック……大盤振る舞いだな」その報告に、祐一は喉を鳴らして笑った。

「ええ。フィリピン経由の密輸品、これで在庫がなくなります」

「雄和と五和経由で手配しておけ。それで、奴らの手配は？」

「すでに山に伏せさせています。報告では、儀式祭壇は射程として把握済みだと」

「連中、騎士でも殺れるのだな？」

「そのための彼らです。使用する弾種は対呪用特殊加工弾。万一、

魔法防御がかかっても無効化できます。何より、騎士といえど、遠距離からの狙撃をすべて阻止出来るわけではありません。大丈夫です」

ここまでの準備を一手に引き受けていた若い神官は心証を損ねたという顔になった。

「わかった。大丈夫かどうかは、結果で判断しよう。黒達は何？」

「内通者からの情報通りです。本家周辺で動きがあります。こちらを狙っていることは間違いありません」

「祭壇周辺の魔法防御壁の設置は？」

「万端です。設置は結界と合わせて極秘にやりましたので、黒達は知るよしもないでしょう」

「そう願おう」

倉橋祐一が、ここに来たのは綾乃と初めて対面して以来だった。ぼんやりとした照明が照らす先にある部屋に倉橋の巫女はいる。それは、倉橋家の実権という見えない価値となって祐一を招いている。

——そのためにここまで来たのだ。

祐一は手にした扇子を握りし、じつとりと手に汗を感じていることに気づいた。

——親を殺し、親族を殺し、親友すら殺してここまで来た。

目の前に、今は亡き者達の顔が浮かんでは消えていく。

——その代償、今こそもらうぞ

襖の前で畏まっていた巫女が音もなく襖を開く。

一礼の後、部屋に入ろうとした祐一は、一步を踏み出して息を止めた。

目に見えない凄まじい重圧が、あらゆる存在の部屋への侵入を拒んでいた。

（これは……）

その重圧が、殺気だということに気づいた時には、声がかかっていた。

「ご苦労様です。祐一殿」

部屋の奥からの声に無意識に膝を屈し、そして祐一は自らの行いに驚愕した。

信じられなかった。

馬鹿な。

そんな、馬鹿な。

背筋を冷や汗が流れた。

馬鹿な。

目の前にいるのは、俺の欲望をかなえるための手段、贅でしかない女だ。

それに何故、俺は膝を屈している？

「儀式の準備は滞りなく？」

「はっ！」

馬鹿な！

馬鹿な！馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な！

そんな馬鹿な！

祐一はそれを何とか否定しようとして、出来なかった。
しっかりしろ。

お前は次の倉橋当主だぞ？

それが、なぜ、こんな人形に恐怖している？

お前が仕立てた木偶人形だろうが！？

それを、それを何故恐怖の念で拝んでいるというのだ！？

——恐怖？

俺が、この人形に恐怖している？

そんな馬鹿な！

祐一は、なんとか否定しようとあがいた。

しっかりしろ！

目の前にいるのは、巫女の出来損ないの血を引いた、それこそ出来損ないだぞ！？

だが——

祐一の頭脳はすぐにそれを否定する。

ふざけるな。

そんな対象を俺が引っ張ってきたというのか？
お前だってわかってるだろう？

あの儀式が、実は成功していたことなんて。

有里香の儀式が大失敗に終わったことも。
それ故の現在だと。

そうだ。

本当の倉橋の巫女は、本当の当主は、

倉橋由里香

彼女なんだぞ？

その血だぞ？

俺は、その血を使う。

代々の神官が出来なかったことを、俺はしてやるんだ！

彼の頭脳は、そう自らに言い聞かせようとする彼を、さげすむように言った。

愚かなことを考えている場合か？

それとも、お前は未だに恋い焦がれた女を諦めきれずにいるのか？

「そろそろ、日が暮れますね」

女は、ここから見えるはずのない夕日を思い、天井のあらぬ方向へ視線を向けた。

しかし、女の殺気がゆるむことはない。

だめだ。

どうしても、この女に対する恐怖心が消えない。

このままでは、俺はこの女に取り込まれる。

俺が、この人形を使う主だ！

この人形を主とするつもりか！？

否！

断じて否だ！

祐一は覚悟を決めた。

——なら、利用してやろうじゃないか。

そうだ。

いつだってそうだった。

あらゆるモノを利用してきたからこそ、俺は今、この地位があるんだぞ？

なら、この人形ですら使いこなしてやろうじゃないか。

「祐一殿？」

「はっ！」祐一は、巫女に対する礼節を示すように平伏した。

「——私を殺そうなどと、愚かなことは考えない方が賢明ですよ？」

「！」

一瞬、息が止まった。

「先ほどから、殺意を感じ取れます。なりません」

「……ばっ、ばかなことを。なぜ、なぜ私が」

祐一は視線をさまよわせながら答えた。

「私は巫女に仕える身、数ならぬ我が身の程は心得ております」

「——なら、結構です。時に祐一殿」

「はっ！」

「あの倉橋の巫女を名乗る娘——亜里砂はどうになりましたか？」

「ご心配なく。すでに手は打っております」

「——重畳」

目の前の畳を見るのが精一杯の祐一の前で、衣擦れの音がした。

「参りましょうか？祐一殿」

「はっ？」

声が、すぐ間近で聞こえた。

畳の上には、朱色の袴と、そこから見える小さな足。

その気になれば、自分なぞ一瞬で殺されていたろう。

背筋が凍りついた。

「儀式はすぐです。我らも参りましょう」

「……」

祐一は覚悟を決めて、相手を見た。

そこにいたのは——

前日までの侮蔑の対象

今の恐怖。

それが、倉橋の巫女

自分の未来を保証する存在。

自ら望んで手に入れた、力。

欲望の、化身。

祐一は、まっすぐに見つめた。

麗しい華が、そこにいた。

華の美が、祐一の心を決めさせた。

——美しい。

祐一は心からそう思った。

その心に、恐怖という二文字はなかった。

先日までのあどけなさは微塵も感じさせない。

あるのは気高き気品。

少女でも、女でもない、えもいわれぬほどの美をまとう——まさに、華。

麗しき華

見まごうことなき巫女が、そこにいた。

それはかつて、激しい思慕と共に見つめていた彼女そのもの。
彼女の娘だからこそその華が、目の前にいる。

俺は、彼女の未来を、この手に掴んでやる。

彼女を、彼女と共にお願い、かなわなかった未来を——
狂おしいほど望みながら手に入れられなかったその代償を、今、
この手に掴んでやる。

祐一は、力強く頷いた。

「参りましょう。巫女」

祐一の欲望を満たすために作られた華——

「はい」

祐一は立ち上がると、その後続いた。

彼の目の前にいるのは——

倉橋の巫女

先代の倉橋の巫女、倉橋由里香の娘

倉橋家直系の血を引く純血の巫女

最後の巫女

瀬戸綾乃が、儀式へ向け歩き出した。

第十八話 「倉橋の巫女中編」

神社から約500メートルの藪の中。

花火の筒のような金属の塊―迫撃砲―が隠れるように設置され、その周囲では、男達が緊張の面もちで時計を気にしていた。

「よお。悪い悪い」

そこへやってきたのは、彼らにとって見慣れた男――仲間だ。

「何が悪いだ。バカ」

男が金属の塊の側へ近づくと、そうとがめる声がした。

男はその声の主の横へ座った。

「そういうな。出物腫れ物ってヤツだ」

「緊張感のない！」

「必要ないだろう？」

「何？」

「――あんた、死ぬんだからさ」

ザクッ！！

闇の中で鈍い音が響き渡り、動揺が広がった。

「なっ！？」

グサッ！

ギャッ！！

「きつ、貴様！」

ザクッ！

ドスッ！

悲鳴と鈍い音の連鎖が数秒続き、辺りは沈黙した。後に立つのは、先ほどの男だけ。

その足下には、ついさっきまで彼を仲間と信じて疑わなかった者達の骸が転がっていた。

「……」

男は無表情にそれを見つめると、闇夜へ消えていった。

それから10分もしない内のことだ。

「襲撃部隊と連絡がとれないだど？」

「はい。迫撃砲班、狙撃犯、ロケット班、すべて連絡がとれません」

「潰された———そういうのか？」

「その可能性が最も高く……」

「草か……」

祐一は歯ぎしりしながら言った。

「黒共の放った草が動いたな」

草———

敵の中へ仲間として入り込み、時が来ると敵として動き出す一種のスパイ達。

自分たちの中にそんな奴らが紛れていたことになる。まずい。

「このままでは襲撃は」

「……」

祐一が口を開こうとした時、

「問題ありません」

そう、祐一の言葉を遮ったのは、祐一の前を歩く綾乃だった。

「放っておきなさい」

「しっ、しかし！」

「儀式の後、私が直接始末します。———それではご不満ですか？」

「いつ、いえ！」

「ではそういうことです。今は、儀式に全精力を傾けなさい」

「はっ！……巫女の仰せだ。よいか！全兵力を祭壇周辺の警護にあてろ！」

「了解！」

もくろみが狂ったのは、実は祐一達、分家だけではなかった。

黒率いる忍達の主力部隊が、分家祭壇へ向けて森を移動中に、予期せぬ第三者と接触し、足止めを喰っていた。

ギインッ！

「ギャッ！」

黒装束の忍の一人がイーリスのナイフの一撃に断末魔の悲鳴を残して倒れた。

「イーリス、ここはくい止める。由里香を連れて本家へ行け！」

「了解」

「由忠さん。それでも」

「この程度はどうでもない」 由忠は一人を切り伏せながら由里香に言った。

「少しは俺を信じろ」

「……はい。ご武運を」

一礼の後、由里香とイーリスは森の中へと消えていった。

その様子を少し離れた場所から見る数名の者達がいた。
全員が黒装束に身を固めている。

「姫。部隊のすでに半数が脱落」

そう報告する声も動揺が隠せていない。

「頭は？」

「別働隊はすでに分家へ到達している時間です」

「これ以上足止めを受けるわけにはいかん。雲、部隊を率いて別働隊と合流しろ」

「姫！？」

「ここは私がくい止める。任務が優先だ」

“姫”と呼ばれた女は刀を抜いた。

「はっ！」

任務のために全てを犠牲にする。

それが忍の不文律。

だからこそ、それに従うのは当然なのだ。

また一人……いや、二人、部下がやられた。

これ以上はやらせるわけにはいかない。

女は、無言で敵に斬りかかった。

ほう？

由忠は新たな敵を、感動に近い感情をもって見つめた。

忍装束を纏っているが、それでも身体のラインは見事なものだ。

イーリスといい、この女といい、俺はついている。

「名前は？」

「忍に……まして、貴様に聞かせてやる名なぞない」

それが、女と由忠の交わした最初の会話だった。

年頃なんだろう。由忠の耳にはあどけなさが感じられた。

「おいおい。ベッドで呼ぶ時、名無しじゃ困るだろうが」

「ベッド？墓場のことか？」

「……ひどい言いぐさだ。調教が必要だな」

互いに騎士。

10メートルの間合いは近すぎる。

それを女は一気に詰めた。

女の手は簡単だ。

体格と筋力で男には負けるが、瞬発力では勝てる。

そんな女の繰り出す手は……

右の袈裟斬りをわざとかわさせて懷に飛び込み、左の突き技を心臓にたたき込む。

右をかわすことで体勢を崩させ、そのまま相手の懷に飛び込んで必殺の一撃を繰り出す連続した攻撃こそ、彼女の必殺の手だ。

だが、由忠には悲しくなる位、その手が読めていた。

あまりに稚拙にすぎる手だ。

「気乗りせんな」 ぼやく由忠が動く。

絶対の自信を持つ相手の右肘を剣の柄で突き、腹に膝の一撃を加える。

ただそれだけ。

本気の一部も出していない。

だがそれですら、女にとっては信じがたい攻撃だった。

「――グッ！」

腹に喰らった一撃にたまらずその場に崩れ落ちるかと思いきや、
気力だけで地面を蹴って間合いをとる。

その双眸からは戦闘の意志は消えていない。

「結構な自信があつたんじゃないか？今のコンビネーションアタ
ック」

「――何人、あれで仕留めたと思っている。自信があつて当た
り前……信じられない。最低だ」

「人は殺してはいないだろう？しかし、驚いているな」

「あ、当たり前だ！絶対に成功する自信があるってことは、絶対
に失敗しない自信がある。そういうことだ！例え実戦でも！」

「ほう――」

由忠は形のいいあごを撫でながら思い出したように言った。

「そこまで女を驚かせたことは、近頃なかったな。うん。実に感
動モノだ……そう。あれだ――品のない話だが、キャベツ畑やコ
ウノトリを信じてる女に無修正モノを突きつけたような快感だな」

「……経験が？」

「モノのたとえだ」

「墓場に刻んでやろう。“最低の変質者ここに眠る”と」

「墓石代は持てよ？」

「口が災いして人生苦労するクチだな。そうだろうか？」

「クチで女を喜ばせるのは得意だ」

「口で女を滅ぼすの間違いだ」

女は由忠に再び襲いかかった。

二本の小刀を連続して繰り出し、その間に蹴りや肘での攻撃を加える。

悪く言えば数にモノを言わせる攻撃。

だが、

「無駄に疲れるだけだぞ？」

「えっ？」

ガンッ！

刀を交差して首を狙った一撃をかくぐるようにして放たれた由忠の一撃は、女の鳩尾みぞおちにめり込んだ。

「——ぐっ」

「落ちろ。堕ちろともいう。次に目を覚ましたら快樂の世界の住人に生まれ変わらせてやる」

「だっ——誰がだこの変態っ！」

パンッ！

突然、周囲に乾いた音が響き渡った。

女の平手が由忠の頬を打った音だ。

「久しぶりだな……女の平手の味は」

鼻血を押さえながら由忠はそれでもなお、平静を務めた。

「普段は……刺されているんだろう」

「そこまでいっていないぞ？……うん。きっと、多分」

「はぁ……はぁ……時間がないんだ。こんな所でお前みたいな最低男を相手にしているわけには……」

「最低？」

由忠は怪訝そうな顔で問いかけた。

「誰のことだ？」

「私の目の前で鼻血流している男のことだ！」

「？」由忠は周囲を何度も見回した後、答えた。

「幻覚か？」

「死ねっ！」

勝てない。

それはわかっている。

だが、

だがそれでも。

女は理解していた。

ここで逃げるか勝たねば、

私は命を、

あるいはもっと大切なものを、

よりにもよってこんな変態男に奪われてしまう。

そんなのはイヤだ。

何より

私には任務がある。

忍軍頭領の娘としての。

負けられない！！

ギインッ！！

渾身の力で放った上段からの一撃を、由忠の刀は易々と受け止めた。

「終わりにするか？」

「ああ」

女の口元が悔しそうに歪んだ。

「どう終わりにしたい？」

「貴様を殺してハッピーエンド」

「……残念だが、お答えできそうにない」由忠は口元だけ笑って

答えた。

「敵同士が愛し合うという選択肢はないのか？」

「――私に愛されたいのか？」

「ああ」

「じゃあ、愛する前に殺してあげる」

「逆なら本望だな」

「――嘘つき」

「!!」

ダンッ!

由忠の身体を蹴って女が間合いをとった。

「お、お前――」

由忠はなぜか顔面蒼白。

内股のまま、崩れ落ちそうな姿勢をкаろうじて維持していた。

「そ、それは反則だろうが」

男性にしかわからない痛みに耐えつつ、由忠はそう恨み言めいた言葉をかけた。

「仕込みで潰されなかっただけでも感謝しろっ!」

「――俺に惚れたか？」

「誰がだっ!」女の手が一閃した。

「!!」

連続した閃光が暗闇を白く染め上げ、その隙間を某手裏剣が由忠を襲う。

「やったか!? ――なんでっ!？」

閃光による目つぶしと同時の手裏剣攻撃。

闇夜における必殺に近い技。

それなのに、相手は平気な顔をして立っている。

「お前、アホか」

由忠はややあきれ顔で女に言った。

「俺は魔法騎士だぞ? そんなもの、何の役に立つ」

「ならば！」女の手が懐に入った。

「無駄だって」

「!？」

女が理解するより早く由忠の一撃が女に襲いかかった。

「——うん。やはり女はこの方が似合う」

「えっ？」

女は恐る恐る下を見た。

妙にすーすーする。

「……えっ？」

「ほう？防御服越しでもなかなかと思っていたが——大したものだ」

「……」

きやあああああつつ!!

バッチーンッ!!

女の悲鳴と乾いた音が辺りに響き渡った。

「バカッ！スケベ！最低っ!!」

女は切り裂かれた服の前を泣きながら押さえ、その場にうずくま
った。

「こ、こんなこと——許されると思って」

「何。合意の上だ」

「してないっ！」

「まあ、いい。——そのまま消えろ」

そういう由忠は、もう女を見ていなかった。

「……えっ？」

「そんな格好で俺の相手ができるか」

「……出来ないのか？」

「ベッドの上限定でな」

「どこまでスケベなんだこの最低男っ!!」

「何とでもいいえ」

祭壇の方で動きがある。

儀式が始まったな。

「女は斬らない。特にキレイな女の子はな。……そう、決めているんだ」

「……嘘くさい」

「突くのは好きだが？」

「——消えろ」

「お前が消えろ。それとも本当に突き殺されたいのか？」

「……」

女は、恨めしそうな顔で由忠を睨むと、そのまま闇の中へと消えていった。

第十九話 「倉橋の巫女 後編」

騎士――

世界最強の戦闘能力を持つ者達。

日本においてその力を暗殺や諜報に特化した組織。

それが、忍^{しのぶ}。

彼らが今、分家当主の首を狙って集結しつつあった。

警護にあたる者達は、彼らの存在に気づいていない。

（なんということだ）

忍を率いる頭領、“黒”はその光景をはにがみしながら睨んだ。

（騎士に対する警備がまるで出来ていないではないか）

代々、血生臭い歴史のある倉橋家の分家にもあろう者が、あまりにずさんだ。

これ見よがしに銃を手にした者達を歩かせ、狙撃の的にまでしている。

これでは襲ってください。殺してくださいといっているようなものだ。

（なら、殺してやる）

黒は手で合図を送り、部下と共に一斉に分家の儀式へと突入した。

雅楽の音色

香の匂い

冴えた月光

世界の全てが神妙に畏まっているかのようにすら感じる中、

綾乃が場に立った所だった。

千早を纏い、額には天冠てんかんを戴き、神楽鈴を手に行っている。

その彼女の口から流れるように祝詞が読み上げられる。

舞の始まりだ。

他の神官と共に幕屋に座った祐一は、その光景を高揚感と共に見入っていた。

これで終わりだ。

ついに俺が実権を握る。

新たなる巫女

倉橋綾乃と共に、倉橋の力を手にするのだ。

あの時かなわなかった想いを、この力（権力）と共にこの手中に収めてやる！！

祐一は、舞う綾乃の姿に、母由里香の在りし日の姿を重ね合わせ、万感の思いでただ舞を見つめていた。

心から愛し、求め、そしてその血故に手に入れられなかった最愛の存在。

倉橋由里香。

祐一の目に映るのは綾乃。

だが、心に映るのは、在りし日の由里香でしかない。

まるで祐一の中に眠っていた由里香への思慕が形となったようだ。走馬燈のように、由里香の顔が、姿が浮かんでは消えていく。

（ああ。俺は……）

祐一は改めて痛感した。

（俺は、由里香さんをまだ……愛している）

「由里香さん……」

それは、誰にいったわけではない。

ただ、口から零れた言葉。

それが、倉橋祐一最後の言葉だった。

首尾は上々だ。

その気になれば、あの巫女も殺せた。

黒は祐一の首をかき抱いたまま、本家へ向かって部下と共に戻る道を進んでいた。

（その気になれば、あの巫女も殺せたものを）

それが、黒にとって腑に落ちない所だ。

分家による瀬戸綾乃誘拐成功と同時に暗殺命令が撤回され、一切

の手出しが禁止された。

何故だ？

黒にはわからなかった。

有里香が、何を望んでいるのか、何を考えているのか。

（まあ、よい）

黒は、手にした首の重みを感じながら呟いた。

（我らは忍。命に従うのみじゃ）

黒は、そう思うことにした。

神官達に起きたことに関係なく、舞は進む。

世俗ではトップアイドルとしての名声を欲しいままにする瀬戸綾乃の舞。

正統なる倉橋の巫女、瀬戸綾乃の舞。

それは、優雅にして優美。

天上の舞というにふさわしい
まさに“天女の舞”。

だが――

「まっずい!!」

その美を前にして舌打ちしたのは、黒達の突入のせいでタイミングを逸した水瀬だ。

水瀬の目は、綾乃の身の回りで起きている不可視の出来事を、すべて捉えていた。

舞う毎に、単なる暗闇にしか見えない空間へ向けて綾乃の身体から魔力が放出され、渦を巻いて天へと伸びていく。

上空100メートルほどの所まで伸びた魔力の渦が、蜷局とぐろを巻き広がっていった。

それが水瀬にはどんな現象だかわかっていた。

“召還”だ。

この世界、すなわち人界を含む六界……神界、天界、精霊界、人界、魔界、霊界……のうち、自らの存在する人界と任意の界同士をつなげ、求める“存在”を招く魔法。

それが“召還”だ。

目の前で起きているのは、精霊界からの召還、つまり“サラマンダー火蜥蜴”などの小精霊を召還する魔法程度のチャチなそれではない。

それと目の前の召還は、はっきり線香花火と反応弾（原子爆弾）

ほどの違いがある。

もし、綾乃や神官達が線香花火のつもりで反応弾を爆発させるつもりなら……。

それを水瀬は恐れた。

単なる爆発でもこの周囲の地形は一変するよ？
隕石の直撃でも受けた方がまだマシだよ？

そして、まっとうに力が作動したら……。

……もっと、冗談じゃない。

この規模での召還により、二つの世界に大穴が開けばどうなるかは、全人類が知っていることだ。

人類はそれを味わったことがあるのだ。

あの一年戦争だ。

人界と魔界をつなぐ^{ゲート}門。

あれがすべてのカギだった。

あれから飛び出してきたのが無数の魔族・妖魔達。

彼らにより、自分たち人類がどのような代償を支払ったのか、あの連中はわかっていないのか？

焦燥感にせき立てられるように、水瀬は上空を見上げた。

上空の蜷局は拡大の一途をたどり、そして空間を浸食しはじめている。

浸食された空間のほころびから何が飛び出してくるか、それはまだわからないが、無事で済むことだけはありえない。

小型の“門”が完成するのは時間の問題だ。

そして……。

もっと問題なのは地上。

つまり、綾乃だ。

綾乃の身体から放出される魔力の強さは明らかに異常だ。

あまりに強力すぎる。

綾乃が自分の対、つまり、自分と同じレベルの魔力の持ち主だとしても、これは異常だ。

水瀬にはすぐにわかった。

並の魔法騎士なら近づくことすら出来ないだろう。

すでに周辺で倒れ伏す神官や巫女達が動かないのは、彼女の魔力により殺されたからだ。

水瀬はすぐに結論を出した。

“魔力暴走”

魔力を原子炉に例えたら、綾乃という炉から発せられるエネルギーは、暴走を覚悟しなければ取り出せる代物ではない。
いや、暴走していることは明らかだ。

このまま放っておけば、綾乃は暴走する魔力により――。

上空には門。

地上には爆発寸前の世界最大級の魔力の塊

（逃げようかな）

水瀬は一瞬、本気でそう思ったあと、頭を強く横に振った。

「ダメダメダメ！」

水瀬は自分に言い聞かせるように言った。

「やめさせなくちゃ！」

でもどうやって？

「えっと……えっと……逃げるんじゃくって……ううっ」

水瀬は綾乃に向かっての強行突入を決めた。

綾乃を儀式から引きはがして儀式を止める。

それしかない。

意識を奪うか、精神に侵入して魔力へのコントロールを奪えば沈
静化だって不可能じゃない。

それが無理なら……

無理なら……

水瀬の顔が苦痛に歪んだ。

刀を握む手の震えを押さえられない。

やりたくはない。

でも、それでも。

その選択肢が実現しないことを祈りながら、水瀬は祭壇に飛び込んだ。

第二十話 「罪」

ぐいっ

ゴキッ!

突然、襟首を掴まれた水瀬の首が鈍い音を立てた。

「!?!」

首が痛い。

捻挫したのは間違いない。

水瀬は、首に治癒魔法をかけながら痛みに耐えた。

「悠君?」

その声に振り向くと、そこには意外な人物が自分を見つめていた。

「……お母さん?」

その言葉にニコリとほほえんだのは、水瀬の母、遥香だった。

信じられない。

長野の実家にいるはずなのに。

「お父さんに会いに来ました。所で、悠君は、何してるの?」

目の前で起きていることなんて、まるで感心がないという顔の遥香がそう言った。

「え? な、何しているって……あ、あれを止めようと思って」

水瀬の指さす先には、暴走を続ける綾乃がいた。

「まあ。大変……そう言ったほうがいい?」

「あの……まあ、大変って……そんな他人事みたいに!」

「悠君は止めようとしているの? どうやって?」

「そ、それは……」

「まさか悠君ったら、綾乃ちゃんを引き剥がせば何とかなるなんて、思っていないでしょうね? 思っていたら、お母さん、お尻ペンペ

ンしちゃいますよ?」

「……ち、違うもん」

凶星をつかれても、それを否定しようとする水瀬は、母から目をそらせた。

「ふうん?じゃあ、どうやって?」

「う……ううっ」

息子のことが手に取るようにわかる母の問いに、水瀬は返答することが出来なかった。

「悠君と綾乃ちゃんがまともに接触したら“中和現象”が起きる。だから、魔力の暴走が収まるなんて考えているなら、ぶっぶーですよ?」

「……なんですか?そのぶっぶーって」

「可愛くない?」

「ふ、不正解ってことですよね?」

「そう。ほら、テレビのクイズ番組でよくやってるじゃない?」

遥香は言った。

「……考えてみなさい?魔力も、あれだけのレベルになったら、中和させるには、あなた自身が暴走するしかないでしょう?」

「……え?そうなんですか?だって綾乃ちゃん」

「あのねえ?」

遥香は息子を叱る目で言った。

「“中和現象”の意味がよくわかってないみたいね。いい?」

中和した所で、綾乃ちゃんに触ることが出来るのが関の山。

綾乃ちゃん自身の暴走は止められない。

何故?

綾乃ちゃんが暴走しているのは、綾乃ちゃん自身の意志だから。

“中和現象”は、意志までを中和できません。

それに、“中和現象”が邪魔するから、あなたの魔力で綾乃ちゃんを止めることは出来ないでしょう?」

「じゃあ、どうやって!？」

母の言いたいことはわかる。

だが、それはつまり、自分には何も出来ないといわれているのと同じなのだ。

そんな息子に、

「お母さん達に任せなさい」

にっこりと微笑みながら、遥香はそう答えた。

「へっ？」

「お母さん達が何とかしてあげる」

「ど、どうやって？」

「お願いしますは？」

「え？」意味がわからない。

「人にモノを頼む時は、お願いしますっていわなければダメですよ？」

あくまで遥香は、息子への母としての姿勢を崩そうとはしない。

「……お願いします」

しぶしぶながらの水瀬の言葉に、遥香は微笑みを崩さずに頷いた。

「はい」

その頃――

有里香達本家の巫女・神官達は、分家同様に幕屋の中で儀式を見守っていた。

ただ、有里香の目には退屈そうな色が浮かんでいた。

雅楽の音色は嫌いではない。

昔を思い出す。

あの頃はよかった……。

あのお方が、私を愛してくれたあの頃は……。

有里香はため息混じりに舞い続ける亜里砂を見つめた。

つまらない。

舞手としての才能はあるが、私に比べれば稚拙過ぎる。

……まあいい。

そう。いいのだ。

こんな娘の舞なぞ、そこら辺の奉納神楽と同じ。

“力”を微塵も感じない。

そんなモノに意味なぞ存在しない。

舞は終盤に近づいていた。

亜里砂はそつなく舞を続けている。

ふん。

まあ、少しは褒めてやるべきか。

有里香は、そう思い、視線を山へと向けた。

強い。

強力過ぎるほどの魔力を感じる。

あちらは成功しつつあるようだな。

よろしい。

こちらの茶番も終わりだ。

有里香は席を立った。

控えていた巫女達が怪訝そうな視線を向けるが、有里香はいつこうに構う気配がない。

幕屋から出た有里香の手に某手裏剣が握られていたのを、誰も気づかなかった。

「黒」

「お側に」

黒達忍が、幕屋の裏に控えていた。

「首尾は？」

黒は、無言で手にした包みを開いた。

「……ご苦労」

「はっ」

「そのゴミはその辺にでもうち捨ておけ。由里香が来る」

「はっ？」

黒は、突然の言葉に初めて有里香を見た。

その目には憎悪の光が宿っているのを、黒ははっきりと見た。

「由衣ゆいがしくじったそうだな」

「面目次第もございません」

「己が娘の不始末、由里香の血をもってあがなえ。それで不問だ」

「……はっ」

「はあ……はあ……」

走り続けの行程に、由里香はさすがに息があがってきた。
無理もない。

そう思ったイーリスは足を止めた。

「30過ぎの専業主婦だ。」

この距離、いくら鍛錬していた所で、息が切れても当たり前だ。

「大丈夫ですか？」

「……大丈夫。そう、いいたいのですが」

年かしら？というセリフだけは口にしない由里香だった。

「今となっては、下がることも出来ません」

「覚悟の上です……はあ……さて、行きましょう！」

気丈に言っただけの由里香の手がとっさに動いた。

それは、イーリスが迎撃体勢を整えるのとほとんど一緒だ。

「……水龍の剣！」

由里香の手から螺旋状の青い炎が走り、闇を切り裂いた。

その隙間を、イーリスの魔法が貫く。

「ぐあっ!？」

「ぎゃっ!」

次々と男達が断末魔の悲鳴をあげて地面に落ちた。

「私たちも、ついには本家の敵ですか」

「最初からでは？」

「ふんざりがつかなかったのです」

由里香は悲しそうに呟いた。

「何かの間違いであって欲しいと……そう……」

「由里香殿は」イーリスは訊ねた。

「本当は、本家に戻りたいのではないですか？」

「……それすら、わかりません」

「どうして？」

「私は綾乃がいればそれでいい。そう思っているだけです。です

から、家というものが、どうしてもよく思えてならないのです」

「……それが、今回のすべての引き金なのでは？」

「……」

「あなたは、綾乃さんを出産した後」

イーリスは、はっとなって黙った。

綾乃を楯に本家に戻り、あなたが本家を治めようとすればよかったのではないか？

そう、いいたかったのだ。

だが、それがどういう意味か、イーリスはすぐに悟った。

そして、その軽率さを深く悔いた。

由里香の娘、当主にしては孫。

それは、純血の倉橋の巫女。

家にとっては喉から手が出るほど欲しいはずの存在。

当主たる巫女が、当主であるが故に求められる最高の手柄。

次の巫女。

それを産む資格を握るのは、由里香だけ。

家は、それでいい。

イーリスは、ここまでしか考えていなかったのだ。

だが、かつての由里香は、夫と共に、その先を考え、そして決断したのだ。

娘はどうなる？

次期当主、そして倉橋の巫女として―――道具としてのみ扱われる。

そこに、今、綾乃が享受出来る自由は存在しない。

愛する歌も歌えず……

未来は、ない。

それは、由里香自身が一番わかっていることだ。

だから、由里香達は選択したのだ。

娘が、人として生きるべき道を。

それが間違いだと、イーリスは思っていない。

何より、他人であるイーリスが口を挟むべきことではない。

子のためによかれと思い、親として選択したことだ。

子を持たぬ身が軽々しく論ずるべきことではない。

「今、失われている命の意味がわかります」
黙るイーリスに、由里香は呟くように言った。

「私が、殺しているのと同じだと」

「由里香殿！」イーリスは言った。

「なりませんっ！そんな考えは！」

「……」

由里香は答えることなく俯いた。

そう。

イーリスが言いかけたように、例え娘を代償にしたとしても、由里香が当主の座を取れば、このような騒ぎは起きずに済んだ。

何より、亜里砂を綾乃の代償として苦しませてきたことを、由里香は否定するつもりすら、ない。

誰かを生かすために、誰かを犠牲にする。

それを、よりにもよって血を分けた身内でまかなっているのだ。

言い逃れても、真実からは逃げられない。

逃れる気すら、ない。

「自分を責めすぎるな」

突然、背後の暗闇から声がした。

由忠だ。

「自分を責めすぎるな。甘ったれてる証拠だぞ」

「甘え……ですか？」

「ああ」

「どこが、ですか？」

ムツとした顔で問う由里香に、

「……どこまでバカなんだろうな。人妻って種族は」

由忠はあきれ顔で言った。

「よく考えて見る。由里香。そもその根本原因は、お前でも有里香でもない」

「？」

「有里香を操る奴……自分の主人がそういつていたろう？ あれは、遠回しにお前達に罪はない。そう諭す言葉でもあるんだ。この言葉を否定するなら、俺から昭博に伝えてやる。お前は女房にこれっぽっちも信じられていないと」

「そ、そんな……ことは」

「あるんだ！」

由忠は語気を荒くして言った。

「ここまで来てウジウジ考えるな。もし、犠牲が申し訳ないと思うなら、さっさとこの状況をどうにかすることを考えろ！」

「――はい」 由里香は、そっと目頭を押さえながら頷いた。

「さもないければ」

由忠の語気は荒い。

だが、明らかに焦りが浮かんでいた。

「綾乃ちゃんが死ぬぞ」

「綾乃が？」

「ああ。見ろ」

「！？」

「なっ！？」

由忠が指さした先。

それは山。

分家の儀式が行われている方角。

上空に魔力が集まり、空間が歪んでいる。

見たこともない光景に、由里香もイーリスも言葉を失った。

「あっちは成功しかけている」

「あれが、儀式の成果だ？」イーリスが驚いて言った。

「空間が歪むほどの魔力で、何を呼び込むつもりなのですか!？」

「さあな」

由忠はイーリスの肩に軽く触れて言った。

「これ以上、立ち話をしている時間はない。昭博に任せればいい」

「昭博さん？」由里香が驚いた。

「旅館にいるのでは？」

「あいつはずっと水月の儀を調べていたんだ」

「てっきり、旅館で待っているものと」

「――あいつだって父親だ」

まるで夫の威厳を見せつけるかのように、由忠は言った。

「あいつはそれがわかっている」

「!!」

「綾乃ちゃんは、あいつにとっても大切な娘なんだ。それを守ろうとしている」

「……」

「あいつは、自分の知識という最大の武器を使って儀式を止める。その方法を見つけたんだ。もう、あいつに任せるしか、俺達には手がない」

由忠は二人を促しながら言った。

「行くぞ。俺達は有里香を、その背後に潜むモノを止める」

「で、でも、儀式を止めるって、昭博さんは!?!」

「遥香とバカ息子がいる。あいつらを止めることなど出来るものか」

「遥香さんが?」

「ああ……」

由忠は、浮かない顔で言った。

「俺は、敵に同情するよ……」

第二十一話 「降臨」

「それじゃ、悠君？」

遥香が指さした先。

そこには物陰に隠れながら移動する男の姿があった。

「？」

遥香は水瀬の問いかけより先に、男の元へ移動を始めた。

水瀬は無言でついていく。

男と合流した所は、あの幕屋の裏。

辺りには動かなくなった巫女や神主の亡骸が転がっている。

男は、その中を無言で立っている。

黒装束に身を固めている姿を見るだけだと、あの忍達と何ら変わる
ることがない。

——いや、彼らそのものだ。

それに自分の母は警戒すらしていない。

水瀬は、そこにひっかかった。

「お母さん？」

「これ。人にあつたら今晚はとご挨拶なさい」

ポンッ。

軽く頭を叩かれた水瀬は、しぶしぶながら頭を下げた。

「こ、今晚は」

「やあ。悠理君」

「えっ？」

水瀬はその声に思わず顔を上げた。

黒装束の男から聞こえてきた声。

それは——

「お、おじさん!？」

「驚いたかい？」

男が顔を覆う頭巾をとる。

そこにいたのは——昭博だった。

「いやあ。久々ですよ。この忍装束に身を包んだのは」

「お、おじさんって」

「僕も忍の一人だったんです。——まあ、頭領の地位は黒へ譲りましたがね」

「——へ？」

「この忍装束、魔力防御も兼ねているからこういう魔力異常地帯化した所でも平気なんだ」

ちらと死体を見た昭博は続けた。

「周りの人達には気の毒なこととしたけど」

「とにかく、覚えておきなさい？ 瀬戸家は代々、倉橋家付きの忍軍頭領の家柄です」

遥香が悠理に諭すように言った。

「そして、昭博さんはその跡取り、つまり、次期頭領候補筆頭の一人でした」

「まあ、僕は地位より由里香さんをとりました。後悔はしてませんよ？」

「くすっ。そうですか？」

「そうです」

昭博はわざとらしく咳払いをした後、水瀬に言った。

「とにかく、事態は切迫しています。綾乃を止めます」

「でも、どうやって？」

「魔力の根本を断ちます」

何気なく言われた言葉の意味に、水瀬は正直、戸惑った。

「って、おじさん？ ま、まさか、綾乃ちゃんを！？」

「まさか」

その意味がわかるのだろう。昭博は笑って否定した。

「あの力のほとんどは、綾乃の力ではありません。綾乃を媒体に集まっている他の力です」

「他の力？」

「ええ。正しくは、地の力というべきですね」

「？」

「すみません。僕としたことが」

昭博は頭をかきながら頭を下げた。

「いけませんねえ。僕も焦っているようです。まず、この水月の儀が、古来、なぜここで行われていたか。そこから説明しなければなりませんね」

「そんな古くから？」

「そうです」

昭博は微笑みを崩さずに言った。

「そこからでなければ、全てがわからずじまいになります。パズルのピースだけいくら見ても、全体は掴めません」

「———はあ」

「水月の儀がなぜ、ここで行われていたか？そして、何故、他で行われるようになったか？———これが、ようやく3時間ほど前にわかったんですよ」

「そんなにギリギリになって？」

「ええ。何しろ時間がないから、遥香さんにもご協力いただいて」

「———お母さん？」

「前から頼まれていたんだけど、天界の帝室図書館の知り合いにね？人間界に関する書庫をアタってもらって、こっちもつい1日ほど前によくわかったのよ」

「それって！」

驚いたなんてものではない。

自分の母の立場は知っている。

それが、人間界にて公に出来ない立場だということも含めて。

それを、肝心の母が堂々と漏らしている。

「事態が事態です」

まるで、息子の疑念を振り払うように、遥香はきっぱりと言い切った。

「私の立場からしても、このような事態は止めなければなりません」

「……はあ」

「で、私も驚いて昭博さんと合流したってわけ。お母さん、エラいでしょう？」

どう？といわんばかりに顔をのぞき込んでくる遥香に、水瀬は引きつった笑顔で頷いた。

「はい。とっても」

「そうでしょう？——さて。昭博さん。続きを」

「はい。古文書の記述が遥香さんの資料で裏付けられたんです。

あれは、“地”の力を利用しているんだって。」

「地の力って？」

「実はね？この丘全体が巨大な鍾乳洞って前に言ったけど、その鍾乳洞を構成しているのは、ただの岩石とは限らないんだ」

「ただの、石じゃない？……ウランとか？」

「近い。魔晶石だよ」

「！？」

「ははっ。驚いたね。日本だと山梨県白根地方が有名だけど」

「まさか、魔晶石の鉱脈が？」

「そう。儀式は、地に眠る魔晶石の鉱脈に宿る力を引き出して、それを利用していたんです」

「つまり、巫女を媒体として、魔晶石の魔力を使って召還の儀式

を？つまる所、巫女はその生来の魔力を使うっていうより、それじゃ、自然界に存在する魔力を利用するから……技術が求められるんじゃないですか？」

「そうです。そうです」昭博はうれしそうに頷いた。

「遥香さん。やっぱり、悠理君は聡明な子ですね。それで、わかったでしょう？」

「それじゃ、歴代の巫女って」

「代々の巫女を調べてみましたが、儀式がここで行われていた間の死亡率は7割以上です」

「10人やって、7人が死ぬ儀式？ほとんど人体実験じゃないですか」

「その原因が、この強力な魔力なんですよ。さっき悠理君が言ったとおり、求められる技術が不足し、結果死んだと考えると間違いないでしょう」

それはそうだろう。

水瀬は思った。

魔晶石のエネルギーと一言で言うが、1立方メートルサイズの魔晶石一つあれば地方の都市に必要な電力なんて全てがまかなえるほどの莫大な出力を誇る代物だ。

プルトニウムやウラニウムを使った反応炉応用型発電システムが日の目を見ないのも、この魔晶石を利用した発電システムの方が、半永久的に、安定し、かつ、クリーンで、廃棄物がでないなど、たった一つを除いていいことづくめだからだ。

ここの地下にどれほどの魔晶石が眠っているかわからない。

だが、たった一つ言えること。

それは、

“どの程度であれ、発せられる魔力は、人体が耐えられるほどの代物ではない”

そういうことだ。

「代々の巫女は、地下に眠る魔晶石の力を、自らの体を媒体にして引き出し、そして召還の儀式を成し遂げようとしたのです」

「そんな無茶な」

まるで、高圧電線が切れたからといって、人間に切れた電線の両端を掴めというような話だ。

「そう。無茶でした」

昭博は立ち上る魔力の柱を見つめながら言った。

「巫女に求められた技術とは、媒体として自らを上手く守りつつ、空間をこじ開け、対象を召還し、かつ、自らへ対象を招き入れた後、流入する力を止めること——無茶ですよねぇ。いや、昔の人ってのは、何考えてたんだか」

「だったら、ますますはやく綾乃ちゃんを助けないと!」

「そうです。だからまず、状況を正しく把握してください」

昭博の目は、反論を許さない厳しい眼差しに変わっていた。

「……」

その目に、水瀬は口を閉ざした。

父・由忠に睨まれるよりも怖かったからだ。

「その無茶をやれる巫女なんてそうザラにいるはずがない。相次ぐ犠牲に倉橋家がネを上げたんです。当主たるべき巫女がそうボロボロ死んでは、家系が絶えますからね。」

だからこそ、儀式は魔晶石の鉱脈から外れた場所。魔晶石の力がダイレクトに及ばないが、そこそこ取り出せる場所へと移動し、儀式の内容も簡略化された。倉橋の血を守るために——それが、巫女の儀式の変遷の真実でしょうね」

「……その、犠牲になった巫女達と同じ立場に立っている綾乃ちゃんとは……」

「近い……いえ、それよりマズい立場にあります」

「昭博さん？それってどういう？」

遥香が初めて口を開いた。

「綾乃さんは一体——」

「代々の巫女は、媒体になる方法をレクチャーされていたはずで、す。心身の防御方法や流入する魔力のコントロール方法……ただ、魔力に耐えられなかったからこそ、彼女たちは死んだ。ところが綾乃は」

綾乃は舞い続けていた。

舞うたびに地から吹き上がる白い炎のごとき魔力。

水瀬の目に、昭博が唇の端をかみしめたのが見えた。

「何のレクチャーも受けていない。そんな方法を知らないままで、ああなっている。完全な暴走です。……遥香さんが言いたいことは、何となくでもわかります。むしろ、綾乃がそうだからこそ、綾乃はまだ生きている。そういうべきでしょう」

「？」

綾乃ちゃんは何だって？

水瀬は意味がわからない。

助けを求めるように、水瀬は昭博の言葉を待った。

「とにかく、今の綾乃の状況は、あらゆる状況の中でも最も危険です」

（見ればわかる）水瀬はそう思った。

「あれは、魔力が体内にたまった過負荷状態です」

「過負荷？」

それは思いつかなかった。

「ええ。綾乃がきちんと巫女として、なすべきことの方法を知って、魔力をコントロールする術を身につけていたら、こうはならなかったはずです。」

ところが、綾乃はその方法がわからない。ただ、無意識に過負荷状態の魔力を外に放出しようとして、体から魔力を放出しているにすぎない。それはもう、儀式の最初でわかりました」

「儀式の最初で？ おじさん、そんな頃からすでにここへ？」

「ええ。魔力が綾乃の体内に入り始めたので、綾乃は無意識に魔力を上空へ向け、放出を始めました。一種の放出現象ですね。ところが、時が経つにつれ、魔力は強くなる一方。放電現象を行っている細い柱に魔力が走って、今やあの有様です」

「……ちょっと待ってください」

水瀬はそこで気づいた。

放出された魔力だけであれだけの現象が起きている。

綾乃ちゃんの体内には放出されている以上の魔力があるはずじゃ、魔力がたまりにたまっている綾乃ちゃんの体内は？

水瀬の顔が凍り付いた。

「そうです。気づきましたか？」

昭博の顔からも笑顔が消えた。

「今の、綾乃ちゃんの体内は……」

「綾乃の体内は、魔力を圧縮した——いわば臨界寸前の反応炉そのもの。つまり……魔力反応爆弾と化しています」

マジック・リアクター・ボンブ
魔力反応爆弾

別名「セルフギロチン」

通常反応弾（核爆弾）と共に、使用に際しては国際的非難を免れない代物。

使用⇨全世界への宣戦布告、自国を死刑にする代物という意味でついたあだ名が「セルフギロチン」。

それだけでどういう代物かわかるだろう。

放射能をまき散らす反応弾に近い爆発プロセスをとり、爆弾内部に圧縮して格納した魔力を一気に解放することで爆発させるといって、割とシンプルな代物だが……。

反応弾とでは破壊力と被害が比較にならない。

人類が使用したのは一度限り。
公式に配備したのは一国のみ。

イスラエルだけ。

1974年8月6日、イスラエル軍によるアンマンに向けての使用は、魔法技術界の恥部とされる出来事として記憶されている。

使用の結果……

アンマンの市民30万人に生存者はなく、都市は爆発の影響で魔力異常地帯化、草木一本も生えることがない死の世界へと変貌を遂げた。

豊かな都市を、生物が住めない死の世界へと変貌させる魔の兵器。

通常型反応弾では考えられないほどの殺傷力と周辺環境への影響は、国際世論をして人類にさらなる使用をためらわせるに十分すぎた。

1976年、国際法で配備どころか開発までが禁止されているのはそのためだ。

今、目の前には綾乃という名の“それ”が、爆発寸前の状態で存在する。

もし、それが爆発したとしたら——
半径数十キロは吹き飛び、一面が砂漠化してしまう程度では済まないだろう。

冗談ではない。

水瀬の背筋に冷たい汗が走った。

「じゃ、どうすれば」

恐怖に喉が渇く。

どうすればいいのか、考えが及ばない。

今、綾乃を殺してもしたら、それこそ――

「巫女は地の力を、足から吸い込みます」

昭博は言った。

「だから、綾乃を宙に浮かせて、地からの魔力の供給を絶てば」

「あっ！」

「そう。だから、遥香さんにもご協力をお願いしたのです」

遥香はその言葉に小さくほえんだ。

「お母さん？」

「なあに？」

「何か、策が？」

「ええ」

遥香はそう言って袂から何かを取り出した。

鏡だ。

「鏡？何に？」

「ルシフェちゃんから教わっておいたの」

「鏡魔法ですか？」

鏡魔法

鏡を使った空間魔術。

水瀬の戦友、ルシフェル・ナナリの得意技だった魔法だ。

……ルシフェルを怒らせた水瀬は、一体何度、空間に閉じこめられた挙げ句、爆殺されなかったろうか……

暗い過去を思い出した水瀬がげんなりする中、話だけは進んでいく。

「悠君。ここからはお母さんの指示に従いなさい。いいですね？」

「はっ、はい」

「よろしい。まず悠君は、綾乃ちゃんを抱きかかえて宙へ飛びな

さい。魔力は使わなくていいです。10メートル以上飛び跳ねなさい。そこをお母さんが鏡魔法を使用。空間ごとあなた達を封じます」

「え？でも、封じられた空間内部にも莫大な魔力が」

「中和現象でなんとかなるわっているとか、祈りなさい。綾乃ちゃんの体内にたまっている以上、それは綾乃ちゃんの魔力となるはずだから」

“はず”という単語を力説する母に不安そうな目を向けつつ、水瀬は訊ねた。

「失敗したら？」

「封鎖空間内で……大丈夫。ホネも残らないでしょうから」

「大丈夫って言うの？そういうの」

「近頃はそうよ？」

水瀬は綾乃を見た。

まるで眠っているような安らかな顔。

舞う躰。からだ

美しい危険物

それは、水瀬が密かに綾乃へと下した評価でしかなかったはず。

今、それは文字通り現実の存在として目の前にある。

でも、

必ず守る

そう、由里香おばさんにも約束した。

桜井さん達も学校で心配している。

この子を、

学校へ、

ステージへ

——あるべき場所へ

戻すんだ。

何より、これ以上グダグダ言っていたら、お母さんかおじさんのどっちかに殺される。

そう思った水瀬は、覚悟を決めた。

「じゃ——行きます」

水瀬は、地を蹴った。

水瀬の体の周りで強烈なスパークが発生し続けた。

莫大な魔力が柱のように天へ向かって走る中、水瀬が防御魔法を全開にして一気に魔力の突破を試みた結果だ。

近づくだけで魔力がそぎ取られ、それをさらに魔力を注ぎ込むことでカバーして進むが、消耗に補給が追いつかない有様だ。

ゴールである綾乃に取りつくまでに、水瀬は息が上がってしまった。

（僕の魔力をほとんどそぎ落とすなんて！）
信じられない。

驚愕の体の水瀬の手が、ついに綾乃を捉えた。

抱きしめた綾乃に反応はない。

ただ、絹の衣装越しに肉体の柔らかさが伝わってくるだけ。
一瞬、死んでいるんじゃないかと思った程だ。

「綾乃ちゃんっ！」

呼びかけにも答える様子はない。

「もうっ！」

水瀬は綾乃を抱きかかえ、そして跳ぼうとして――。

凍り付いた。

足が――

それに

見上げた空

放出された魔力がついに空間をねじ曲げ

「な、何？――あれ」

見開かれた水瀬の眼に映るのは

白く輝く物体

違う

それは、綾乃によく似た“少女”

水瀬は、その“少女”が何者かを知っていた。

だからこそ、信じられなかった。

召還——

それは魔力に乏しい人間が、別次元から助けとなる“存在”を呼ぶ魔法。

しかし——

水月の儀は、そんな生易しい物ではなかったのだ。

それを水瀬ははっきりと思い知った。

こんなの、巫女の7割が死んでも当たり前だ。

全員死ななければウソだ。

それでも3割が生き残って儀式を成功させている。

それは、人間には不可能な儀式。

だが、巫女が“人間以上”なら？

儀式は、巫女という媒体に、“人間以上”を降ろすために行われる。

降ろされる巫女が“人間以上”なら？

そう。

そうなんだ。

水瀬は呆然と空を見つめながら思った。

儀式？

恐らく伝えたのは、神族じゃない。

魔族だ。

魔族が、自らの力を人に利用させようとしていたに違いない。

何のため？

それはわからない。

理由はあったのかもしれないし、元からなかったのかもしれない。

ただ、魔族が絡んでいることは間違いない。

ほら。

その証拠に、

現に、降りてくるのは――

遥香が大声で何かを叫んでいるのにも水瀬は気づかない様子で、空だけを見ている。

この儀式の意味が、水瀬にはわかった。

神婚――

とんでもない。

魔族の分魂わけみたまと巫女の魂の融合。

分魂を巫女の魂と融合させることにより、巫女は人のまま魔族と一体化し、そして魔族の力を操る。

ここは、そのための場。

そのための儀式なんだ。

降ろすのは、ただの魔族ではないことから、かなりの厄介な儀式だということはわかる。

だってほら――

「遥香さんっ！」

昭博が遥香に怒鳴った。

「あ、あれは一体！」

「儀式が成功しかけているんです。――もう、分魂が召還されてしまっています」

遥香も呆然という顔で空を見つめていた。

「分魂？あの少女のことですか！？」

「そうです」

遥香は昭博の顔を見ることさえしない。
ただ、空を、“少女”だけを見ていた。

長い赤い髪

気品のある顔立ち

まるで眠っているように閉じられた瞳
両膝を抱えた少女――

それは――

「誰なんです？人間じゃないですよ？魔族——それとも神族ですか？」

「魔族です」

遥香は答えた。

「魔界女帝グロリア陛下が嫡女……次期皇位継承権第一位、レクシア辺境伯、ティアナ・ロイズール・トランシヴェール……ろ、ロイズール様……まさか……魔界はあのプログラムをロイズール様で」

「？」

遥香は、昭博なんていないといわんばかりの体で自問するように呟いた。

「ありえない。あつてはならない。……な、内通者がいたというの？あのプログラムは……だって……神族でもごく一部しか……そうよ。これは重大な」

「遥香さんっ！」

耳元で怒鳴られてようやく遥香は現実に戻された。

もうすぐ、綾乃と“ロイズール”と呼ばれた少女が融合してしまう。

「悠君っ！何をぼけっとしているの！跳びなさいっ！」

遥香の怒鳴り声がようやく耳に届いたのか、水瀬は我に返ったように遥香を見た。

そして、水瀬は恐るべきことを遥香に叫んだ。

「ダメですっ！」

「!？」

「地の力が綾乃ちゃんを放そうとしないんですっ！僕の足まで媒体にしてっ！お母さんっ！僕の足は無視していいから、結界を展開

してっ！」

「悠君っ！」

「すぐに再生するからっ！」

両足切断

それが、綾乃を助けるために自分の息子が差し出す代償。

それでも綾乃を助けようという息子の願いを、無にすることは出来ない。

「——痛いけど、ガマンなさいっ！」

遥香がためらいつつも決断したその刹那。

バルンッ！

突然、エンジン音が響き渡った。

見ると、大型バイクにまたがる昭博の姿があった。

「大丈夫です！」

昭博は叫んだ。

「大学時代、免許はとっていますから！」

「そうじゃなくて！昭博さんっ！？それで何を！？」

「忘れていたんですっ！地から力を引き出すために必要なのは、祭壇ですっ！——祭壇を破壊すれば儀式は！」

「試してもいないのにっ！昭博さんっ！？」

血相を変える遥香。

だが——

昭博は笑っていた。

穏やかに、
ただ、笑っていた。

昭博は叫んだ。

「僕だって父親です！父親として、出来ることがあるなら、僕だってやるまでですっ！」

そう言い残した昭博は、

アクセルを全開にして、

祭壇へと飛び込んでいった。

「昭博さんっ！」

バイクが祭壇をなぎ倒し、昭博が魔力にはじき飛ばされた瞬間――

世界が、白く染まった。

第二十一話 「降臨」(後書き)

遅くなってすみませんっ！(ひーっ！)

何とか話をここまで持ってきました。

次は何とか、倉橋姉妹ケンカ……もとい、姉妹対決を書きたいです。
書けるかなあ……いろいろちょっと不安ですけど、頑張ります。

第二十二話 「囚人」

祭壇に近い森の中で、由里香達は一塊りになっていた。

「大佐、どのように？」

「悠理に結界を張らせてある」

「結界？」

「ああ。結界内に催眠呪文スリープをかけて、連中を全て眠らせて」

「結界って、こういうのですか？」

由里香は手にした木札を由忠に見せた。

「ああ。それだそれ——」 由忠が凍り付いた。

「由里香？ それ、どこにあった？」

「ここです。この藪の中」

「……大佐」

「……由里香、それを戻せ」

二人のげんなりした様子に、

「え？」 由里香は驚いたように声を上げた。

「結界が壊れたんですか？ 何故です？」

「そりやお前」

「こんな木の札がなんですか？」

由里香は手の中で木札を遊び、

ペキッ

「あらやだ。折れちゃいました」

「由里香」 由忠は由里香の腕を掴んでまっすぐに顔を見つめた。

「きゃ？ よ、由忠さん？ 私は人妻ですよ？」

「返答次第では、お前を有里香に突きだして俺達は帰るぞ？——

—お前、そのボケ、わざとやっているのか？」

「ボケって……何を、ですか？」

「その……結界を感知したり破壊したり」

「ま、まさか」

由里香はホホホッとわざとらしい笑い声を上げる。その目は絶対に由忠を見ようとはしない。

「――まあ、いい」

由忠は由里香から手を放すと、刀に手をかけた。

「いずれにせよ、俺達が本家を狙っていることは知れている。イーリス、由里香の護衛につけ。オレが前面に出てあいつ等を引きつける。その間に有里香を殺れ」

「了解」

「――はい」

由里香は心細げに短刀を鞘から抜いた。

これで私は――

由里香は自分に問いかけた。

これで、妹を手にかけることが出来るのか？
いや。

心が否定する。

出来るかどうかではない。

やるんだ。

倉橋家のためではない。

娘のために……。

脳裏に娘の姿が浮かび上がる。

腹を痛めて産んだあの子のためにも、私はやらなければならない。
それが、偽りでも、覚悟は決まなくてはならない。

由里香は黙って短刀を鞘に戻した。

「由里香殿」

気がつくのと、いつの間にかイーリスが自分の前に移動していた。
イーリスは、まっすぐ祭壇を見つめながら、

「私が前に出ます。防御結界は展開出来ますか？」

「はい。大丈夫です」

「わかりました。その手を汚すことは考えず、妹君の説得のみに心を砕いてください」

「イーリスさん、でも、私は」

「血族を殺した血まみれの手で、綾乃殿を抱けますか？」

「！！」

「血にまみれるのはあなたの仕事ではありません——我々、騎士の役目。どうぞ、そのように」

「……ありがとうございます」

こぼれそうになる涙を抑えながら、由里香はイーリスに頭を下げた。

「よし。いくぞ」

「はっ」

「はい。御武運を」

由里香達のいる場所から離れた位置。

祭壇をA点、由里香達がB点とした場合、A点を頂点とする二等辺三角形が形成される場所（C点）に由忠は立った。

抜き身の日本刀を下げた男が現れたのだから、周囲が騒ぎにならないわけがない。

「きゃああああっ！」

偶然、通りかかった巫女が悲鳴を上げ、警備に就く忍達が動く。

それが、戦いの始まりだった。

「由里香殿！」

「はいっ！」

忍達が一斉に動き、周囲の感心が由忠へ集まったのを確認したイーリスに促され、由里香は祭壇へ向け、一気に走った。

警備の忍達が四方から襲い来る。

「陣っ！」

「ぎゃっ！」

由里香の圧縮魔法で形成された不可視の防御魔法が忍達をはじき飛ばす。

「来ないでください！」由里香は叫びながら走った。

「痛いですよ！？寝込んでいますよ！？」

「じゃ、こっちに來い！」イーリスが叫ぶ。

「寝込むことなく地獄に送り込んでやる！」

イーリスは立ちふさがった忍二人に魔法の矢をたたき込むと、両脇から同時に襲いかかる忍二人と刃を合わせた。

「――ハッ！」

右から来た忍の懷に飛び込み、その腹にナイフを突き立て、ほぼ同時に地面を蹴る。

「セイツ！」

左から来た忍の延髄を蹴り飛ばした。二人の忍達は声もなく地面に崩れ落ちる。

「由里香殿！」

「大丈夫です！ただ、手向かわない者達には！」

「わかっていますが――グハッ！？」

突然、祭壇方面から放たれた莫大なまでの攻撃魔法がイーリスを襲った。

イーリスがとっさに展開した5重の防御魔法の4枚までを突き破って爆発した攻撃に、イーリスははじき飛ばされた。

「イーリスさん！」

「――よくぞ我が攻撃を防いだものだ」

一瞬、背筋が凍り付いた気がした。

身の毛がよだつような声というのが、現実には存在すると、由里香は初めて知った。

幕屋の中から出てきたのは、巫女。

「その者、大した者だ」

「あ……あなた」

巫女装束に身を固めているが、さすがにわかる。

17年の歳月は、隔たりとはならない。

亜里砂が自分を見て母親だと思っても無理はない。

まるで、目の前に自分が立っているような錯覚すら由里香に覚えさせるその姿。

巫女はクッククツと嘲るような笑い声を上げ、言った。

「一族の恥部が、何を今更おめおめと」

「あ、有里香？」

「……今の私にそんな名はない」

巫女——有里香は大仰な態度で言い放った。

「我は倉橋家当主、倉橋の巫女じゃ」

「な、何を言っているの？お母様が認めたことなの！？」

「継承にしくじった愚か者が何を言うか」

「……くっ。有里香、せめて、せめてお母様に！」

「あれに会いたいのか？」

「あ、あなた……親をあれだなんて」

「会いたければ死ぬがよい」

有里香は眉一つ動かさずにそう答えた。

「!？」

意味が、わからない。

「有里香？それは——どういう？」

主人の前とあって、忍達は由里香とイーリスを遠巻きに取り囲むだけで手は出してこない。

「意味がわからないのか？愚かな」

「ま、まさか——あなた」

意味がわからないわけではない。

わかりたくないのだ。

「古き者なぞいるだけ邪魔じゃ。邪魔なれば消す。——何がおかしい？」

「ち、血を分けた親を……あなた、そんな、そんなことを……！」

「半殺しにして祭壇に埋めてやったわ。直接に殺したわけではない。息の出来ぬ苦悶がヤツを殺してくれたのよ」

ア—ッハッハッハッ！！

耐えきれない。そんな顔で有里香が高らかに笑った。

そんな……。

由里香は呆然としてその言葉を聞いた。

自分を産み、育ててくれた親が、

厳しかったが、それでも愛した親が、

冷たい土の下で苦しみながら死んだ。

暗闇の中で苦しみ、息絶える母の姿は、由里香に妹への憎悪を駆り立てるのに十分だった。

「有里香あ！」

由里香は短刀を抜き放ち、有里香へ向けて走った。

「愚か者め！」

有里香の手が動き、そこから放たれた光が一直線に由里香を襲う。

「陣っ！」

有里香の攻撃を力任せの魔法で防ぐ由里香の足は止まらない。

「くっ！」

有里香も袂の懐刀を抜きはち、攻撃に備える。

「水龍！」

「光武！」

倉橋の巫女同士の、血を分けた姉妹の、愛し合うべき者同士の、憎しみに満ちた一撃同士は、空中で激しくぶつかり合い、

「きゃっ！」

「ぐっ！」

その余波で二人をはじき飛ばした。

「空！」

「空！」

共に空中浮揚魔法で地面への落下を避けた二人は、牽制の魔法攻撃をかけつつ、再度間合いを詰めた。

有里香の懐刀が由里香の喉元を狙い、由里香の短刀が四肢の腱を狙う。

力押しで由里香を突き飛ばした有里香が魔法を放ち、防御魔法で由里香が迎え撃つ。

その隙に由里香は袖に仕込んだ棒手裏剣を有里香めがけて投げ放った。

「小癪な！」

懐刀で手裏剣を打ち落とした有里香だが、

「ぐっ!？」

その一撃に込められた小細工までは思いつくことが出来なかった。手裏剣は有里香に打ち落とされた途端、爆発したのだ。手元で突然発生した爆発に、思わず有里香は袂で顔を覆ってしまふ。

そして――

「これはお母様直伝の仕掛け! 知らぬならあなたはお母様の子ではない!」

「何だと!？」

ガンッ!

爆発の閃光を隠れ蓑に、一気に間合いを詰めた由里香は、有里香の頬を短刀の柄を掴んだ拳でしたたかに殴りつけた。

――いい加減にしろ。

それが、由忠の正直な感想だった。

すでに20はくだらない忍を行動不能にしていた。

足下には由忠によって倒された忍達が折り重なって倒れていた。

にもかかわらず、忍達の包囲は崩れることがない。

動揺する様子すら見受けられない。

忍達の戦意が揺らぐことは、ない。

「お前等、そんなに死に急いでどうする」

返事を期待したわけではない。

「あのくの一といい、どうにも頭が固いなお前等は」

「……我らは主君の命めいこそがすべて」

不意に包囲の中からそんな声がした。

50の坂は越えているだろう、苦み走った声。

「主君が殺せと命じれば殺す。死ねと命じれば死ぬ」

「……まあ、忍はそういうものだな」

わかりはするが、それでも由忠は割り切れない。

「お前等に聞きたいことがある」

「地獄で聞いてやる」

その言葉が合図となったかのように、由忠を包囲する一氣に襲いかかって来た。

「ドアホ」

「!」

「ぎゃっ!？」

人間が宙を跳び、そして一斉に宙にはじき返されるその光景は、まさに盛大な人間花火だった。

人間がバラバラと地面に落下していく中で、由忠は不機嫌そうに「俺は妻帯者だ。夫にとって地獄とは夫婦生活そのものだ。もう地獄にいるんだから、ここで聞く権利がある!」

「……痛々しいことだ」

あれだけいた忍で立っている者はただ一人のみ。

「未熟な者共だ」

忍は、ポツリと呟くように言った。

「相手が魔法騎士ならば、こうなることはわかりきっておろうに」
「それでも攻撃させたのはお前だろうが」

「命を^{めい}確実に果たすため、どうすれば良いかは、己自身で考え、決めることじゃ。忍が数に頼るとは何事じゃ」

「そりゃごもつとも」

「……それで？不甲斐ない夫殿は、何が知りたいのじゃ？」

「……いちいちひかかる物言いだが、まあ、いい。由里香のことだ」

「どうした？」

「由里香の儀式、しくじらせたのは、お前達ではないのか？」

「……」

「……」

「……だとしたら、どうだと？」

「閻魔に喋る前に俺に話しておけ。俺がこの世の閻魔だ」

「ふん……我らは命じられたのじゃ。儀式を粉碎し、由里香殿を殺せと」

「誰に」

「倉橋の先の先の当主の息子、倉橋栄一殿じゃ」

「倉橋の跡取りになろうと画策し、お前等を動かしたというのか？」

「ああ。我らはその頃、一族会議の結果、先代の静夜様から離れ、栄一様の御配下となった。中立とされ、それを誓った栄一殿に、一族は我らを預けたのじゃ」

「それほど、お前等は倉橋の血を吸った」

「代々、我らは倉橋の閻じゃ」忍は自嘲気味に笑った。

「命があれば、傳くべき当主すら殺す——それ故、我らは命こそが全てと思わねばならんのじゃ」

「倉橋栄一が一族を裏切り、お前等忍を動かし、そして由里香の儀式に」

「じゃが、忍になりきれん愚か者が全てをしくじらせてくれた」

「？」

「土壇場で由里香殿を守るべく我らに刃を向け、命を落とした愚か者がな」

「寝返りで事がしくじることはあることだ」

「そう……それが我が弟でもな」

「……」

「弟は、由里香殿を愛しておった。身分違いの結ばれぬ仲ではあったが、それでも弟は由里香殿への思慕を捨てきれなかった。儀式で動けぬ由里香殿の楯となって死んだ」

「由里香が血の汚れを浴びたというのは」

「そう。弟の血じゃ」

「由里香は、随分モテたようだな」

「ああ」クッククツと忍の口から笑い声が上がった。

「倉橋にお仕えする若い者で由里香殿へ思いを寄せぬ者などおらんかったわ。かの栄一殿ですら、当主の地位というより、結ばれることのない由里香殿への思慕の末の破れかぶれの行動じゃったわ。最後は、我らに殺されたがな」

「お前、あれだろうか？」

「ん？」

「忍軍は、次期頭領たる瀬戸昭博を由里香の夫として送り込み、由里香の護衛にあてた。すなわち、忍軍としての務めを昭博に託したのだろうか？先代当主のみの差し金ではあるまい？」

「……そうじゃ。我らが求めたのじゃ。無論、若が由里香殿を愛しておられるかどうか、正直、疑わしかったが、ここまで夫婦を貫かれたのじゃ。若がご健在なうちは、我ら忍はお役目を果たしてやることになるわ！」

「つくづく、苦勞する連中だな。お前等も」

「何。お主とて同じじやろうが……さて、閻魔への口上は終わリじゃ。長々とすまんの」

「なんの」

忍は刀を抜いた。

「では、水瀬家当主、皇室隠密衆御頭、水瀬由忠殿」

「……やるか？」

「倉橋忍軍頭領“黒” こと瀬戸昭信……参る！！」

第二十二話 「囚人」 (後書き)

本当に遅れてごめんなさい！

年末になんとかする宣言しておいて…… (T | T)

さて、次回は数年越しの懸案事項、由里香・綾乃母子のそれぞれの決着が……つくかなあ。ううん！膨大なページ数になってもつけます！

いつになるか？それは不明ですけど……。

第二十三話 「懺悔」 (前書き)

ちよつと今回は、根本的な設定大公開になります。
大後悔しないように今のうちにお覚悟を……。

第二十三話 「懺悔」

拳に伝わるその鈍い感触に、由里香は泣きそうになった。

その感触こそ、この世に残された唯一の肉親の感触。

血を分けた妹の、感触。

何十年ぶりに触れる、肉親の肌なのだ。

「ぐっ……!!」

有里香は、憎悪の炎を瞳に燃え上がらせたまま、由里香を睨み付けた。

「この程度で！」

「!!」

有里香の手が胸ぐらを掴もうと動く。

バンッ

由里香の手がそれをうち払い、鳩尾へ拳をたたき込む。

「ぐはっ!!」

有里香の体がくの字に曲がり、そのまま崩れ落ちた。

「ここまでです」

由里香は、妹に短刀の切っ先を突きつけた。

「有里香……冥途でお母様に謝ってきなさい」

姉の一言を、妹は鼻で笑った。

「……妹を、殺す気か？出来るのか？」

「言ったでしょう？」

ブンッ

由里香の手が一閃した。

ただ、それだけで、

「!!」

凄まじい剣圧が、有里香の真横を走った。

由里香が本気だということを、有里香自身が認めざるを得ない。

「くっ!!」

有里香が魔法で応戦しようとして、
ガンッ!!

由里香のつま先が、有里香の顎を捕らえた。

「誰が喋らせるものですか」

由里香は、冷たい声で有里香に言い切った。

有里香の、いや、倉橋家の魔法は圧縮魔法。

言葉が喋れなければ、魔法を発動させることが出来ない。

詠唱より先に口を押さえれば、倉橋の巫女は無力なのだ。

それは、倉橋の巫女である由里香自身が分かり切ったことだ。

「いいですか？口を開かないで。——なぶり殺しにしたいくなるから」

「ぐっ……ぐはっ！」

顎を押さえ、のたうち回り、血と泥で汚れてゆく有里香を、由里香は黙って見つめていた。

そして——。

「さあ。——終わりにしましょう。倉橋の歴史を」

由里香は、妹の頸動脈を斬るために、有里香の肩に手を回そうとして、

「だめっ！」

突然の乱入者に突き飛ばされた。

それは、

「亜里砂ちゃん？」

そう。

亜里砂だった。

祭壇から走って来たのだろう。

息を切らせ、恐怖におののきながらも、それでもなお、亜里砂は母を守ろうというのだ。

亜里砂は、母をかばい、両手を広げた格好で、由里香の前に立ち塞がった。

「どきなさい。亜里砂ちゃん」

由里香は亜里砂がどくのを待った。

あくまで問題は、有里香だけ。

その娘まで、手にかけるつもりはない。

「いやっ!」

亜里砂は由里香の言葉を拒絶し、そして震える声で怒鳴った。

「私のお母さんよ? 何で? お母さんを何で殺そうとするの!？」

「亜里砂ちゃん」

「何で!？ お母さんを、何で殺そうというの!？」

「どきなさいっ!！」

「いやっ!」

亜里砂は叫んだ。

「逃げて! お母さん、逃げてえっ!！」

由里香は、亜里砂の気持ちに痛いほどわかった。

自分が、亜里砂の立場だったら?

由里香は、間違いなく、亜里砂と同じ事を、ためらいもなくやっ
たろう。

亜里砂は、娘として、当然のことをしているだけなのだ。

だが、有里香を逃がせば、由里香は娘を失うことになる。
それだけは、絶対に避けねばならない。

由里香は、亜里砂をどうしても、有里香の前から排除しなければ
ならないのだ。

グイッ

亜里砂に迫る手。

亜里砂を、突き飛ばそうとする手。

しかしそれは、由里香の手ではなかった。

「……………えっ？」

きよんとする亜里砂。

亜里砂に触れた手は、亜里砂の背後から走り、

「きゃっ!？」

亜里砂を力任せに突き飛ばした。

「お、お母さん!？」

信じられなかった。

突き飛ばしたのは、母の手。

守ろうとした、母の手だった。

「そんな……………お母さん？」

有里香は、娘を突き飛ばし、そして立ち上がった。

「亜里砂……………」

口から血を滴らせ、憎悪の視線でまっすぐに娘を射抜く。

「お母さん！大丈夫！？」

亜里砂はすぐに立ち上がると、母にすがりついた。

母が、自分を突き飛ばしたのは、何かの事故だと、そう信じたから。

「お母さん——っ！！」

鈍い衝撃が、亜里砂の腹部に走った。

「有里香！」

「黙ってみておれっ！！」

地面に崩れ落ちた亜里砂の上に、母が馬乗りになった。

「とことん妾の邪魔をしおってからに！」

「おかあ……さん……」

弱々しく、亜里砂の手が、母の装束を掴む。

「どうして……？ どうして？」

「貴様が邪魔だからだっ！ この儀式のためだけに、お前をこの女に生ませたのだ！」

「お母……さん」

「もう用済みにしてやる！ あと一人くらいは産めるわ！」
ギリリ

月明かりを受け、有里香の掴む短刀が鈍い光を放つ。

「死ねえっ！」

「亜里砂ちゃんっ！」

由里香は、亜里砂の上に覆い被さった。

もう、死んでもいい。

これ以上、亜里砂ちゃんに迷惑はかけられない。
いいえ。

これで、亜里砂ちゃんを、綾乃の、娘の代償として苦しめ続けたことの償いが出来るなら、私はそれでいい。

あとは、昭博さんに委ねよう。

きっと、あの人なら綾乃を守ってくれる。
だから――

亜里砂のぬくもりが服越しに伝わってくる。

由里香はふと、綾乃を初めて抱きしめた時のことを思い出し、最後の時を待った。

「……」

しかし――

「ぐう……」

鈍いうめき声がして、何かが自分の上に覆い被さった。

「？」

頬に感じたのは、髪感触。

「――有里香？」

力を込めて起きあがり、そして由里香を見た。

「……」

装束の胸を紅く染め上げ、倒れ崩れているのは――

「有里香……？」

信じられなかった。

そこに倒れていたのは、有里香だった。

胸に短刀を根本まで突き刺し、倒れていた。

「あ……り……か……」

力無く、由里香は近づき、そして叫んだ。

「有里香 ああっ!!」

バウンッッ

昭博のバイクは、祭壇を構成する呪具をなぎ倒し、そして炎上した。

「昭博さんっ——っ!!」

遥香は、悠理達を見て、そして確信した。

呪具がなぎ倒された瞬間、

地下から供給される魔力が一瞬にして停止したのだ。

しかし、すでに少女は、綾乃の体に接触を開始していた。

「悠君っ!」

「いけますっ!!」

悠理はそう叫んで、悠理は綾乃を抱きかかえたまま、後方へ大きく飛んだ。

「上手く行ってね?」

遥香が祈りながら、息子めがけて鏡を放つ。

水瀬に追いついた鏡が水瀬の四方を固めた途端――

キンッ

金属を叩いたような音がして、悠理と綾乃は、この次元から隔絶された。

「……」

これで成功するか？

それは遥香にもわからない。

ただ、その場に止まったままの少女が、どう動くか。

結果はそれ次第なのだ。

「……あっ！」

少女は、段々と上空へと戻ってゆく。

それは、召還が失敗したことの証。

少女が、元の世界へと戻ってゆく証。

「成功……ですね」

遥香はただ黙って、暗闇へと消えゆく少女を見送った。

やがて――

少女の姿が消え、渦が、消えた。

「終わったようだな」

数合、黒と斬り結んだ由忠は、渦が消え、周囲の魔力が正常値に戻ったことを肌で感じとり、声に出して言った。

「……ああ」

黒も剣を下げた。

黒が見た光景。

それは、倒れ伏す有里香の姿。

「終わったわ」

黒は、刀を放り投げると、その場にどかりと座った。

「倉橋家も終わりじゃ」

「……」

「―――斬れ」

「無益だよ」

由忠は、そう言って剣を鞘に納めた。

数日後のことだ。

綾乃が目覚まさないで、由里香は有里香の病室へと向かった。

コンコン

「失礼します——あら」

ベッドの横。

椅子の上でじっとベッドを見つめているのは、亜里砂だった。

「亜里砂ちゃん。少し休みなさい？」

亜里砂は、無言で首を横に振った。

「大丈夫よ」

ぽんっ。そんな感じで、由里香は優しく亜里砂の頭を撫でた。

「お医者様もおっしゃっていたでしょう？ 一命は取り留めたって」

「……うん」

有里香の短刀は、心臓をわずか数ミリ外した所に突き刺さっていた。

誰が突き刺したわけではない。

有里香自身が、自ら突き刺したのだ。

「お母さん、すぐによくなるから」

「……うん」

「お母さん、心が疲れていたのよ。だから、ぐっすり眠れば、そのうち、ね？」

そうだ。

由里香にはわかっている。

外傷によるものではない。

今、有里香が眠り続けている理由。

それは——

「由里香殿」

ノックの後、病室へ入ってきたのは、イーリスだった。

「イーリスさん」

「……静の件なのですが」

「どうしました？」

「……やはり、逃げられました」

「そうですか……」

「申し訳有りません。私が、あのタイミングで攻撃をしくじったばかりに」

「いえ」

由里香は笑って答えた。

「有里香が、憑依体が損なわれたと思い、慌てて逃げ出したのです。イーリスさんはよくやってくれました」

「恐縮です……して、有里香殿は？」

「そろそろ、目が覚める頃かと」

「——あっ！」

突然、亜里砂が声を上げた。

「お母さん！」

その声が聞こえたのだろうか。

有里香は、弱々しくあたりを見回し、娘を見つけた。

「あり……さ……？」

「うんっ！お母さん！」

「そう……ありさ、無事、だったのね？」

「うんっ！」

「イーリスさん、すみませんがここを頼みます。私、お医者様を」
「心得ました」

有里香の声を聞いた由里香が病室を飛び出していった。

一方、

「ああ……来ていただいたのですか？」

別の病室で、ベッドに横たわるのは昭博だった。

どうやらバイクで転倒した際、足を痛めたらしく、しばらく入院が必要だと診断されている。

「いえ……それで、折り入ってお話とは？」

そう言って椅子に腰を下ろしたのは、遥香だ。

「その前に、綾乃は？」

「悠理と一緒に、魔力の調整中です」

「そうですか」

ふうっ。昭博の口から安堵のため息が漏れた。

「お話の内容は、綾乃ちゃんについて、それでよろしいですか？」

「はい」

「……聞いて、どうなさるのです？」

「父親の権利を、ここで口にはしません」

昭博は言った。

「ただ、個人の知的好奇心を満たしたいだけ……それではダメですか？」

「……」

じっ。と昭博を見つめた遥香は、呆れたという口調で答えた。

「本当に、ウチのじゃないですけど、どうして殿方は、こうなんでしょうね」

「ははっ」

「……わかりました。ただ、他言無用ということ」

「誓いましょう」

「何からうかがいたいのですか？」

「まず」

昭博はまっすぐに遥香を見つめながら言った。

「あの少女についてです」

「……」

「あの少女は、何者ですか？」

「……」

昭博の目に失望が走った。

遥香が、答えないと思ったからだ。

無理はない。

それはわかる。

だが、それでも話してもらわなければ何もわかりはしないのだ。

「……魔族です」

遥香は答えた。

「単なる、魔族ですか？」

「これから先は、あなたには酷でしょう。もし、この先の話が知りたければ、お話はしますが、聞いた後で、あなたの記憶をいじらせていただきます」

「今、この瞬間、答えを聞いても、それを未来に持ち続けることは認めない。そう、おっしゃるのですか？」

「これは優しさです」

遥香は諭すように言った。

「あなたは、いえ。ニンゲンには耐えられないでしょう。私だって、真実是由忠さんにも告げてはいません」

「……わかりました。それでもなお、僕は答えを求めます」

「わかりました。覚悟は出来ているのですね？」

「……はい」

「あの少女……そう呼ぶには、あまりに高貴なお方です」

それを証明するように、遥香は居住まいを正して、その名を告げた。

「魔界女帝グロリア陛下が嫡女。次期皇位継承権第一位、レクシア边境伯、ティアナ・ロイズール・トランシヴェール殿下。その人です」

「……魔界の、お姫様？」

「それが、綾乃ちゃんの本当の姿……そう言っても、何の問題も

ないはずです」

「……それが、綾乃に分魂を与えた身」

「そうです。綾乃ちゃんの魂は、魔族のそれです。いえ……魔族以上の存在の、ですね」

「魔族……以上？」

「神族、そして魔族、共に敵はいます。来るべき戦いに備え、その敵に渡り合うために作られし兵器……それが」

「……綾乃であり、悠理君である」

「……そうです」

「その……ティアナで、よろしいですか？」

「ロイズール、でお願いします。魔界・天界共にミドルネームが公称ですから」

「わかりました。そのロイズール……様」

遥香は無言で頷いた。

「ロイズール様は、今回、水月の儀において、綾乃と魂を分け合った存在だからこそ、召還されたと？」

「ええ。ただ」

「ただ？」

「……はあ。本当に、これ以上のことを、聞いてもよろしいのですか？」

「無論です」

「……私もいきさつは知りません。これ以上はほとんど推測です」
「それでも、あなたは僕なんかより圧倒的に真実に近い」

「……綾乃ちゃんの誕生は、いわば由里香さんが、ロイズール様にとっても母体いふべき身であったからこそ、なし得た技だと、そう思います」

「……？」

「つまり、由里香さんもまた、魔族……しかも」

「……まさか」

「そう。そのまさかです」

遥香は頷いて言った。

「由里香さんもまた、ロイズール様の母、つまり、魔帝グロリア陛下の分魂を持つ身なのです。母の分魂を持つ身から生まれた娘が、その娘故に分魂を呼び寄せた」

「そんなバカな！」

あまりといえはあまりの言葉に、昭博は思わずベッドから飛び起きた。

「そうとしか考えられないですよ」

昭博が見た遥香の顔は、困惑しきっていた。

「横になって下さいな……それで、私が思うに……問題は、由里香さんの母、静夜様、もしくはそのご先祖様にあります」

「お母様に？」

「ええ。亡くなった方の名誉に傷を付けたくないのですが……もし、静夜様が、魔族と交わって子をなし、そしてそれが」

「由里香だと？」

「由忠さんも同じです。由忠さんは母が魔族ですけど」

「……」

「でも、それだと」

「あくまで確率論です」

そう。

それだと、静夜と交わったのは、魔族の王族。しかも、グロリアの父に他ならない。

「本当に、あり得ない話なのです。でも、どこか数代前で魔族の帝室の血が倉橋の巫女の一族へ入り、それ故に、綾乃ちゃんが生まれた……そうになると、少なくとも私はそう、考えています」

「倉橋の血は、魔族の血……そういうことですか？」

「人間界には、多いのです」

遥香は言った。

「元々、騎士と呼ばれる者達は、その体に宿るそうした血が出たようなものです」

「では……僕も」

「魔族、あるいは神族か」

「人は、そうやって生まれたのですね？」

「そうです」

「それで……」

昭博は一瞬、言葉を詰まらせた後、言った。

「綾乃は、どうなるのですか？」

「魂が一瞬でも融合してしまったのです」

遥香は、申し訳なさそうな顔で昭博に告げた。

「人としての魂は、いずれ、近いうちに崩壊するでしょう」

「ほう……かい？」

「魂を形作るマナが、次元を越えてより強い本体、ロイズール様のそれへと……分魂が、本当の魂へと戻るのです。本来なら、分魂を持つ肉体の死をもつてなし得る融合が、徐々に、静に——綾乃ちゃんの中で」

「後、何年位ですか？」

「このままでしたら、恐らく10年」

「……」

「天界に正式に報告をあげました」

遥香は言った。

「綾乃ちゃん存在は、天界にとっても貴重な……そのしまった。という顔で遥香は黙ってしまった。

「貴重な……サンプル……」

「申し訳有りません」

「いえ」

昭博は笑った。

「僕も学者ですから」

「昭博さん……」

「残酷な親ですねえ。娘をサンプルとは……これでは綾乃が可哀想だ」

「とにかく、時間をかけて綾乃ちゃんを……」

「かまいませんよ？言葉を濁すだけ無駄です」

「……綾乃ちゃんというサンプルを生かして検証したい。それが、天界、恐らく、魔界も同じだと思います」

「それだけに、長生き出来る可能性はある……と？」

「そうです。あらゆる検証がなされ、延命処置が」

「まるでモルモットみたいだ」

「……申し訳有りません」

「遥香さんが謝る必要はないでしょう」

穏和な顔こそしているが、昭博の語気は荒さを隠していた。

「父親として、何もしてやれないのが、悔しいだけです」

「……」

「ただ」

「ただ？」

「一つだけ、教えてください」

「何です？」

「悠理君のことです」

「……ええ」

「悠理君は、魂の召還を？」

「いいえ」

「？」

「悠理は、私の中に埋め込まれた情報体に、由忠さんの人としての遺伝子、より正しくは、魔族とも融合可能なヒトの遺伝子を埋め込み、そして私の胎内で培養した存在……そう言えば全ての存在です」

「……情報体？」

「これには、お答えできません。詳細は、私の記憶の中でもロツクがかかっています。私の任意で引き出すことが出来ないのです」

「……つまり、悠理君は、綾乃よりは厄介……失礼。なんというか」

「いえ」

遥香は笑って答えた。

「その通りの存在です。ただし」

「ただし？」

「綾乃ちゃんもまた、同じような存在です」

「……綾乃をサンプルとして検証したい本当の狙いは、綾乃が兵器だからですか？」

「……その通りです。悠理は、神族の遺伝子情報と技術で生まれ、そして綾乃ちゃんはその正反対。なればこそです」

「……唯一希望が、今、悠理君の誕生のいきさつで崩れました」
「えっ？」

遥香は、昭博の言葉の意味がわからなかった。

「それは、どういう？」

「僕が、遥香さんと呼んだのは、懺悔したかったからなんです」
「懺悔？」

「ええ。ヒトからみれば、神族であるあなたは神様だ」

「いえ。正確には」

「今は、そう思わせてください」

そう答える昭博の顔には、何か辛いものが浮かんでいた。

それは、長年、昭博が隠し持っていた何かだ。

それを、昭博は明らかにしようとしている。

「わかりました。神としてお伺いしましょう」

「ありがとうございます」

昭博は、大きく息を吸い込んで、

「由里香さんは、僕と初めて結ばれたのは、綾乃が7ヶ月に入っ
たあの晩だと、そう信じています」

「……」

「でも、違うのです」

「……昭博さん？まさか」

「そうです」

昭博は、まっすぐ遥香を見つめて言った。

迷いのない、はっきりとした言葉で。

己の胸の内に隠し続けてきた、罪を。

「儀式の晩、僕は由里香さんを犯しました」

第二十三話 「懺悔」 (後書き)

悠理&綾乃の設定は、もっと後になってから公表すべきだったかもしれない。

書いてしまった後で激しく後悔しています (<|>)
いいのかなあ。

本当に迷うべきですね。

こういう大暴露って。

これが原因で、いつかこの作品は設定ごと消されるかもしれません。
最初からなかったことにするために……それじゃマズイか。

次回で終わりにしたいですね。

第二十四話 「終幕」

「儀式の晩……僕は由里香さんを犯したんです」

その言葉の意味を探るように、遥香は黙って昭博の顔を見つめるだけ。

答えはしない。

「儀式の最後。夫となる者との娶^{めあわ}せの儀式……儀式というには、あまりに生々し過ぎますね」

と、昭博は自嘲気味に口元をゆがめた。

「一晚、由里香を自由にしていい。まだ僕も若かったですからね。そう、お義母さんからそのかされて、ついつい、その気になったのです。好きにしている。そういれてついフラフラと隣室で寝ている由里香さんの布団の中へ」

「……本当に、そうですか？」

遥香は初めて、口を開いた。

「本当に、己の欲望を満たしたいだけ。それで由里香さんを抱くことに同意されたのですか？」

「……」

「……」

「……厳しいなあ。さすが神様だ」

昭博は耐えかねたように声を上げて笑った。

「ハハッ。……そうですね。よくわかったものです」

笑い終えた後の昭博の目には、普段の穏和さをかけらもない。それは冷たい光だけが宿る——獣の目だった。

沈黙する遥香に、昭博は続けた。

「僕は、由里香さんを殺すつもりだったんです」

「やっぱり」

「でも、なぜわかったのです？」

「そうでねえ……」

遥香はちよっとだけ迷った後に答えた。

「私も昭博さんの立場なら、同じ事したと思うからです——答えになってませんか？」

「成る程」

「やむを得ない、望んだわけでもない。言い訳はいくらでも出来ます。でも、倉橋家の内部分裂を招き、多数を死に至らしめたのは、たしかに由里香さんですからね。その中で最大の犠牲を支払わされた忍軍にいたあなたですもの」

（よくご存じだ）

昭博は内心で舌を巻いた。

隠し立てして通る相手ではない。

由忠先輩が浮気に失敗するのも無理はない。

だから、昭博はありのまま答えた。

「そうです。僕は、そうとしか由里香さんを見ることが出来なかったんです」

「一服もらいましたか？」

「まさか」

遥香が会話をほぐそうとしてくれているのが昭博には有難かった。

「殺すつもりで部屋に入ったのはよかったんですけどね？ただ、由里香さんの寝顔を見ていたら、考えが変わっちゃったんです」

「そうですか」

「ええ。みんな、彼女を愛し、守るために死んでいった……ここで僕が由里香を殺したら、それこそ、みんなは何のために死んでいったのかわからなくなる。それだけは避けたかったんです。だから」

昭博は遥香の顔を見つめながら言った。

「彼女には、僕が出来る限りで罪を償ってもらおうと」

「……それで」

「そうです。それで、僕は由里香を犯したんです。何度も」

遥香は、何故、昭博が妻を「抱いた」といわず、「犯した」というか、その理由がわかった。

「……そして」

「翌日、お義母様に呼び出され、そして告げられました。由里香の倉橋家追放を」

「どうしたのです？」

「そりゃ、反対しましたよ。やったコトがコトだけに、妊娠していたらどうするんだ。腹の子は後の巫女ではないのか。とね。ところが、お義母様から言われたのです。あれの腹から生まれてくるのは、人の子ではないと」

「人の子ではない？」

「ええ。だから追放する。ただ、由里香には黙っている。ただ、自分が腹を痛めた子として育てよと。あの時、思ったのは、「卑しい忍軍の者の子」つまり、人として扱う価値のない子だ。そういう意味です。正直、今までずっとそう思ってきたのです。それならそれで、僕の復讐は果たせますしね。だから、お義母様からその時教わった倉橋の巫女の話なんて、せいぜいが由里香への慰めや言い逃れ程度にしか考えていませんでした。……ただ、さすがに今は」

「だから、最後の希望といったのですか？」

「はい」

昭博は頬を掻きながら頷いた。

「お義母様の言葉は関係ない。さっきの遥香さんの言葉も関係ない。ただ、ただの僕のような卑しい身分の者の子を産むという倉橋家にとって屈辱ともいうべき人生をたどることで罪滅ぼしさせようという、僕の魂胆通り、単に普通の、僕と由里香の子であってくれればいい。そう思ったのです。それ以外に何もありませんでした」

「悠理と由忠さん同様、綾乃ちゃんへ最終的なニンゲンの遺伝子を、あなたが与える結果になってしまった。……皮肉なことですね」

「全くです」

「でも、そう思えることは素晴らしいことですね」

「時の流れは、人を変えますよ」

昭博はため息をつき、

「あの晩の僕が今の僕を見たら、なんて言うでしょうね」

「ふふっ……」

「由里香さんなしでは人生が考えられませんなんて、受け入れたでしょうか？」

「それはフォローですか？それとも本音？」

「本音、ということにしておいてください。もう夫婦喧嘩はコリゴリです」

「わかりました。ただね？昭博さんは、由里香さんに言ったそうですね」

「？」

「生まれてくる子供に、生まれなんて関係ないって——違いました？」

「似たようなこと、いった覚えがありますよ」

ちらと見た昭博の顔は、やや赤かった。

「もうあの時には、由里香さんは僕にとって生きる理由でしたからね」

「だからこそ、綾乃ちゃんがただの、普通の、女の子であって欲しいと願った」

「……それで、遥香さん」

「はい？」

「最後に、これだけはっきりしておいてください」

「どうぞ？」

「綾乃は、命の危険にさらされているのですね？」

「……ええ」

遥香は答えた。

「ただ、それは危害という意味ではなく、病としてとってくださいいね？」

「……」

「安心してください。あの子は、生まれを理由に危害を加えられることはありませんわ」

「……そう、信じたいです」

「信じてくださいな。神様の御言葉ですよ？」

「クスッ……はい」

それからしばらく、二人は沈黙した。

窓の外では名も知らない鳥が鳴いている。

「それで」

窓の景色を見ながら、遥香は言った。

「どうなさいます？」

「どうもこうも」

昭博は笑っていた。

諦めに似た何かが浮かんでいた。

「記憶を消すのでしょうか？」

「……もし、あなたがこの重荷に耐えられるのでしたら話しは別です」

「無理ですね」

昭博は肩をすくめた。

「娘が人間ではない。そんなことを背負いながら生きていく。ましてそれを綾乃の前で隠し通せる自信はありませんよ。あの子、由里香さんの娘だけにカンは鋭いんです」

「では？」

「知らない方が幸せって、本当にあるんですねえ」

「はい」

「僕なんて、知らない方が不幸だっと思うタチだから、受け入れがたかったです、いや。いざとなるとダメですねえ」

「昭博さん」

遥香は言った。

「少し、お眠りになって下さい。これは、夢だったのですから」

「——はい」

昭博は、目を閉じた。

そう。それでいいんだ。

昭博は心のどこかで納得していた。

人がなぜ、どうやって生まれてくるか？

僕が踏み込んだのは、その世界。

学者にとっての禁足の地。

目を覚ませば失われるとはいえ、僕はその一端をのぞき見たのだ。もし、知れば綾乃は怒るかもしれないけど、それでも僕は満足だ。人の身で入ることの出来ない世界を見たのだから——。

昭博の意識は、そこで途絶えた。

その頃、問題の二人がどうなっていたか？

綾乃の魔力を中和するため、二人は同じ建物に缶詰にされていた。時折、倉橋の関係者が訊ねてくるだけの静かな日々がすでに数日過ぎていく。

「？」

ついさっき、巫女が一人、綾乃と話をして帰っていったばかりだ。時計を見たらすでに午後8時を回っていた。

巫女が、何か、本を持ってきてくれたらしい。

いくらクラスメートとはいえ、世間に疎い水瀬にとって、会話の

ネタはさすがに尽き果てていただけに、有難いと思ったのだが……。

「悠理君……」

本を抱きしめながら綾乃はなぜか潤んだ瞳で水瀬を見つめていた。

「？綾乃ちゃん？」

水瀬の本能は、綾乃の態度がいつもと異なることを告げていた。

「あのね？」

近づく綾乃の手に抱きしめられているのは……。

「綾乃ちゃん？何？そのたまご倶楽部って」

綾乃の手にある本の表紙で赤ん坊が笑っていた。

水瀬は、すごくイヤな予感がした。

「……欲しいです」

ほらやっぱり。

「何を？」

「赤ちゃん……ほしいです」

全国数千万の綾乃ファンなら命すら投げ出すだろうこの一言を喰らった当の本人は、気が付くと10歩は後ろへ下がっていた。

「ど、どうしたの？いきなり」

「……私と悠理君は相性がいいそうです。そんな二人に出来た子供なら、安心して次の倉橋家を任せられるって……倉橋家を継いで、幸せな家庭を築いて欲しいって、もう毎日、みなさんが代わる代わる」

成る程。

水瀬は気が遠くなる思いがした。

（どうしよう……）

皆、綾乃と何を会話しているのかと思ったら、「跡取り産んでくれ」と迫っていたのだ。

水瀬が好きでたまらない綾乃にしては、嬉し恥ずかしとはいえ、願ったりかなったりな話だ。

だから、綾乃が本気になっているのはイヤでもわかる。

「あ、綾乃ちゃん……落ち着いて」

水瀬は、こういう時に絶対言ってはいけないセリフを喋ってしまった。

「?……落ち着いてますよ?」

ムッ。という顔になった綾乃がそれでもなお、水瀬に迫る。

「どういう意味ですか?落ち着けて」

「だっ、だって僕達まだ15歳で」

「年齢なんて関係ないです。愛し合えばそのうち……」

「まだ早い気が……」

「愛し合う前提条件として子供がいて、何が悪いのですか?」

「だっ、だから、あのね?」

「それとも何ですか?悠理君は、私のカラダ目当てだったのですか?」

「そうは言っていないよお!」

「じゃ、どういう意味ですか!?」

水瀬はもう分かり切っていた。

この後、綾乃がどうするのか。

そして、自分がどんな運命をたどるのか。

案の定、2時間ほどして、その建物は吹き飛んだという。

2時間。

水瀬にしては、よく持ったというべきだろう。

合掌。

一年後。東京駅。

「あつ。来ましたよ？」

昭博夫妻の前で新幹線から降り立ったのは、着物姿の有里香と、そして亜里砂だ。

中学校に進学した亜里砂は、由里香の目にも少しだけ大人びて見えた。

「あつ、オバさん！」

由里香に気づいた亜里砂が元気に手を振ってくる。

「お、おば……さん……ですか。み、身内にまで……」

「ははっ。由里香さん。もう、そんなトシですよ？」

「し、静御前は、有里香はまだ一人産めるって」

「いや、それは関係ないんじゃないかな」

「で、でも、ショックです」

「……どうしたの？オバさん」

駆け寄ってきた亜里砂が不思議そうな顔で由里香を見上げた。

「い、いえ。それより、亜里砂ちゃん。大きくなったわね？」

「うん。去年より10センチ伸びたのよ？」

「あらあら」

ほほえむ由里香の視線の先には、

「……」

「……」

不思議と、言葉が出ない。

あの日以降、何度も会話を交わしたはずなのに、いざとなると、言葉が出てこない。

土の下から発見された母の葬儀の翌日、別れて以来、そんなに月日は経っていないのに。

「お久しぶりですね。有里香さん」

昭博がそう言ってくれたのが、由里香にとって救いだった。

「あ、……はい。お久しぶりです……姉様も」

有里香の言葉もつまりがちだ。

「ええ……お久しぶり。元気だった？」

「はい。分家の跡はまだしばらくかかります。本家と共に東達が頑張って支えてくれますから」

「そう……亜里砂ちゃんも元気そうだから、なによりね」

「はい。姉様も変わらないようで」

「由里香さん。さ、食事にでもいきましよう」

昭博がそう言って亜里砂達の荷物に手を伸ばす。

「あつ。すみません」

「いえいえ」

「オバさん。お腹すいちゃった」

「これ、亜里砂。さっきもお弁当食べたばかりでしょう？」

「だってえ」

バツの悪そうな顔をしつつも、亜里砂も、そして有里香もどこか楽しそうだ。

「美味しいお店、予約してありますよ？」

「亜里砂ちゃんは、何か苦手なものあるのかい？」

「えっとね——」

そんな会話をかわしつつ、四人は、雑踏の中へ消えていった。

駅の外、空にはあの日見た渦はない。

あるのは平和な青空だけ。

人に必要な世界が広がるだけだ。

第二十四話 「終幕」 (後書き)

……何年かかったのでしょうか？

これが長編の第二作です。他作品が進んでも、どうしてもこれだけが進みませんでした。

もう、意地になってまとめました。

水瀬家はどうした？ 黒達は？

それはまたいずれ次回作のために伏せておきます。

●お知らせ●

「美奈子ちゃんの憂鬱」シリーズの設定資料集のページを作成しました！

題して「美奈子ちゃんの憂鬱Wiki」……もっとヒネるべきですね。

アドレスは

<http://www28.atwiki.jp/ayano01/pages/1.html>

です。

一度、ご覧下さい。

ただし、かなりのネタばれが含まれていますのでご注意ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2524b/>

呪われた姫神

2010年10月9日23時27分発行